

72-72

CZ 3820/71  
4

法令全書

詔書

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治四十一年三月十八日ヲ以テ貴族院子爵議員一  
名闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

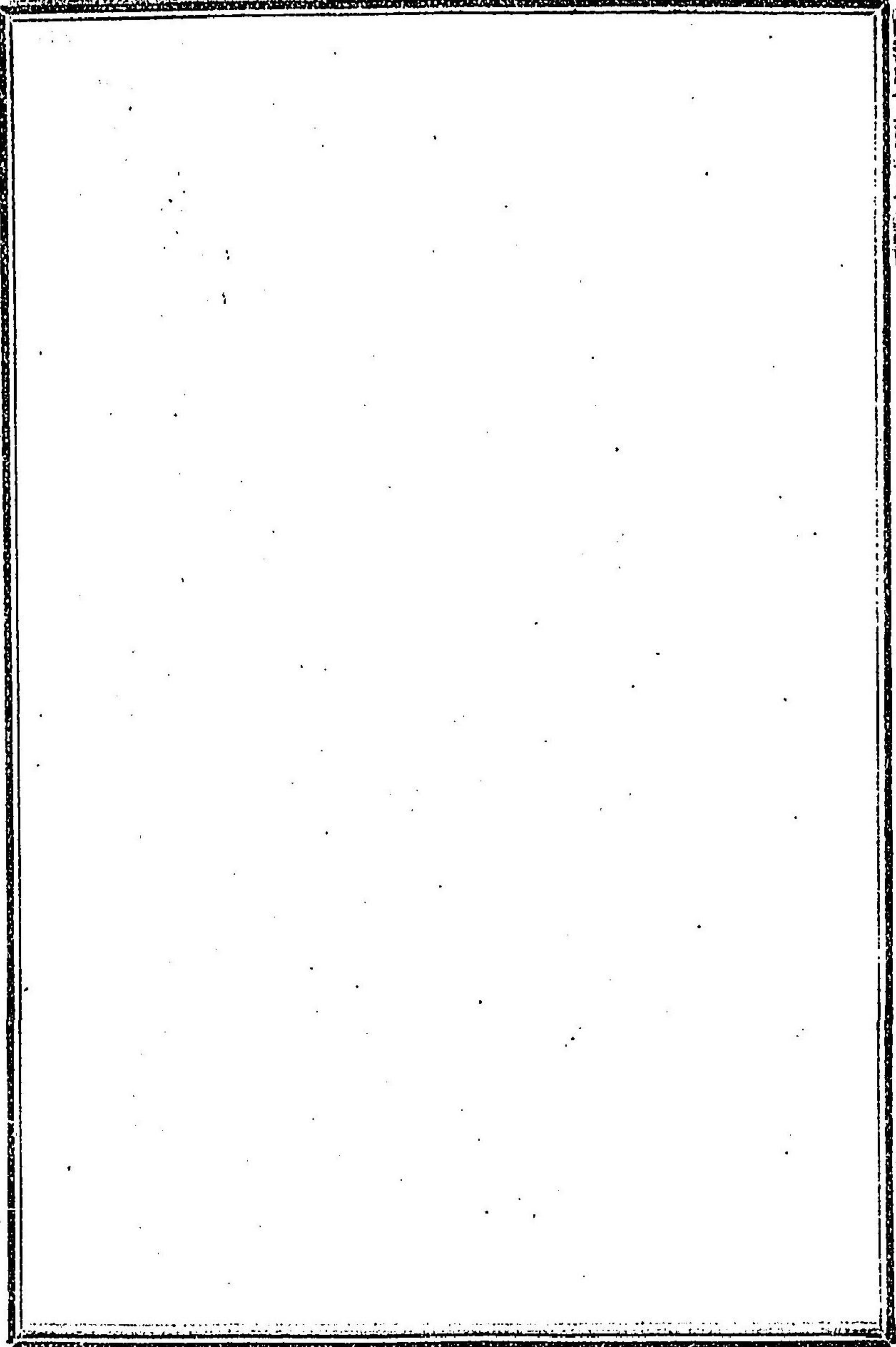
御名 御璽

明治四十一年一月七日(官報一月六日)



内閣總理大臣 侯爵西園寺公望





朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治四十一年四月二十五日ヲ以テ貴族院子爵議員一名關員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年二月二十四日(官報二月二十五日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ愛知縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員關員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日(官報二月二十八日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望



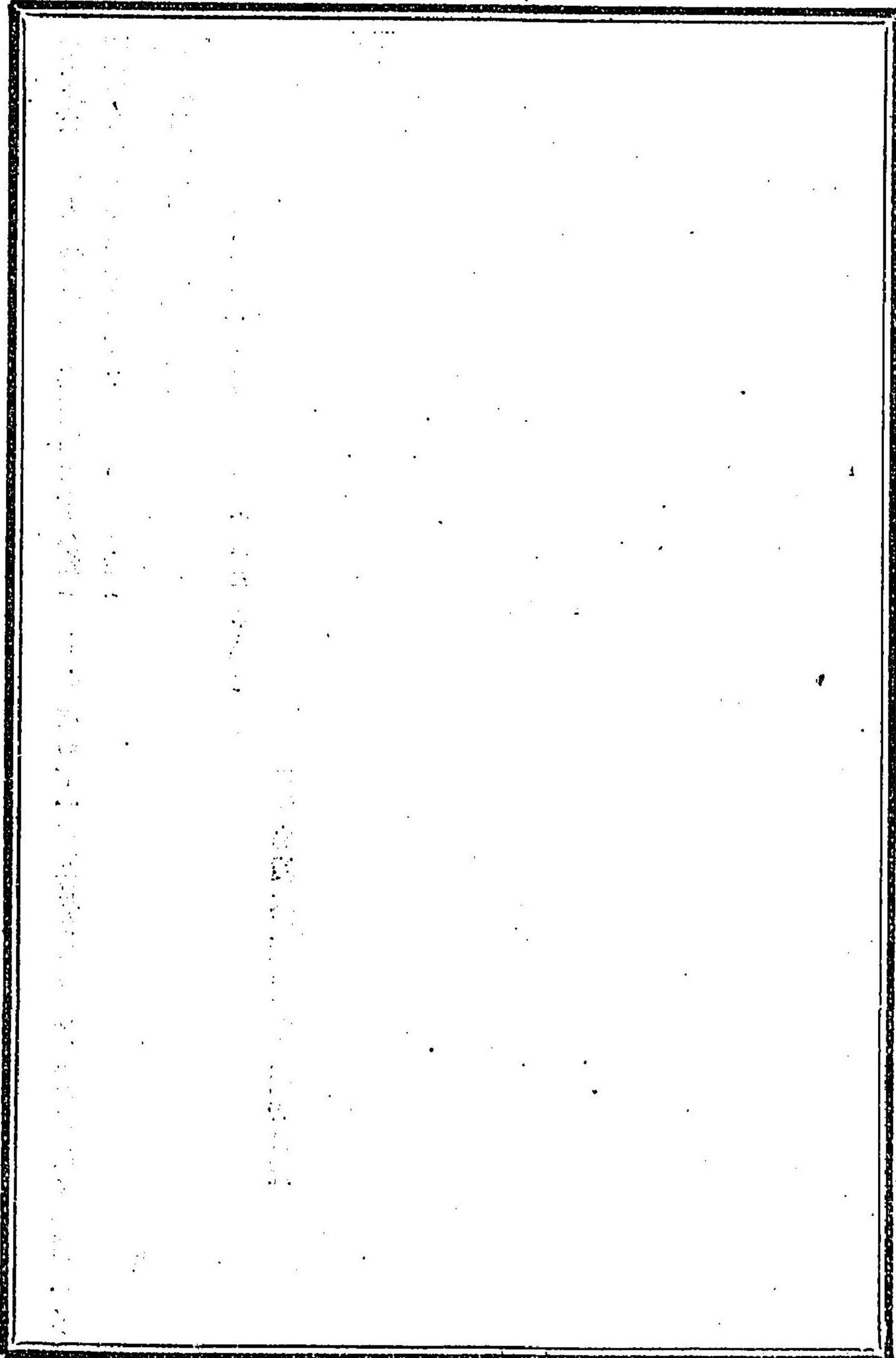
朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治四十一年五月九日ヲ以テ貴族院男爵議員一名  
闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年三月十二日(官報三月十三日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望





朕衆議院議員選舉法第二十八條ニ依リ明治四十一年五月十五日ヲ以テ衆議院議員ノ總選舉ヲ行フ  
コトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年四月十一日(官報 四月十三日)

- 内閣總理大臣 侯爵西園寺公望
- 陸軍大臣 子爵寺內正毅
- 農商務大臣 松岡康毅
- 海軍大臣 男爵齋藤實
- 大藏大臣 松田正久
- 內務大臣 原敬
- 文部大臣 男爵牧野伸顯
- 外務大臣 伯爵林董
- 司法大臣 男爵千家尊福
- 逓信大臣 子爵堀田正養

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治四十一年六月二十日ヲ以テ貴族院伯爵議員一  
名關員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス



御名 御璽

明治四十一年四月十八日(官報 四月二十日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治四十一年七月一日ヲ以テ貴族院男爵議員一名  
闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年四月二十九日(官報 四月三十日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ宮城縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員闕員ノ爲  
ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年七月十日(官報 七月十一日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ巖手縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員闕員ノ爲  
ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

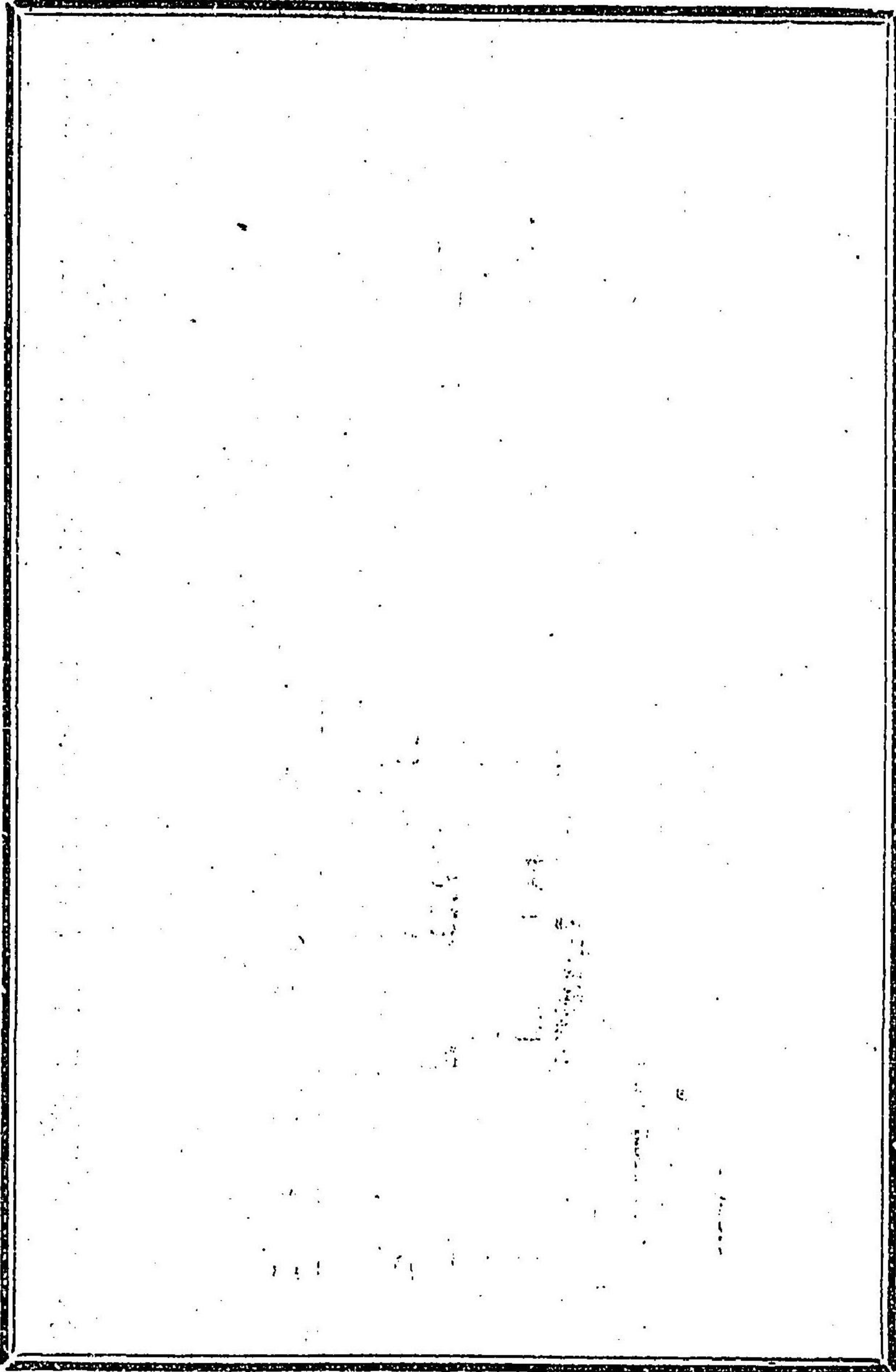
御名 御璽

明治四十一年七月十一日(官報 七月十三日)

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望



明治四十一年七月 詔書



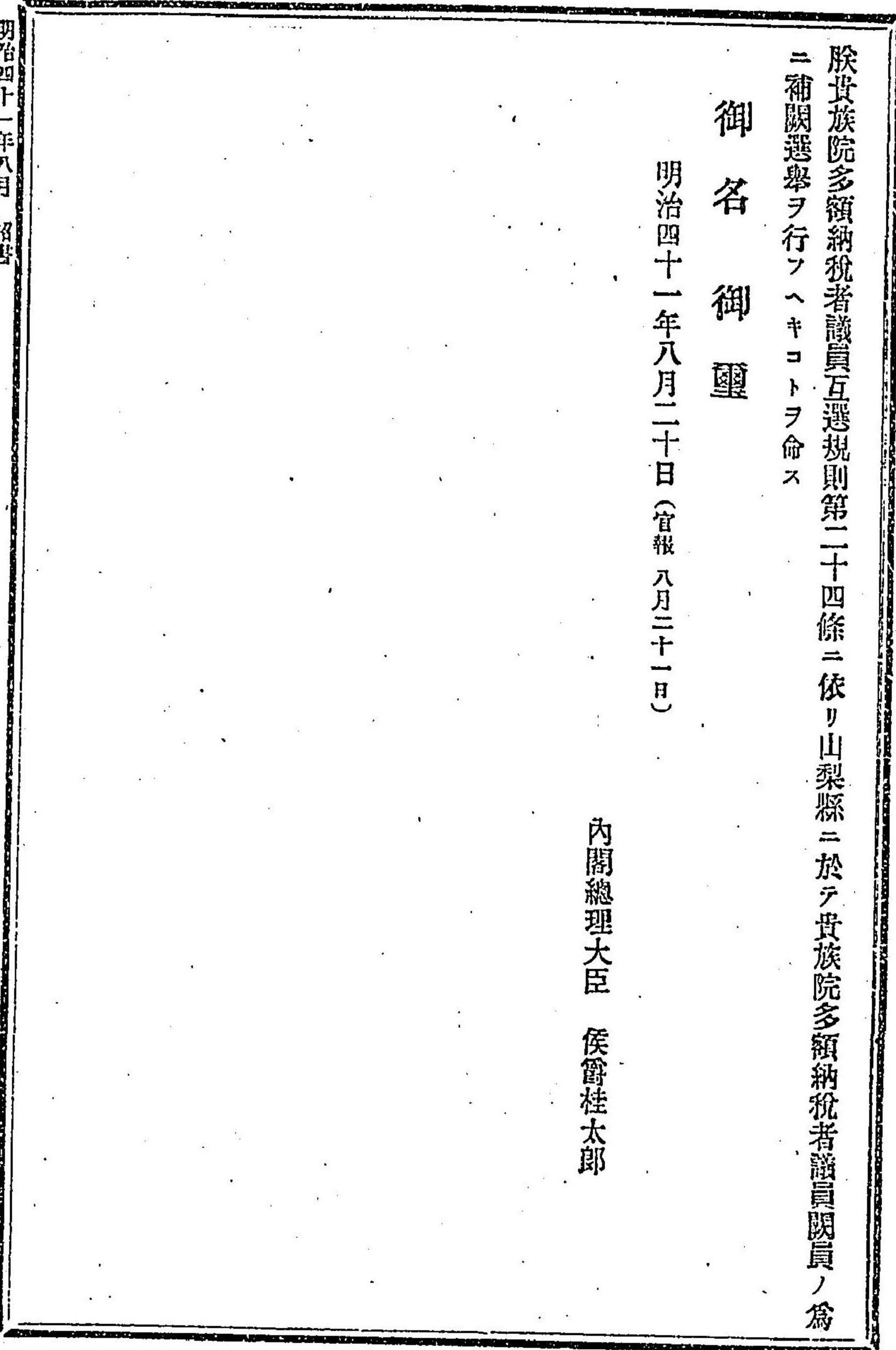
朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ山梨縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年八月二十日（官報八月二十二日）

内閣總理大臣 侯爵桂太郎

明治四十一年八月 詔書





朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ新潟縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員關員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年十月八日(官報十月九日)

内閣總理大臣 侯爵桂太郎

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ  
抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

明治四十一年十月十二日(官報十月十四日)

内閣總理大臣 侯爵桂太郎



朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ愛知縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員關員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年十一月四日(官報十一月五日)

内閣總理大臣 侯爵桂太郎

朕帝國憲法第七條及第四十一條ニ依リ本年十二月二十二日ヲ以テ帝國議會ヲ東京ニ召集ス

御名 御璽

明治四十一年十一月七日(官報十一月九日)

- 内閣總理大臣兼 侯爵桂太郎
- 陸軍大臣 子爵寺内正毅
- 外務大臣 伯爵小村壽太郎
- 海軍大臣 男爵齋藤實
- 内務大臣 法學博士男爵平田東助
- 農商務大臣 男爵大浦兼武
- 逓信大臣 男爵後藤新平
- 文部大臣 小松原英太郎
- 司法大臣 子爵岡部長職



朕帝國憲法第七條及議院法第五條ニ依リ十二月二十五日ヲ以テ帝國議會ノ開會ヲ命ス

御名 御璽

明治四十一年十二月二十四日

內閣總理大臣兼 大藏大臣	侯爵桂 太郎
陸軍大臣	子爵寺內正毅
外務大臣	伯爵小村壽太郎
海軍大臣	男爵齋藤 實
內務大臣	法學博士 田東助
農商務大臣	男爵大浦兼武
逓信大臣	男爵後藤新平
文部大臣	小松原英太郎
司法大臣	子爵岡部長職



法令全書

皇室令

朕皇室祭祀令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年九月十八日

宮内大臣 伯爵田中光顯

皇室令第一號(官報九月十九日)

皇室祭祀令

第一章 總則

- 第一條 皇室ノ祭祀ハ他ノ皇室令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外本令ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 祭祀ハ大祭及小祭トス
- 第三條 祭祀ハ附式ノ定ムル所ニ依リ之ヲ行フ
- 第四條 天皇喪ニ在ル間ハ祭祀ニ御神樂及東游ヲ行ハス
- 第五條 喪ニ在ル者ハ祭祀ニ奉仕シ又ハ參列スルコトヲ得ス但シ特ニ除服セラレタルトキハ此ノ限ニ在ラス
- 第六條 祭祀ニ奉仕スル者ハ大祭ニハ其ノ當日及前二日小祭ニハ其ノ當日齋戒スヘシ
- 第七條 陵墓祭及官國幣社奉幣ニ關スル規程ハ本令又ハ他ノ皇室令ニ別段ノ定アルモノヲ除クノ外宮内大臣勅裁ヲ經テ之ヲ定ム



第二章 大祭

第八條 大祭ニハ天皇皇族及官僚ヲ率テ親ラ祭典ヲ行フ

天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ前項ノ祭典ハ皇族又ハ掌典長ヲシテ之ヲ行ハシム

第九條 大祭及其ノ期日ハ左ノ如シ

元始祭

一月三日

紀元節祭

二月十一日

春季皇靈祭

春分日

春季神殿祭

春分日

神武天皇祭

四月三日

秋季皇靈祭

秋分日

秋季神殿祭

秋分日

神嘗祭

十月十七日

新嘗祭

十一月二十三日ヨリ二十四日ニ亙ル

先帝祭

毎年崩御日ニ相當スル日

先帝以前三代ノ式年祭

崩御日ニ相當スル日

先后ノ式年祭

崩御日ニ相當スル日

皇妣タル皇后ノ式年祭

崩御日ニ相當スル日

第十條 式年ハ崩御ノ日ヨリ三年五年十年二十年三十年四十年五十年百年及爾後每百年トス

神武天皇祭及先帝祭前項ノ式年ニ當ルトキハ式年祭ヲ行フ

第十一條 元始祭ハ賢所皇靈殿神殿ニ於テ之ヲ行フ

第十二條 紀元節祭春季皇靈祭神武天皇祭秋季皇靈祭先帝祭先帝以前三代ノ式年祭先后ノ式年祭及皇妣タル皇后ノ式年祭ハ皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ先帝祭ハ一周年祭ヲ訖リタル次年ヨリ之ヲ行フ

神武天皇祭先帝祭先帝以前三代ノ式年祭先后ノ式年祭及皇妣タル皇后ノ式年祭ノ當日ニハ其ノ山陵ニ奉幣セシム

第十三條 春季神殿祭及秋季神殿祭ハ神殿ニ於テ之ヲ行フ

第十四條 神嘗祭ハ神宮ニ於ケル祭典ノ外仍賢所ニ於テ之ヲ行フ

神嘗祭ノ當日ニハ天皇神宮ヲ遙拜シ且之ニ奉幣セシム

第十五條 新嘗祭ハ神嘉殿ニ於テ之ヲ行フ

新嘗祭ノ當日ニハ賢所皇靈殿神殿ニ神饌ヲ奉ラシメ且神宮及官國幣社ニ奉幣セシム

第十六條 新嘗祭ヲ行フ前一日綾綺殿ニ於テ鎮魂ノ式ヲ行フ但シ天皇喪ニ在ルトキハ之ヲ行ハス

第十七條 新嘗祭ハ大嘗祭ヲ行フ年ニハ之ヲ行ハス

第十八條 神武天皇及先帝ノ式年祭ハ陵所及皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ皇靈殿ニ於ケル祭典ハ掌典長之ヲ行フ

第十九條 左ノ場合ニ於テハ大祭ニ準シ祭典ヲ行フ

一 皇室又ハ國家ノ大事ヲ神宮賢所皇靈殿神殿神武天皇山陵先帝山陵ニ報告スルトキ

二 神宮ノ造營ニ因リ新宮ニ奉遷スルトキ

三 賢所皇靈殿神殿ノ造營ニ因リ本殿又ハ假殿ニ奉遷スルトキ



四 天皇太皇太后皇太后ノ靈代ヲ皇靈殿ニ奉遷スルトキ  
前項ノ規定ニ依リ祭典ヲ行フ期日ハ之ヲ勅定シ宮内大臣之ヲ公告ス

第三章 小祭

第二十條 小祭ニハ天皇皇族及官僚ヲ率テ親ヲ拜禮シ掌典長祭典ヲ行フ

天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ前項ノ拜禮ハ皇族又ハ侍從ヲシテ之ヲ行ハシム

第二十一條 小祭及其ノ期日ハ左ノ如シ

歲旦祭

一月一日

祈年祭

二月十七日

賢所御神樂

十二月中旬

天長節祭

毎年天皇ノ誕生日ニ相當スル日

先帝以前三代ノ例祭

毎年崩御日ニ相當スル日

先后ノ例祭

毎年崩御日ニ相當スル日

皇妣タル皇后ノ例祭

毎年崩御日ニ相當スル日

皇妣タル皇太后ノ例祭

崩御日ニ相當スル日

第二十條

前條ノ例祭ハ式年ニ當ルトキハ之ヲ行ハス

第二十二條 歲旦祭祈年祭及天長節祭ハ賢所皇靈殿神殿ニ於テ之ヲ行フ

但シ天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ四方拜ノ式ヲ行ヒ祈年祭ノ當日ニハ神宮及官國幣社ニ奉幣セシム

第二十三條 賢所御神樂ハ賢所ニ於テ之ヲ行フ

但シ天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ四方拜ノ式ヲ行ハス

第二十五條 例祭及式年祭ハ皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ例祭ハ一周年祭ヲ訖リタル次年ヨリ之ヲ行フ

第十條第一項ノ規定ハ前項ノ式年ニ之ヲ準用ス

第二十六條 皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃内親王王妃女王ノ靈代ヲ皇靈殿ニ遷ストキハ小祭ニ準シ祭典ヲ行フ此ノ場合ニ於テハ特旨ニ由ルノ外拜禮ヲ行ハス

前項ノ規定ニ依リ祭典ヲ行フ期日ハ之ヲ勅定ス

附式

第一編 大祭式 時ニ臨ミ儀注ヲ節略シテ之ヲ行フコトアルヘシ第二編之ニ倣フ

賢所ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス

時刻文武高官有爵者優遇者朝集所ニ參集ス 召スヘキ者ハ時ニ臨ミ之ヲ定ム以下別注ヲ施ササルモノハ皆之ニ倣フ

但シ服裝男子ハ大禮服正裝正服服制ナキ者ハ通常禮服女子ハ中禮服 代ヲ以テ之ニ關係諸員

式部學典部樂部職員ヲ除ク 亦同シ 以下參集參入及著床ノ項ニ於テ服裝ニ付キ別ニ但シ附カサルモノハ皆本儀ニ同シ

次ニ親王妃内親王王妃女王綾綺殿ニ參入ス

次ニ皇太子皇太子妃 又ハ皇太孫皇太孫妃以下之ニ倣フ 綾綺殿ニ參入ス

次ニ天皇皇后綾綺殿ニ渡御

次ニ天皇ニ御服 御束帶黃燻染御袍未成年ナルトキハ罔腋御袍空頂御黑幘以下ヲ供ス侍從天皇ノ御服ニ付キ別ニ分注ヲ施ササルモノハ皆本儀ニ同シ

次ニ天皇ニ御手水ヲ供ス 同上



- 次ニ天皇ニ御笏ヲ供ス上同
- 次ニ皇后ニ御服御五衣注ヲ施ササルモノハ皆本儀ニ付キヲ供ス女官
- 次ニ皇后ニ御手水ヲ供ス上同
- 次ニ皇后ニ御槍扇ヲ供ス上同
- 次ニ皇太子ニ儀服束帶黃丹袍未成年ナルトキハ關腋袍空頂黑幘以下皇太子ヲ供ス東宮侍
- 次ニ皇太子ニ手水ヲ供ス上同
- 次ニ皇太子ニ笏ヲ供ス上同
- 次ニ皇太子妃ニ儀服五衣小袷長袴以下皇太子妃ノ儀服ニ付キヲ供ス女官
- 次ニ皇太子妃ニ手水ヲ供ス上同
- 次ニ皇太子妃ニ槍扇ヲ供ス上同
- 此ノ間供奉諸員宮内大臣侍從長式部長官侍從皇后宮大夫東宮侍從長東宮侍從東宮主事女官 服裝ヲ易フ男子ハ衣冠單
- 次ニ式部官前導諸員參進本位ニ就ク
- 次ニ御扉ヲ開ク
- 此ノ間神樂歌ヲ奏ス
- 次ニ神饌幣物色目時ニ臨ミ之ヲ定ム以下別ニ分ヲ供ス
- 此ノ間神樂歌ヲ奏ス
- 次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス
- 次ニ天皇出御

- 式部長官宮内大臣前行シ侍從劍璽ヲ奉シ侍從長侍從武官長侍從武官御後ニ候シ親王王供奉ス
- 次ニ皇后出御
- 皇后宮大夫前行シ女官御後ニ候シ親王妃內親王王妃女王供奉ス
- 次ニ皇太子參進
- 東宮大夫前行シ東宮侍從壺切御劍ヲ奉シ東宮侍從長東宮侍從東宮武官長東宮武官御後ニ候ス
- 次ニ皇太子妃參進
- 東宮主事前行シ女官御後ニ候ス
- 次ニ天皇內陣ノ御座ニ著御侍從劍璽ヲ奉シ外陣ニ候ス
- 次ニ皇后內陣ノ御座ニ著御女官外陣ニ候ス
- 次ニ皇太子內陣ノ座ニ著ク東宮侍從壺切御劍ヲ奉シ外陣ニ候ス
- 次ニ皇太子妃內陣ノ座ニ著ク女官外陣ニ候ス
- 次ニ天皇御拜禮御告文ヲ奏ス御鈴內掌典奉仕
- 次ニ皇后御拜禮
- 次ニ皇太子皇太子妃拜禮
- 次ニ親王親王妃內親王王妃女王拜禮
- 次ニ天皇皇后入御
- 供奉出御ノ時ノ如シ
- 次ニ皇太子皇太子妃退下



供奉參進ノ時ノ如シ

次ニ諸員拜禮

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御屏ヲ閉ツ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各退下

(注意)天皇襟裾ニ在ルトキハ女官之ヲ奉抱ス以下之ニ倣フ太皇太后皇太后在ルトキハ

皇后ノ次ニ之ヲ加フ其ノ御服ハ皇后ニ同シ皇靈殿神殿ノ儀之ニ倣フ

皇靈殿ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ御給ニ

但シ皇靈祭及式年祭ニハ天皇皇后入御ノ前ニ於テ東游ヲ行ヒ紀元節祭及先帝祭ニハ當夕賢所

御神樂ノ式ニ準シ御神樂ヲ行フ又神武天皇式年祭ニハ天皇御名代衣冠ノ拜禮ヲ皇后御拜禮ノ

前ニ加ヘ太皇太后皇太后在ルトキハ其ノ御拜禮ヲ皇后御拜禮ノ次ニ加フ先帝式年祭ニハ天皇

御名代及皇后御名代袴ノ拜禮ヲ皇太子拜禮ノ前ニ加ヘ太皇太后皇太后在ルトキハ太皇太后

御拜禮及皇太后御名代袴拜禮ヲ皇后御名代拜禮ノ次ニ加フ

神殿ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ御給ニ

新嘗祭神嘉殿ノ儀

當日何時御殿ヲ裝飾ス

時刻文武高官有爵者優遇者朝集所ニ參集ス

次ニ神座ヲ奉安シ齋火ノ燈燎ヲ點ス

此ノ時庭燎ヲ燒ク

次ニ親王王綾綺殿ニ參入ス

次ニ皇太子綾綺殿ニ參入ス

次ニ天皇綾綺殿ニ渡御

次ニ天皇ニ御祭服御積未成年ナルトキハ之ヲ供セス御齋衣御積ヲ供ス侍從

次ニ天皇ニ御手水ヲ供ス上同

次ニ天皇ニ御笏ヲ供ス上同

次ニ皇太子ニ齋服冠白袍白袴ヲ供ス東宮侍從

次ニ皇太子ニ手水ヲ供ス上同

次ニ皇太子ニ笏ヲ供ス上同

此ノ間供奉諸員宮内大臣侍從長式部長官侍從服裝ヲ易フ衣冠

次ニ式部官前導諸員參進本位ニ就ク

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇出御

式部長官宮内大臣前行シ侍從左右各一侍從劔璽ヲ奉シ侍從長侍從侍從武官長侍從武官御後

ニ候シ親王王供奉ス



次ニ皇太子參進

東宮大夫前行シ 東宮侍從左右各一人脂燭ヲ乗ル 東宮侍從壺切御劔ヲ奉シ 東宮侍從長東宮侍從東宮武官長東宮武官後ニ候ス

次ニ天皇隔殿ノ御座ニ著御侍從劔匣ヲ案上ニ奉安ス

次ニ皇太子隔殿ノ座ニ著ク東宮侍從壺切御劔ヲ案上ニ奉安ス

此ノ時供奉諸員隔殿ノ庇ニ候ス

次ニ神饌ヲ行立ス

其ノ儀掌典補一人脂燭ヲ乘リ掌典一人削木ヲ執ル同一人海老鱈鹽槽ヲ執リ同一人多志良加ヲ執ル陪膳女官五衣唐衣袷小忌衣ヲ加一人御刀子筥ヲ執リ後取女官同一人御巾子筥ヲ執ル女官唐衣袷切替禮日陸絲一人神食薦ヲ執リ同一人御箸筥ヲ執リ同一人御菓子筥ヲ執ル同一人御菓子筥ヲ執ル掌典一人御飯筥ヲ執リ同一人鮮物筥ヲ執ル掌典補一人干物筥ヲ執リ同一人御菓子筥ヲ執ル同一人鮑汁漬ヲ執リ同一人海藻汁漬ヲ執ル同一人空蓋ヲ執リ同一人御羹八足机ヲ昇ク同一人御酒八足机ヲ昇キ同一人御粥八足机ヲ昇キ同一人御直會八足机ヲ昇ク

次ニ削木ヲ執レル掌典警蹕ヲ稱フ

此ノ時神樂歌ヲ奏ス

次ニ天皇本殿ノ御座ニ進御

次ニ御手水ヲ供ス陪膳女官奉仕

次ニ神饌御親供

次ニ御拜禮御告文ヲ奏ス

次ニ御直會

次ニ神饌撤下陪膳女官奉仕

次ニ御手水ヲ供ス同上

次ニ神饌退下

其ノ儀行立ノ時ノ如シ

次ニ皇太子拜禮

次ニ親王王拜禮

次ニ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ皇太子退下

供奉參進ノ時ノ如シ

次ニ諸員拜禮

次ニ各退下

(注意)天皇襟襟ニ在ルトキハ出御ナシ神饌ハ掌典長之ヲ供進ス

新嘗祭前一日鎮魂ノ儀

其ノ儀御衣振動及絲結ノ式ヲ行フ

神宮遙拜ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス

時刻親王王便殿ニ參入ス



次ニ天皇便殿ニ渡御

次ニ御服ヲ供ス侍從

次ニ御手水ヲ供ス侍從

次ニ御笏ヲ供ス同上

此ノ間供奉諸員侍從長 服裝ヲ易フ衣冠

次ニ出御

掌典長前行シ侍從劔璽ヲ奉シ侍從長侍從武官長侍從武官御後ニ候シ親王王宮内大臣式部長官供奉ス

次ニ御遙拜

次ニ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ各退下

神宮ニ勅使發遣ノ儀

當日何時御殿ヲ裝飾ス

時刻宮内大臣式部長官式部官著床

但シ服裝小禮服禮裝禮服關係諸員亦同シ

次ニ勅使衣冠 著床

次ニ出御御直

侍從長前行シ侍從御劔ヲ奉シ侍從侍從武官長侍從武官御後ニ候ス

次ニ幣物御覽掌典長

次ニ御祭文ヲ勅使ニ授ク宮内大臣

次ニ幣物ヲ辛櫃ニ納ム

次ニ勅使幣物ヲ奉シ殿ヲ辭ス

此ノ時式部官警蹕ヲ稱フ

次ニ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ各退下

神宮ニ奉幣ノ儀

其ノ儀神宮ノ祭式ニ依ル

山陵ノ儀

當日早旦陵所ヲ裝飾ス

時刻文武高官有爵者優遇者幄舎ニ參集ス

次ニ儀仗兵陵門外ニ整列ス

次ニ天皇御休所ニ著御

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間奏樂

次ニ掌典祝詞ヲ奏ス



次ニ出御御正

式部長官宮内大臣前行シ侍從劔璽ヲ奉シ侍從長侍從侍從武官長侍從武官御後ニ候シ親王王供奉ス

次ニ御拜禮御告文ヲ奏ス

次ニ親王王拜禮

次ニ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ諸員拜禮

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間奏樂

次ニ各退下

(注意)先帝式年祭ニハ皇后ヲ天皇ノ次ニ加ヘ皇太后在ルトキハ皇后ノ次ニ之ヲ加フ其

ノ御服ハ御中禮服トス

山陵ニ勅使發遣ノ儀

其ノ儀神宮ニ勅使發遣ノ式ノ如シ

山陵ニ奉幣ノ儀

當日早旦陵所ヲ裝飾ス

時刻儀仗兵陵門外ニ整列ス

次ニ勅使衣冠參進

次ニ勅使本位ニ就ク

次ニ神饌ヲ供ス

此ノ間奏樂

次ニ掌典祝詞ヲ奏ス

次ニ幣物ヲ供ス

次ニ勅使進テ祭文ヲ奏ス

次ニ勅使拜禮

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間奏樂

次ニ各退下

神宮賢所皇靈殿神殿及山陵ニ親告ノ儀

神宮賢所皇靈殿神殿ノ造營ニ因リ奉遷ノ儀

以上其ノ儀時ニ臨ミ之ヲ定ム

天皇ノ靈代奉遷ノ儀太皇太后皇太后ノ靈代奉遷ノ儀之ニ準ス

皇靈殿奉告ノ儀

當日早旦御殿ヲ裝飾ス

時刻御扉ヲ開ク

此ノ間奏樂

次ニ神饌ヲ供ス



此ノ間奏樂

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ神饌ヲ撤ス

此ノ間奏樂

次ニ御扉ヲ閉ツ

此ノ間奏樂

次ニ各退下

權殿ノ儀

時刻宮内高等官及先帝禁近奉仕者著床

次ニ御簾ヲ褰ク

此ノ間奏樂

次ニ神饌ヲ供ス

此ノ間奏樂

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇御代拜侍從奉仕 衣冠奉仕

次ニ皇后御代拜女官奉仕 衣冠奉仕

次ニ皇太子代拜東宮侍從奉仕 衣冠奉仕

次ニ皇太子妃代拜女官奉仕 衣冠奉仕

次ニ諸員拜禮

次ニ神饌ヲ撤ス

此ノ間奏樂

次ニ掌典長靈代ヲ皇靈殿ニ奉遷ス諸員供奉

此ノ時式部官響蹕ヲ稱フ

其ノ儀本編皇靈殿ノ式ノ如シ

第二編 小祭式

賢所ノ儀

當日早且御殿ヲ裝飾ス

時刻宮内勅任官宮内奏任官總代各一人著床

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間奏樂ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間奏樂ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ出御是ヨリ先キ綾綺殿ニ於テ天皇渡御、皇太子參入、天皇ニ御服、御手水、御笏ヲ供シ、皇太子ニ其ノ

項ヲ掲ケス

式部長官前行シ侍從御劔ヲ奉シ侍從長侍從侍從武官長侍從武官御後ニ候ス

次ニ御拜禮御鈴内掌 典奉仕



次ニ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ皇太子參進

東宮大夫前行シ東宮侍從御劔ヲ奉シ東宮侍從長東宮侍從東宮武官長東宮武官後ニ候ス

次ニ皇太子拜禮訖テ退下

供奉參進ノ時ノ如シ

次ニ諸員拜禮

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ツ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各退下

皇靈殿ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ御鈴ノ儀ナシ

但シ例祭及式年祭ニハ著床者中ニ親王王及宮内大臣又ハ宮内次官ノ内一人ヲ加ヘ皇后ヲ天皇

ノ次ニ皇太子妃ヲ皇太子ノ次ニ加フ從テ此ノ場合ニ於テハ綾綺殿ニ於ケル儀注中ニ皇后渡御

皇太子妃參進皇后ニ御服御手水御檢扇ヲ供シ皇太子妃ニ儀服手水檢扇ヲ供スルノ項アルコト

亦第一編賢所ノ儀ニ同シ

神殿ノ儀

其ノ儀賢所ノ式ノ如シ御鈴ノ儀ナシ

四方拜ノ儀歳旦祭賢所ノ式ニ先タチ之ヲ行フ

當日早日式場ヲ裝飾ス

時刻出御

掌典長前行シ侍從御劔ヲ奉シ侍從長侍從武官長侍從武官御後ニ候シ宮内大臣式部長官供

奉ス

次ニ御拜禮訖テ入御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ各退下

(注意)本儀ニ於ケル天皇ノ御服及供奉員中侍從長侍從ノ服裝ハ賢所ノ儀ニ同シ

賢所御神樂ノ儀

當日何時御殿ヲ裝飾ス

時刻大勳位親任官及各廳勅任官總代宮内奏任官總代各一人有爵者總代每爵一人著床

次ニ御扉ヲ開ク

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ神饌幣物ヲ供ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇出御是ヨリ先キ綾綺殿ニ於テ天皇皇后波御皇太子皇太子妃參入天皇ニ御服御手水御檢扇ヲ供シ及



供奉諸員服裝ヲ易フルノ儀アリ總テ第一編  
既所ノ儀ニ同キヲ以テ今其ノ項ヲ掲ケス

式部長官前行シ侍從御劔ヲ奉シ侍從長侍從侍從武官長侍從武官御後ニ候シ親王王供奉ス  
次ニ皇后出御

皇后宮大夫前行シ女官御後ニ候シ親王妃内親王王妃女王供奉ス  
次ニ皇太子參進

東宮大夫前行シ東宮侍從御劔ヲ奉シ東宮侍從長東宮侍從東宮武官長東宮武官御後ニ候ス  
次ニ皇太子妃參進

東宮主事前行シ女官御後ニ候ス  
次ニ天皇皇后御拜禮

次ニ皇太子皇太子妃拜禮

次ニ親王親王妃内親王王妃女王拜禮

次ニ御神樂

次ニ天皇皇后入御  
供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ皇太子皇太子妃退下  
供奉參進ノ時ノ如シ

次ニ諸員拜禮

次ニ幣物神饌ヲ撤ス

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ御扉ヲ閉ツ

此ノ間神樂歌ヲ奏ス

次ニ各退下

神宮ニ勅使發遣ノ儀

其ノ儀第一編神宮ニ勅使發遣ノ式ニ準ス

神宮ニ奉幣ノ儀

其ノ儀神宮ノ祭式ニ依ル

皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃内親王王妃女王ノ靈代ヲ皇靈殿ニ遷スノ儀

皇靈殿奉告ノ儀

權殿ノ儀

以上其ノ儀第一編天皇ノ靈代奉遷ノ儀中各其ノ式ニ準ス

皇靈殿祭典ノ儀

特旨ニ由リ天皇親ヲ拜禮ヲ行フトキハ其ノ儀本編皇靈殿ノ式ノ如シ自餘ハ掌典長ノ主祭ニ止ム但  
シ皇后ノ靈代ヲ遷ストキハ天皇御代拜禮<sub>衣冠</sub>及皇太子皇太子妃拜禮ノ儀注ヲ加フ



朕宮内傳染病豫防令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年十月九日

宮内大臣 伯爵田中光顯

内閣總理大臣 侯爵桂 太郎

内務大臣 法皇御弟 伯爵平田東助

皇室令第二號 (官報十月十日)

宮内傳染病豫防令

第一條 本令ニ於テ傳染病ト稱スルハ左ニ掲ケタル三類ノ傳染病及其ノ疑似症ヲ謂ヒ有病地ト稱スルハ第一類ノ傳染病又ハ其ノ疑似症流行シ若ハ流行ノ兆アリテ宮内大臣ニ於テ有病地ト指定シタル土地ノ區域ヲ謂フ

第一類 「ベスト」虎列刺、赤痢(疫痢ヲ含ム)、腸窒扶私、痘瘡(假痘ヲ含ム)、發疹窒扶私及猩紅熱

第二類 實布埤利亞(格魯布ヲ含ム)、麻疹、流行性感冒及流行性腦脊髄膜炎

第三類 肺結核、癩丹毒「トヲホーム」、膿漏性結膜炎及傳染性皮膚病

前項ニ掲ケタル傳染病ノ外本令ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要ト認メタル傳染病アルトキハ宮内大臣之ヲ指定ス

第二條 第一類ノ傳染病ニ付キ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一定ノ期間宮中ニ參入スルコトヲ得ス



一 傳染病ニ罹リタル者

二 患者ニ接シ又ハ之ト同居シタル者

三 宮中參入中又ハ退出後傳染病ニ罹リタル者ト同一ノ場所ニ在リタル者

四 病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル物件ニ接シタル者

五 患者ノ在ル家其ノ他病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル家ニ立寄リタル者

六 傳染病豫防法ニ依リ隔離ノ處分ヲ受ケタル者

第三條 第二類ノ傳染病ニ罹リタル者ハ全治ノ後ニ非サレハ宮中ニ參入スルコトヲ得ス

第四條 流行性腦脊髄膜炎ニ付キ第二條第二號乃至第四號ノ一ニ該當スル者ハ一定ノ期間宮中ニ參入スルコトヲ得ス

第五條 左ニ掲ケタル者ハ宮中ニ參入スルコトヲ得ル場合ニ在リテモ仍一定ノ期間側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得ス

一 第一類ノ傳染病ニ付テハ「ペスト」ヲ除キ第二條第一號乃至第五號ノ一ニ該當シ「ペスト」及虎列刺ニ付テハ同條第六號ニ該當スル者但シ腸窒扶私ニ付テハ同條第五號ニ該當スル者ヲ除ク

二 麻疹ニ付テハ第二條第一號乃至第五號ノ一ニ該當シ實布埤利亞及流行性腦脊髄膜炎ニ付テハ同條第二號乃至第四號ノ一ニ該當シ流行性感冒ニ付テハ同條第一號ニ該當スル者但シ曾テ麻疹ニ罹リタルコトアル者ニ付テハ同條第二號乃至第五號ノ一ニ該當スル者ヲ除ク

三 有病地ヲ發シ又ハ之ニ立寄リタル者

第六條 第三類ノ傳染病ニ罹リタル者ハ全治ノ後ニ非サレハ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得ス

第七條 宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルコトヲ得サル期間及其ノ起算ノ日ハ宮内大臣之ヲ定ム

第八條 第二條乃至第六條ノ規定ハ勅旨ニ由リ宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スル者ニ之ヲ適用セス

第九條 一定ノ期間ヲ經過シ又ハ疾病ノ全治シタル後若ハ前條ノ規定ニ依リ宮中ニ參入シ側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スル者ハ豫メ沐浴更衣シ病毒汚染ノ疑アル携帶品アルトキハ之ヲ消毒スヘシ但シ職服ノ着用ヲ必要トシ其ノ他更衣スルコト能ハサル事由アル場合ニ限り消毒ヲ以テ更衣ニ代フルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ宮内大臣ハ必要ト認メタルトキハ健康診斷又ハ携帶品ノ消毒ヲ行ハシムルコトヲ得

第十條 前條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス

一 第五條第三號ニ該當スル者及「ペスト」ニ付キ隔離ノ處分ヲ解除セラレタル者宮中ニ參入スルトキ

二 腸窒扶私、實布埤利亞及流行性腦脊髄膜炎ニ付テハ第二條第五號ニ該當シ流行性感冒ニ付テハ同條第二號ニ該當スル者及曾テ麻疹ニ罹リタルコトアル者ニシテ同條第二號乃至第五號ノ一ニ該當スル者側近ニ奉仕シ又ハ臨時進謁スルトキ

第十一條 宮中參入中又ハ退出後第一類若ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル者アルトキハ宮内大臣ハ病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル場所及物件ノ消毒ヲ行ハシムヘシ



第十二條 傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮内大臣ハ宮中ノ場所ヲ限リ參入ヲ制限又ハ禁止スルコトヲ得

第十三條 有病地又ハ交通遮斷區域内ヲ發シ若ハ經過シタル物件ハ消毒ヲ行ヒタル後ニ非サレハ之ヲ宮中ニ搬入スルコトヲ得ス

宮中ニ搬入シタル物件ニシテ有病地又ハ交通遮斷區域内ヲ發シ若ハ經過シタル疑アルトキハ宮内大臣ハ其ノ包裝ヲ解カシメ又ハ消毒セシムヘシ

前二項ノ規定ハ有病地又ハ交通遮斷區域内ヲ發シ若ハ經過シ又ハ其ノ疑アル物件ト混同シタル物件ニ之ヲ準用ス

第十四條 傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮内大臣ハ左ノ各號ノ全部又ハ一部ヲ施行スルコトヲ得

一 病毒傳播ノ虞アル物件ノ搬入ヲ制限若ハ停止シ又ハ既ニ受入レタル物件ヲ廢棄スルコト

二 病毒傳播ノ虞アル水ノ使用ヲ制限又ハ停止スルコト

三 清潔方法ヲ行フコト

四 鼠族ノ驅除ヲ行フコト

第十五條 傳染病流行ノ狀況ニ依リ宮内大臣ハ勅裁ヲ經テ宮中ニ臨時傳染病豫防委員ヲ置キ其ノ職制ヲ定ムルコトヲ得

第十六條 宮内大臣ニ於テ傳染病又ハ有病地ヲ指定スルトキ及有病地ヲ解除スルトキハ之ヲ告示ス

第十七條 第二條乃至第六條第九條第一項第十條第十三條第一項第三項ノ規定其ノ他本令ノ施行ニ關スル宮内大臣ノ命令ニ違反シタル者アルトキハ勅旨ニ由リ又ハ宮内大臣ノ命令ヲ以テ宮中

ノ參入ヲ停止又ハ禁止スルコトアルヘシ

第十八條 本令ノ規定ハ東京御所其ノ他東京府下所在ノ宮殿及行幸啓ノ場所ニ之ヲ準用ス

宮内大臣ハ必要ト認メタルトキハ本令ノ全部又ハ一部ヲ東京府外所在ノ宮殿及皇族ノ殿邸並旅館ニ準用スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ本令ノ全部又ハ一部ヲ準用スル場合ニ於テハ宮内大臣ハ痘咳、水痘、風疹又ハ流行性耳下腺炎ニ罹リタル者ニ付テモ一定ノ期間其ノ參入ヲ止ムルコトヲ得實布埜利亞ニ付

キ第二條第一號乃至第四號ノ一ニ該當スル者亦同シ

第八條及第九條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 本令ノ施行ニ付キ必要アルトキハ宮内大臣ハ皇宮警察官ノ職務ノ全部又ハ一部ヲ地方警察官ニ委託シテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十條 本令ノ施行ニ付キ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノアルトキハ宮内大臣ハ主任ノ國務大臣ト協定ヲ經ヘシ

附則

本令ハ明治四十一年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス



法令全書

法律

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル砂糖消費稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十二日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第一號

砂糖消費稅法中左ノ通改正ス

第三條中「一圓ヲ三圓ニ、一圓六十錢ヲ五圓五十錢ニ、二圓二十錢ヲ八圓五十錢ニ、三圓八十錢ヲ十圓ニ改ム

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別稅法中砂糖消費稅ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

法律第十三號砂糖消費稅法(明治三十四年三月三十日)抄錄

第三條 消費稅ノ割合左ノ如シ

第一種 砂糖色相和關標本第八號未滿ノ砂糖及糖蜜

百斤ニ付金一圓

明治四十一年二月 法律 第一號



第二種 砂糖色相和蘭標本第八號以上第十五號未滿ノ砂糖 百斤ニ付金一圓六十錢  
第三種 砂糖色相和蘭標本第十五號以上第二十號以下ノ砂糖及糖水 百斤ニ付金二圓二十錢  
第四種 砂糖色相和蘭標本第二十號ヲ超ユル砂糖及水砂糖 百斤ニ付金二圓八十錢

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル府縣制中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
内務大臣 原 敬

法律第二號(官報二月二十八日)

府縣制中左ノ通改正ス

第三百二十八條ニ左ノ一項ヲ加フ

沖繩縣ニ關シテハ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル沖繩縣ノ負擔及國庫補助ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

内務大臣 原 敬

法律第三號(官報二月二十八日)

法律中府縣ノ負擔及國庫補助ニ關シ沖繩縣ニ付設ケタル特例ハ之ヲ廢止ス

附則

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル關稅定率法輸入稅表中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第四號(官報二月二十八日)

關稅定率法輸入稅表中左ノ通改正ス

五〇 果汁(砂糖ヲ加ヘタルモノ)及糖水

五一 葡萄酒麥芽糖及飴

五三 蜂蜜

五五 菓子

五六 シヤム、フルートセリ類

從價	從價	從價	從價	同
六割	九二五割	六割	二六〇〇	一七〇〇
每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	同
價	價	價	價	同
六	九二五	六	二六〇〇	一七〇〇
割	割	割	割	割



五七	砂糖、糖蜜、糖水又ハ蜂蜜ヲ以テ貯藏シタル蔬菜及果實	同	同	一〇、五〇
五八	清酒	同	同	〇、一七
五九	支那酒(醸造シタルモノ)	同	同	〇、一七
六〇	麥酒	同	同	〇、一七
六一	葡萄酒(各種)	同	同	〇、一七
	一 釀入ノモノ	同	同	〇、九五
	二 樽入ノモノ	同	同	〇、三五
六二	シヤムパン	同	同	二、四〇
六三	其ノ他ノ酒類	同	同	〇、六〇
	一 釀入ノモノ	同	同	一、一〇
	二 其ノ他	同	同	〇、六〇
六四	酒類	同	同	〇、七三
一三七	變性酒精	同	同	〇、七三
一五三	酒精劑(阿片丁幾ヲ除ク)	同	同	〇、七三
附則	但シ攝氏十五度ニ於テ〇、七九四七ノ比重ヲ有スルモノヲ純酒精トシ原容量百分中純酒精ノ容量五十以上一ヲ増ス毎一リートルニ付一錢ヲ加フ	同	同	〇、七三
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム				

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル日本大博覽會出品外國貨物免稅ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第五號(官報二月二十八日)

第一條 日本大博覽會ニ出品スル外國貨物ニハ輸入稅及消費稅ヲ免ス會場内ニ於ケル興行ノ爲輸  
入スル外國貨物ニ付亦同シ

前項ノ貨物ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニハ輸入稅及消費稅ヲ課ス

一 外國ニ積戻ス爲ニ非スシテ會場外ニ搬出スルトキ

二 閉會後四月以内ニ外國ニ積戻ササルトキ

三 會場ニ於テ即時ニ賣渡シ又ハ營利ノ目的ヲ以テ消費スルトキ

第二條 豫メ輸入稅及消費稅ノ擔保ヲ提供スルトキハ其ノ擔保價額ノ範圍内ニ於テハ稅金納付前  
外國貨物ヲ會場外ニ搬出シ又ハ會場ニ於テ即時ニ賣渡シ若ハ營利ノ目的ヲ以テ消費スルトキ  
得

前項ノ擔保ハ金錢又ハ有價證券ニ限ル

閉會後四月以内ニ稅金ノ納付ヲ爲ササルトキハ擔保ヲ以テ稅金ニ充ツ

第三條 左ノ外國貨物ニハ輸入稅及消費稅ヲ免ス



- 一 會場内ニ於ケル外國政府ノ建築物ニ使用スル物品及材料並外國政府ノ出品物
  - 二 博覽會ニ關シ本邦ニ派遣セラレタル外國官吏ノ自用品
  - 三 出品物陳列又ハ裝飾ノ用ニ供スル物品及材料
  - 四 會場内ニ於テ廣告ノ爲又ハ見本トシテ無償ニテ讓與セララル物品
- 附則  
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル韓國ニ於ケル鐵道用品資金會計ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第六號(官報二月二十八日)

韓國ニ於テ帝國ノ經營スル鐵道ニ於テハ其ノ用品資金會計ノ經營ニ妨ナキ限り一般ノ需要ニ應ジ機械其ノ他ノ物件ノ製作修理ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ鐵道用品資金會計ニ屬スル用品ヲ以テ其ノ材料ニ充ツルコトヲ得

御名 御璽

明治四十一年三月三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
農商務大臣 松岡康毅

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國有林野法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第七號(官報三月四日)

國有林野法中左ノ通改正ス  
第二十六條中「及沖繩縣ヲ削リ左ノ一項ヲ加フ  
沖繩縣ノ國有林野ノ貸付、使用及賣拂並其ノ產物ノ處分ニ關シ必要アル場合ニ於テハ勅令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得  
附則

本法ハ明治四十一年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第八十五號國有林野法(明治三十二年三月二十三日官報)抄錄  
第二十六條 此ノ法律ハ北海道及沖繩縣ニ施行セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル間接國稅犯則者處分法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽



明治四十一年三月五日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第八號(官報 三月六日)

間接國稅犯則者處分法中左ノ通告正ス

第七條第一項中「所有者」ヲ「所有者又ハ所持者」ニ、同條第二項及第十八條中「所有者」ヲ「所有者所持者」ニ改ム

第八條ニ左ノ一項ヲ加フ

日没前ヨリ開始シタル臨檢搜索又ハ差押ニシテ必要アル場合ハ日没後迄之ヲ繼續スルコトヲ得  
第十四條中「但シ犯則者通告ノ旨ヲ履行スル資力ナシト認ムルトキハ直ニ告發スヘシ」ヲ「但シ沒收品ニ該當スル物品ニ付テハ納付ノ申出ノミヲ爲スヘキ旨ヲ通告スルコトヲ得」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

犯則者通告ノ旨ヲ履行スルノ資力ナシト認ムルトキハ前項ノ通告ヲ要セス直ニ告發スヘシ  
第十六條ニ左ノ一項ヲ加フ

第十四條第一項但書ニ依ル通告ニ對シ犯則者通告ノ旨ヲ履行シタル場合ニ於テ沒收品ニ該當スル物品ヲ所持スルトキハ公賣其ノ他必要ノ處分ヲ爲ス迄之ヲ保管スルノ義務アルモノトス但シ保管ニ要スル費用ハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

犯則者ノ居所分明ナラサル爲又ハ犯則者書類ノ受領ヲ拒ミタル爲通告スルコト能ハサルトキ亦前項ニ同シ

〔參照〕

法律第六十七號間接國稅犯則者處分法(明治三十三年三月十七日官報)抄錄

第七條第一項及第二項

收稅官吏犯則事實ヲ證明スヘキ物件、帳簿、書類等ヲ差押ヘタルトキハ其ノ差押目錄ヲ作ルヘシ但シ所有者ハ其ノ差押目錄ノ謄本ヲ請求スルコトヲ得

差押物件ハ便宜ニ依リ保管證ヲ徵シ所有者又ハ市町村ヲシテ保管セシムルコトヲ得差押物件ノ保管證ニ關シテハ印紙稅ヲ納ムルコトヲ要セス

第八條 收稅官吏ハ日没ヨリ日出マテノ間臨檢搜索又ハ差押ヲ爲スコトヲ得ス但シ現行犯ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 稅務署長ハ犯則事件ノ調査ニ依リ犯則ノ心證ヲ得タルトキハ其ノ理由ヲ明示シ罰金若ハ科料ニ相當スル金額沒收品ニ該當スル物品、徵收金ニ相當スル金額及書類送達差押物件ノ運搬、保管ニ要シタル費用ヲ指定ノ場所ニ納付スヘキ旨ヲ通告スヘシ但シ犯則者通告ノ旨ヲ履行スル資力ナシト認ムルトキハ直ニ告發スヘシ

第十七條 犯則者通告ヲ受ケタル日ヨリ七日以内ニ之ヲ履行セサルトキハ稅務署長ハ告發ノ手續ヲ爲スヘシ但シ七日ヲ過クルモ告發前ニ履行シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 犯則事件ヲ告發シタル場合ニ於テ差押物件アルトキハ差押目錄ト共ニ裁判所ニ引續クヘシ前項ノ差押物件所有者又ハ市町村ノ保管ニ係ルトキハ保管證ヲ以テ引續ク爲シ差押物件引續ノ旨ヲ保管者ニ通知スヘシ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル學校及圖書館資金所屬土地賣却代金ヲ一般會計ニ繰入ルル件ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月五日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久  
文部大臣 男爵牧野伸顯



法律第九號(官報三月六日)

學校及圖書館特別會計法ニ依リ資金トシテ所有スル東京高等師範學校及東京盲啞學校用地中不用ニ屬スルモノハ明治四十一年度乃至四十三年度ニ於テ東京高等師範學校及東京盲啞學校新營費ニ充ツル爲之ヲ賣却シ其ノ代金中新營費ニ相當スル金額ヲ一般會計ニ繰入ルルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所構成法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十二日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 松田正久

法律第十號(官報三月十三日)

裁判所構成法中左ノ通改正ス

第五十八條中「三年間」ヲ「一年六月以上」ニ改ム

附則

本法ハ明治四十一年三月十九日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

法律第六號裁判所構成法(明治二十三年二月十日官報)抄録

第五十八條第二項

第一回試験ニ及第シタル者ハ第二回試験ヲ受クルノ前試験トシテ裁判所及檢事局ニ於テ三年間實地修習ヲ爲スコトヲ要ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル造幣局据置運轉資本増加及設備擴張費ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十一號(官報三月十四日)

明治四十一年度ニ於テ造幣局据置運轉資本ニ百五十萬千七百八十七圓二十八錢一厘ヲ増加ス

前項資本ノ増加及明治四十一年度乃至四十二年度ニ於ケル造幣局ノ設備擴張ニ要スル經費ニ充用スルカ爲貨幣整理資金ノ内二百三萬千九百九十二圓ヲ限リ一般會計ニ繰入ルルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治三十八年法律第十七號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十二號(官報三月十四日)

明治三十八年法律第十七號中左ノ通改正ス



第一條中「煙草專賣局」ヲ「專賣局」ニシテ千六百萬圓ヲ二千萬圓ニ改ム

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第十七號(明治三十八年二月十六日官報)抄錄

第一條 煙草專賣局及製鐵所ノ提振運轉資本ニ不足ヲ生シタルトキハ大藏大臣ハ融通證券ノ發行ニ依リ一時之ヲ補足スルコトヲ得但シ其ノ金額ハ煙草專賣局ニ在リテハ千六百萬圓製鐵所ニ在リテハ千二百萬圓ヲ超過スルコトヲ得ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル事業公債條例中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十二號(官報三月十四日)  
事業公債條例中左ノ通改正ス

第一條中「一億八千五百萬圓」ヲ「二億三百五十萬圓」ニ改ム

〔參照〕

法律第五十九號事業公債條例(明治二十九年三月三十日官報)抄錄

第一條 事業公債ハ既設官線鐵道改良、北海道鐵道建設、製鋼事業、電話擴張ノ費途、煙草專賣資金及國防事業ノ費用ニ充ツルカ爲シ額面總額八千五百萬圓ヲ限リ漸次之ヲ募集ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣事業公債法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十四號(官報三月十四日)

臺灣事業公債法中左ノ通改正ス

第一條中「四千百萬圓」ヲ「七千二百五十萬圓」ニ改メ第五號ノ次ニ左ノ如ク加フ

六 水利事業

〔參照〕

法律第七十五號臺灣事業公債法(明治三十二年三月二十二日官報)抄錄

第一條 臺灣ニ於テ左ノ事業ニ要スル經費ニ充ツル爲メ政府ハ四千百萬圓ヲ限リ公債ヲ募集スルコトヲ得

- 一 鐵道敷設
- 二 土地調査
- 三 築港
- 四 廳舎建築
- 五 大租權整理

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍艦水雷艇補充基金組入ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽



明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
海軍大臣 男爵齋藤實  
大藏大臣 松田正久

法律第十五號(官報三月十四日)

軍艦水雷艇補充基金特別會計法ニ依ル組入金ハ當分ノ内同法第三條及第四條ノ計算方ニ依ラス千二百萬圓ノ範圍内ニ於テ其ノ組入ヲ爲スコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵道敷設法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
陸軍大臣 子爵寺內正毅  
大藏大臣 松田正久  
逓信大臣 原 敬

法律第十六號(官報三月十四日)

鐵道敷設法中左ノ通改正ス

第二條第一項中近畿線ノ部第四號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

一 三重縣下山田ヨリ鳥羽ニ至ル鐵道

第七條第一項中第十三號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

一 近畿豫定線ノ内三重縣下山田ヨリ鳥羽ニ至ル鐵道  
同項中第十五號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

一 九州豫定線ノ内福岡縣下小倉ヨリ大分縣下大分、宮崎縣下宮崎ヲ經テ鹿児島縣下鹿児島ニ至ル鐵道中大分縣下宇佐ヨリ大分ニ至ル鐵道

第九條中「壹億貳百萬圓」ヲ「一億千二百五十萬圓」ニ改ム

〔參照〕

法律第四號鐵道敷設法(明治二十五年六月二十一日官報)抄録

第二條第一項

豫定鐵道線路ハ左ノ如シ

中央線

一 神奈川縣下八王子若ハ靜岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道(以下)

第七條第一項

豫定線路中左ノ線路ハ第一期間ニ於テ其ノ實測及敷設ニ著手ス

一 中央豫定線ノ内神奈川縣下八王子若ハ靜岡縣下御殿場ヨリ山梨縣下甲府及長野縣下諏訪ヲ經テ伊那郡若ハ西筑摩郡ヨリ愛知縣下名古屋ニ至ル鐵道(以下)

第九條 第一期鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金壹億貳百萬圓ヲ限リ漸次公債ヲ募集スルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル陸海軍召集諸費繰替支辨ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十三日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望



法律第十七號(官報三月十四日)

陸海軍召集諸費ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ市町村又ハ之ニ準スヘキモノニ於テ一時繰替支辨スヘシ

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年法律第十三號ハ之ヲ廢止ス

(參照)

明治三十年三月二十日法律第十三號ハ陸海軍召集諸費支出ニ關スル件ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒造税法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十八號

酒造税法中左ノ通改正ス

第四條第一項ヲ左ノ如ク改ム

酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石數ニ應シ左ノ割合ヲ以テ造石稅ヲ課ス

第一種 酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒及酒精分三十度以下ノ味淋燒酎

一石ニ付 金二十圓

第二種 酒精分三十五度以下ノ燒酎

一石ニ付 金二十五圓

第三種 酒精分四十度以下ノ燒酎

一石ニ付 金三十圓

第四種 酒精分四十五度以下ノ燒酎

一石ニ付 金三十五圓

第五種 酒精分二十度ヲ超ユル清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度ヲ超ユル味淋及酒精分四十五度ヲ

超ユル燒酎

一石ニ付 酒精分一度毎ニ金一圓

第七條 第三十三條ニ依リ酒類製造ノ免許ヲ取消シタルトキ又ハ酒類ヲ製造スル者納稅保證物ノ

免除ヲ得スシテ保證物ノ提供ヲ爲ササルトキハ前條ノ納期ニ拘ラス造石稅ノ全部又ハ一部ヲ徵

收スルコトヲ得

前項ノ場合及國稅徵收法第四條ノ一ニ依リ造石稅ヲ徵收スル場合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ酒

類ヲ差押フルコトヲ得

第二十二條 免許ヲ受ケスシテ酒類ヲ製造シタル者ハ三十圓以上五千圓以下ノ罰金ニ處シ仍其ノ

製造ニ係ル酒類及其ノ容器、器具、器械ヲ沒收ス

前項ノ酒類ニ付テハ第六條ノ納期ニ拘ラス其ノ造石稅ヲ徵收ス

第三十三條 第二十四條乃至第二十八條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ酒類



製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

前項ニ依リ免許ヲ取消シタル場合ニ於テ必要アリト認めルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ期間内製成其ノ他必要ノ行為ヲ繼續セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法ノ規定ヲ適用ス

第三十四條中製造ヲ廢止スルモノヲ製造ノ免許ヲ取消サレタル場合ニ於テモ「ニ改ム」

第三十五條ノ二 此ノ税法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒類ハ此ノ税法ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ此ノ税法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ酒類ノ石數ニ應シ第四條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ酒類及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬ズルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第二十八條乃至第四十條ヲ削ル

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第二十八條削除ニ關スル規定ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中酒造税法ニ依ル酒類及沖繩縣酒類出港税ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

法律第二十八號酒造税法(明治二十九年三月二十八日官報)抄録

第四條第一項

酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石數ニ應シ左ノ割合ヲ以テ造石税ヲ課ス

- 第一種 酒精分二十度以下ノ清酒 酒類 白酒 味淋 及 酒精分三十度以下ノ燒酎
  - 一石ニ付 金十五圓
  - 一石ニ付 金十八圓
- 第二種 酒精分三十五度以下ノ燒酎
  - 一石ニ付 金二十圓
  - 一石ニ付 金二十三圓
- 第三種 酒精分四十度以下ノ燒酎
  - 一石ニ付 金二十圓
  - 一石ニ付 金二十三圓
- 第四種 酒精分四十五度以下ノ燒酎
  - 一石ニ付 金二十圓
  - 一石ニ付 金二十三圓
- 第五種 酒精分二十度ヲ超ユル清酒 酒類 白酒 味淋 及 酒精分四十五度ヲ超ユル燒酎
  - 一石ニ付 金二十圓
  - 一石ニ付 金二十三圓

第七條 政府ハ酒類ヲ製造スル者既稅又ハ遺稅ヲ課ルノ所爲アリト認めルトキ若ハ納稅保證物ノ免除ヲ得スシテ保證物ノ提供ヲ爲ササルトキハ前條ノ納期ニ拘ラス遺石税ノ全部又ハ一部ヲ徵收ス此ノ場合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ酒類ヲ差押フルコトヲ得

第二十二條 免許ヲ受ケスシテ酒類ヲ製造シタル者ハ五十圓以上五千圓以下ノ罰金ニ處ス但シ直ニ遺石税ヲ賦課徵收スルコトヲ妨ケス

第三十四條 酒類ヲ製造シタル者ハ其ノ製造ヲ廢止スルモ遺石税完納前ニアリテハ總テ此ノ税法ノ規程ニ從フモノトス

第三十八條 沖繩縣東京府管下小笠原島伊豆七島ニハ當分此ノ税法ヲ施行セズ

第三十九條 沖繩縣ヲ除外此ノ法律ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒類ハ此ノ法律施行地ニ移出スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ酒類ノ石數ニ應シ第四條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ酒類ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第四十條

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒精及酒精含有飲料税法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第十九號

酒精及酒精含有飲料税法中左ノ通改正ス

第二條中「金七十五圓」ヲ「金三圓」ニ「金十八圓」ヲ「金二十一圓」ニ改ム

第五條ノ二 政府ハ其ノ年三月ヨリ翌年二月迄ノ一年度間ノ製造石數酒精ニ在リテハ五十石酒精



ヲ含有スル飲料ニ在リテハ十石以上ニ非サレハ製造ノ免許ヲ與ヘス  
 酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ受ケタル者前項ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲サザリシ  
 トキハ變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ制限石數ニ相當スル造石  
 税ヲ課ス但シ其ノ製造セザリシ石數ニ對スル造石税ハ一石金二十一圓ノ割合ニ依ル  
 第六條中「製造ヲ廢止」ヲ「免許ヲ取消」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ  
 前條第二項ニ依ル造石税ハ翌年三月末日迄ニ之ヲ納ムヘシ但シ免許取消ノ場合ニ於テハ取消後  
 三十日以内トス

第七條 第二十三條ノ二ニ依リ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ取消シタル場合及國稅  
 徵收法第四條ノ一ニ依リ造石税ヲ徵收スル場合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ酒精又ハ酒精ヲ含有  
 スル飲料ヲ差押フルコトヲ得

第十五條中「罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ヲ「罰金ニ處シ仍其ノ製造ニ係ル酒精又ハ酒  
 精ヲ含有スル飲料及其ノ容器、器具、器械ヲ沒收ス但シ罰金ハ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ニ改ム  
 第二十三條ノ二 第十六條乃至第十八條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ酒精  
 又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

前項ニ依リ免許ヲ取消シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ  
 期間内製成其ノ他必要ノ行爲ヲ繼續セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法ノ規定ヲ適用ス  
 第二十四條中「飲料ノ製造ヲ廢止シ」ヲ「飲料製造ノ免許ヲ取消サレ」ニ改ム  
 第二十四條ノ三 本法ヲ施行セザル地ニ於テ製造シタル酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ハ本法ト同  
 一ノ稅率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ

其ノ石數ニ應シ第二條ノ稅率ニ從テ算出シタル稅額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下  
 ルコトヲ得ス

前項ノ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス  
 第二十七條ヲ削ル

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ受ケタル者ニハ明治四十五年二月末日迄ハ  
 第五條ノ二第二項ノ規定ヲ適用セス  
 非常特別稅法中酒精又ハ酒精含有飲料ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

（參照）

法律第八號酒精及酒精含有飲料稅法(明治三十四年三月三十日)抄錄  
 第二條 酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造スルトキハ一石ニ付原容量百分中純酒精ノ容量一箇毎ニ金七十五錢ノ割合ヲ  
 以テ其ノ石數ニ應シテ造石税ヲ課ス但シ一石ニ付金十六圓ノ割合ヲ下ルコトヲ得ス  
 第六條 造石税ハ毎月中、査定石數ニ依リ翌月中ニ於テ一時ニ之ヲ納ムヘシ但シ製造ヲ廢止シタルトキハ即納トス  
 第七條 造石税ヲ納ムヘキ者造石税ヲ遺脱シ又ハ遺脱セムトスルノ所爲アリト認ムルトキハ政府ハ直ニ造石税ノ全部又ハ  
 一部ヲ徵收ス此ノ場合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ差押フルコトヲ得  
 第十五條 免許ヲ受ケシテ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造シタル者ハ其ノ造石税五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五  
 十圓ヲ下ルコトヲ得ス  
 第二十四條 酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ノ製造ヲ廢止シタル者及ヒ其ノ相續人ハ造石税完納前ニ在リテハ總テ本法ノ規  
 定ニ從フ  
 第二十七條 本法若ハ本法ト同一ノ稅率ヲ有スル法規ヲ臺灣ニ施行スルマテハ臺灣ニ於テ製造シタル酒精又ハ酒精ヲ含有  
 スル飲料ヲ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ第二條ノ稅率ニ從テ算出シタル稅額五倍ニ相當ス  
 ル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス  
 前項ノ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル麥酒稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第二十號

麥酒稅法中左ノ適改正ス

第一條中「麥芽ノ重量十分ノ三以内ノ米ヲ」總重量麥芽ノ十分ノ五ヲ超ニサル米、玉蜀黍又ハ砂糖ニ改ム

第三條中「金七圓ヲ」金十圓ニ改ム

第三條ノ二 政府ハ其ノ年三月ヨリ翌年二月迄ノ一年度間ノ製造石數千石以上ニ非サレハ麥酒製造ノ免許ヲ與ヘス

麥酒製造ノ免許ヲ受ケタル者前項ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲サザリシトキハ變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ制限石數ニ相當スル麥酒稅ヲ課ス

第四條中「製造ヲ廢止」ヲ「免許ヲ取消」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

前條第二項ニ依ル麥酒稅ハ翌年三月末日迄ニ之ヲ納ムヘシ但シ免許取消ノ場合ニ於テハ取消後三十日以内トス

第五條 第十九條ノ二ニ依リ麥酒製造ノ免許ヲ取消シタル場合及國稅徵收法第四條ノ一ニ依リ麥

酒稅ヲ徵收スル場合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ麥酒ヲ差押フルコトヲ得

第十一條中「罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ヲ「罰金ニ處シ仍其ノ麥酒及其ノ容器器具器械ヲ沒收ス但シ罰金ハ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ニ改ム

第十九條ノ二 第十二條乃至第十四條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ麥酒製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

前項ニ依リ免許ヲ取消シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ期間内製成其ノ他必要ノ行爲ヲ繼續セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法ノ規定ヲ適用ス

第二十條中「麥酒製造ヲ廢止」ヲ「麥酒製造ノ免許ヲ取消サレ」ニ改ム

第二十條ノ二 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル麥酒ハ本法ト同一ノ稅率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ第三條ノ稅率ニ從テ算出シタル稅額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス  
前項ノ麥酒及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前麥酒製造ノ免許ヲ受ケタル者ニハ明治四十五年二月末日迄ハ第三條ノ二第二項ノ規定ヲ適用セス  
非常特別稅法中麥酒ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

法律第十二號麥酒稅法(明治三十四年三月三十日)抄錄  
第一條 麥酒(ビール)ニハ本法ニ依リ麥酒稅ヲ課ス



本法ニ於テ麥酒ト稱スルハ麥芽「ホップ」及水ヲ原料トシ麥酒母ヲ加ヘテ醗酵セシメタルモノヲ謂フ  
 前項原料ノ外麥芽ノ重量十分ノ三以内ノ米ヲ原料トシ麥酒母ヲ加ヘテ醗酵セシメタルモノハ麥酒ト看做ス  
 第三條 麥酒税ハ麥酒一石ニ付金七圓ノ割合ヲ以テ其ノ製造石數ニ應ジ麥酒ヲ製造スル者ヨリ之ヲ徵收ス  
 第四條 麥酒税ハ毎月中ノ査定石數ニ依リ翌月中ニ於テ一時ニ之ヲ納ムヘシ但シ製造ヲ廢止シタルトキハ即納トス  
 第五條 麥酒ヲ製造スル者麥酒税ヲ進脱シ又ハ進脱セムトスルノ所爲アリト認ムルトキハ政府ハ直ニ麥酒税ノ全部又ハ一部ヲ徵收ス此ノ場合ニ於テハ納税ノ擔保トシテ麥酒ヲ差押フルコトヲ得  
 第十一條 免許ヲ受ケスシテ麥酒ヲ製造シタル者ハ其ノ麥酒税五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス  
 第二十條 麥酒製造ヲ廢止シタル者及其ノ相續人ハ麥酒税完納前ニ在リテハ總テ本法ノ規定ニ從フ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル石油消費税法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

大藏大臣 松田正久

法律第二十一號

石油消費税法

第一條 石油ニハ本法ニ依リ消費税ヲ課ス  
 第二條 消費税ハ石油一石ニ付金一圓ノ割合トス  
 第三條 外國ニ輸出スル石油ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ消費税ヲ免除ス  
 消費税ヲ納付シタル石油ヲ外國ニ輸出シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ消費税ニ相當スル金額ヲ交付ス  
 第四條 消費税ハ製造場、税關又ハ保税倉庫ヨリ石油ヲ引取ルトキ引取人之ヲ納付スヘシ

第五條 消費税額ニ相當スル擔保物ヲ提供シタルトキハ政府ハ三月以内ノ期間ヲ以テ消費税ノ徵收ヲ猶豫ス

第六條 石油ハ命令ノ定ムル所ニ依リ消費税ヲ納付セシメテ之ヲ貯藏場ニ移出スルコトヲ得  
 前項ノ場合ニ於テハ移出先ヲ以テ製造場ト看做シ移出先ノ營業人ヲ以テ製造者ト看做ス

第七條 消費税ヲ納付シ製造場ヨリ引取タル石油ヲ再ヒ其ノ製造場ニ戻入シタル場合ニ於テ其ノ數量ニ付政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ其ノ數量ニ相當スル石油ニ付テハ更ニ消費税ノ徵收ヲ爲サス

第八條 製造場、税關又ハ保税倉庫ヨリ石油ヲ引取ル者ハ引取ノ際其ノ數量ヲ政府ニ申告スヘシ

第九條 第五條又ハ第六條第一項ニ該當スル場合ヲ除クノ外消費税納付前ニ於テハ製造場、税關又ハ保税倉庫ヨリ石油ヲ引取ルコトヲ得ス

第十條 石油製造者ハ第五條又ハ第六條第一項ニ該當スル場合ヲ除クノ外消費税納付前ニ於テ石油ヲ他ニ引渡スコトヲ得ス

第十一條 石油ヲ製造セムトスル者ハ政府ニ申告スヘシ

第十二條 石油製造者ハ同一ノ場所ニ於テ石油ノ販賣業ヲ兼營スルコトヲ得ス但シ政府ノ認許ヲ得石油ノ製造場ト販賣場トヲ區別シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 石油ノ製造者及販賣者ハ帳簿ヲ備ヘ石油ノ製造出入ヲ詳細明瞭ニ記載スヘシ

第十四條 收税官吏ハ石油ノ製造場又ハ販賣場ニ立入り石油原料、器具、器械、建築物又ハ帳簿書類ヲ検査スルコトヲ得

第十五條 收税官吏ハ監督上必要ト認ムルトキハ前項ノ物件ニ封印ヲ施スコトヲ得

收税官吏ハ運搬中ニ在ル石油ヲ検査シ其ノ出所及到着先ヲ質問スルコトヲ得



前項ノ場合ニ於テ監督上必要ト認メタルトキハ收税官吏ハ其ノ運搬ヲ停止シ又ハ荷物若ハ船車ニ封印ヲ施スコトヲ得

第十六條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ消費税五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ消費税ヲ徴收ス但シ罰金額ハ十圓ヲ下ルコトヲ得ス

一 政府ニ申告セスシテ石油ヲ製造シタルトキ

二 外國ニ輸出スル爲消費税ヲ免除セラレタル石油ヲ内地ニ於テ消費シ又ハ内地ニ於テ消費スル目的ヲ以テ之ヲ讓渡シタルトキ

三 第六條第一項ニ依リ移出シタル石油ヲ其ノ定メラレタル場所ニ移入セス又ハ之ヲ消費シタルトキ

四 第九條又ハ第十條ノ規定ニ違反シタルトキ

第十七條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第十二條ノ規定ニ違反シタルトキ

二 石油ノ製造者又ハ販賣者石油ノ製造出入ニ關スル帳簿ヲ調製セス又ハ其ノ記載ヲ詐リ若ハ怠リタルトキ

三 收税官吏ノ尋問ニ對シ虚偽ノ答辯ヲ爲シ又ハ其ノ職務執行ヲ拒ミ、之ヲ忌避シ若ハ之ニ支障ヲ加ヘタルトキ但シ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第十八條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及數罪併發ノ例ヲ用井ス

第十九條 石油ノ製造者又ハ販賣者カ未成年者若ハ禁治産者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發

スル命令ニ依リ本人ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 石油ノ製造者又ハ販賣者ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキハ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス

附則

第二十一條 本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二十二條 本法施行前ヨリ石油ヲ製造シ本法施行後引續キ之ヲ製造セムトスル者ハ本法施行後一月以内ニ其ノ旨政府ニ申告スヘシ

第二十三條 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造又ハ輸入シタル石油ハ本法ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ施行スル迄ハ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ消費税五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ十圓ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ石油及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル日本大博覽會ノ出品ニ對スル發明、意匠、實用新案及商標保護ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月十七日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
農商務大臣 松岡康毅



法律第二十二號(官報 三月十八日)

第一條 日本大博覽會ノ出品ニ付其ノ出品前現實ニ發明ノ特許又ハ意匠、實用新案若ハ商標ノ登録ヲ出願シ其ノ出品後特許又ハ登録ヲ受ケタル者ハ其ノ出品ノ日ニ於テ特許又ハ登録ヲ受ケタル者ト看做ス

前項ノ出願アリタルトキハ特許局長ハ特許局發行ノ公報ヲ以テ之ヲ公示スヘシ

第二條 前條ノ出願ヲ爲シタル者ハ其ノ旨ヲ其ノ物品又ハ方法ニ表示スヘシ

第三條 前條ノ表示ヲ怠リタル者ハ第一條ノ出願アリタルコトヲ知リテ其ノ權利ヲ侵害シタル者ニ對シテノミ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第四條 特許發明ニ係ル物品又ハ方法ヲ日本大博覽會ニ出品シタル者ハ特許法第三十八條ノ適用ニ付テハ其ノ出品中其ノ發明ヲ實施公行シタル者ト看做ス

第五條 輸入シテ日本大博覽會ニ出品シタル物品ニ付テハ其ノ輸入又ハ出品ニ關スル行爲ニ付特許法、意匠法、實用新案法又ハ商標法ノ規定ニ依ル處罰又ハ權利侵害ニ因ル訴追ヲ受クルコトナシ

第六條 第一條ノ出願ヲ爲ササル物品又ハ方法ニ第二條ノ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル神社財產ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
內務大臣 原 敬

法律第二十三號(官報 三月二十三日)

第一條 本法ニ於テ神社ト稱スルハ官國幣社、府縣社以下ノ神社ヲ謂ヒ財產ト稱スルハ神社ノ不動産及寶物ニシテ登録ヲ受ケタルモノヲ謂フ

第二條 地方長官ノ許可ヲ受ケスシテ神社財產ヲ擔保ニ供シ又ハ處分シタルトキハ之ヲ無効トス  
神社ノ負債ニ付亦同シ

第三條 神社財產ヲ處分スル場合ニ於テ其ノ神社ノ神職、氏子總代及崇敬者總代ハ之ヲ取得スルコトヲ得ス

第四條 神社財產タル境内地、社殿其ノ他境内地ニ在ル工作物及寶物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス  
第五條 神社ノ不動産及寶物ハ地方廳ニ於テ保管スル臺帳ニ登録ヲ受クヘシ

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
本法ハ別格官幣社靖國神社ニ之ヲ適用セス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル沖繩縣及東京府小笠原島伊豆七島ニ於ケル酒造稅ニ關スル法律ヲ裁可  
シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第二十四號(官報三月二十七日)

第一條 沖繩縣及東京府小笠原島伊豆七島ニ於テハ酒造稅法第四條ニ依ル造石稅ハ當分其ノ三分  
ノ一トス

第二條 東京府小笠原島伊豆七島ニ於テ製造シタル酒類ハ之ヲ帝國内ノ他ノ地方ニ移出スルコト  
ヲ得ズ犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ酒造稅法第四條ノ稅率ニ從テ算出シタル稅額五倍ノ罰金ニ處ス  
但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ズ

前項ノ酒類及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第三條 舊價ニ依ル沖繩縣酒造免許稅ハ自今之ヲ徵收セス

第四條 舊價ニ依リ酒造ノ免許ヲ受ケタル者ニシテ本法施行後引續キ酒類ヲ製造スルモノハ酒造  
稅法ニ依リ免許ヲ受ケタル者ト看做ス

前項ノ製造者ニハ當分酒造稅法第五條第二項ノ規定ヲ適用セス

附則

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル沖繩縣酒類出港稅則中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第二十五號(官報三月二十七日)

沖繩縣酒類出港稅則中左ノ通改正ス

第一條中第四條ノ稅率ニ依リ「第四條ニ依ル造石稅ノ三分ノ二」ニ改ム

附則

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ酒造稅法及明治四十一年法律第二十四號ニ依リ  
造石稅ヲ課セラレサル酒類ニ付テハ仍從前ノ規定ニ依ル

(參照)

勅令第十二號沖繩縣酒類出港稅則(明治二十一年三月二十二日官報抄録)

第二條 沖繩縣内ニ於テ製造シタル清酒、濁酒、白酒、味淋又ハ燒酎ヲ帝國内ノ他ノ地方ニ移出スルトキハ旅客ノ携帶品タル  
ト否トヲ問ハス其ノ石數ニ應シ酒造稅法第四條ノ稅率ニ依リ出港稅ヲ課ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒母、醪及麴取締法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽



明治四十一年三月二十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第二十六號(官報 三月二十七日)

酒母、醱及麴取締法中左ノ通改正ス

第九條 免許ヲ受ケスシテ酒母、醱若ハ麴ヲ製造シタル者又ハ第七條若ハ第八條ニ違反シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ仍其ノ製造ニ係ル酒母、醱又ハ麴及其ノ容器、器具、器械ヲ沒收ス

前項ノ酒母、醱ハ濁酒ト看做シ酒造税法ニ依リ其ノ總石數ニ對シ直ニ造石稅ヲ徵收ス

第十八條ノ二 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒母、醱又ハ麴ハ之ヲ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ仍其ノ酒母、醱又ハ麴及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第二十二條ヲ削ル

附則

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第七號酒母、醱及麴取締法(明治三十八年一月一日官報)抄錄

第九條 免許ヲ受ケスシテ酒母、醱若ハ麴ヲ製造シタル者又ハ第七條若ハ第八條ニ違反シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ仍其ノ酒母、醱ハ濁酒ト看做シ酒造税法ニ依リ其ノ總石數ニ對シ直ニ造石稅ヲ徵收ス

第二十二條 沖繩縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニハ本法ヲ施行セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル煉乳原料砂糖戻稅法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

### 御 名 御 璽

明治四十一年三月二十六日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第二十七號(官報 三月二十七日)

煉乳原料砂糖戻稅法

第一條 政府ノ承認ヲ得テ砂糖色相和蘭標本第十五號以上ノ砂糖ヲ煉乳製造ノ原料ニ使用シタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ消費稅ニ相當スル金額ノ下付ヲ政府ニ請求スルコトヲ得

使用後一年ヲ經過シタルトキハ前項ノ請求ヲ爲スコトヲ得ス

第二條 前條ニ依リ金額ノ下付ヲ請求セムトスル者ハ申請書ニ消費稅ヲ納付シ又ハ擔保ヲ提供シタルコトヲ證スヘキ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

第三條 收稅官吏ハ第一條ニ依リ承認ヲ與ヘタル砂糖ヲ使用スル場所ニ就キ原料、製品、器具、器械及帳簿書類ヲ検査シ其ノ他監督上必要ト認ムル處分ヲ爲スコトヲ得

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法ハ明治四十四年七月十六日限其ノ效力ヲ失フ



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル監獄法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第二十八號(官報三月二十八日)

監獄法

第一章 總則

- 第一條 監獄ハ之ヲ左ノ四種トス
  - 一 懲役監 懲役ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
  - 二 禁錮監 禁錮ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
  - 三 拘留場 拘留ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
  - 四 拘留監 刑事被告人及ヒ死刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヲ拘禁スル所トス
- 拘留監ニハ懲役禁錮又ハ拘留ニ處セラレタル者ヲ一時拘禁スルコトヲ得
- 警察官署ニ附屬スル留置場ハ之ヲ監獄ニ代用スルコトヲ得但懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル者ヲ一月以上繼續シテ拘禁スルコトヲ得ス
- 第二條 二月以上ノ懲役ニ處セラレタル十八歳未満ノ者ハ特ニ設ケタル監獄又ハ監獄内ニ於テ特ニ分界ヲ設ケタル場所ニ之ヲ拘禁ス
- 前項ノ規定ニ依ル者ハ滿二十歳ニ至ルマテ又滿二十歳ニ至リタル後三月内ニ刑期終了ス可キ者

ハ其殘刑期間仍ホ繼續シテ之ヲ拘禁スルコトヲ得

心身發育ノ狀況ニ因リ必要ト認ムル者ハ前二項ノ適用ニ付キ年齡ニ拘ハラサルコトヲ得

第三條 監獄ニ男監及ヒ女監ヲ設ケ之ヲ分隔ス

懲役監禁錮監拘留場及ヒ拘留監ノ同一區劃内ニ在ルモノハ之ヲ分界ス

第四條 主務大臣ハ少クトモ一年毎ニ一回官吏ヲシテ監獄ヲ巡閱セシム可シ

判事及ヒ檢事ハ監獄ヲ巡視スルコトヲ得

第五條 監獄ノ參觀ヲ請フ者アルトキハ學術ノ研究其他正當ノ理由アリト認ムル場合ニ限り命令

ノ定ムル所ニ依リ之ヲ許スコトヲ得

第六條 本法ニ依リ没入シ又ハ國庫ニ歸屬シタル物ハ之ヲ監獄懲惡ノ用ニ充ツ

第七條 在監者監獄ノ處置ニ對シ不服アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣又ハ巡閱官吏ニ

情願ヲ爲スコトヲ得

第八條 勞役場ハ之ヲ監獄ニ附設ス

前五條ノ規定ハ之ヲ勞役場ニ準用ス

第九條 本法中別段ノ規定アルモノヲ除ク外刑事被告人ニ適用ス可キ規定ハ死刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ之ヲ準用シ懲役囚ニ適用ス可キ規定ハ勞役場留置ノ言渡ヲ受ケタル者ニ之ヲ準用ス

第十條 本法ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ之ヲ適用セス

第二章 收監

第十一條 新ニ入監スル者アルトキハ令狀又ハ判決書及ヒ執行指揮書其他適法ノ文書ヲ査閲シタル後入監セシム可シ



第十二條 新ニ入監スル婦女其子ヲ携帶センコトヲ請フトキハ必要ト認ムル場合ニ限り滿一歳ニ至ルマテ之ヲ許スコトヲ得

監獄ニ於テ分娩シタル子ニ付テモ亦前項ノ例ニ依ル

第十三條 新ニ入監スル者傳染病豫防法ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病ニ罹リタルモノナルトキハ之ヲ入監セシメサルコトヲ得

第十四條 新ニ入監スル者アルトキハ其身體及ヒ衣類ノ検査ヲ爲ス可シ在監中ノ者ニ付キ必要ト認ムルトキ亦同シ

第三章 拘禁

第十五條 在監者ハ心身ノ狀況ニ因リ不適當ト認ムルモノヲ除ク外之ヲ獨居拘禁ニ付スルコトヲ得

第十六條 雜居拘禁ニ在テハ在監者ノ罪質、性格、犯數、年齡等ヲ斟酌シテ其監房ヲ別異ス

第一條第二項及ヒ第三項ノ場合ニ於テハ在監者ノ種類ニ依リ其監房ヲ別異ス

十八歳未滿ノ者ハ第二條第二項ノ場合ヲ除ク外十八歳以上ノ者ト其監房ヲ別異ス但心身發育ノ狀況ニ因リ其必要ナシト認ムルトキハ此限ニ在ラス

前三項ノ規定ハ工場ニ於ケル就業ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十七條 刑事被告人ニシテ被告事件ノ相關連スルモノハ互ニ其監房ヲ別異シ監房外ニ於テモ其交通ヲ遮斷ス

第十八條 懲役監禁、鋼監、拘留場、拘留監及ヒ勞役場ノ同一區劃内ニ在ル場合ニ於テハ同性者ニ付キ同一ノ病監又ハ教誨堂ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ在監者ノ種類ニ因リ監房若クハ座席又ハ診察室若クハ教誨ノ時間ヲ異ニス  
病監ニ在テハ第二條及ヒ第十六條ヲ適用セサルコトヲ得

第四章 戒護

第十九條 在監者逃走、暴行若クハ自殺ノ虞アルトキ又ハ監外ニ在ルトキハ戒具ヲ使用スルコトヲ得

戒具ノ種類ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 法令ニ依リ監獄官吏ノ携帶スル劍又ハ銃ハ左ノ各號ノ一ニ該ル場合ニ限り在監者ニ對シ之ヲ使用スルコトヲ得

一 人ノ身體ニ對シテ危險ナル暴行ヲ爲シ又ハ爲ス可キ脅迫ヲ加フルトキ

二 危險ナル暴行ノ用ニ供シ得可キ物ヲ所持シ其放棄ヲ肯セサルトキ

三 逃走ノ目的ヲ以テ多衆騷擾スルトキ

四 逃走ヲ企テタル者暴行ヲ爲シテ捕拿ヲ免カレントシ又ハ制止ニ從ハスシテ逃走セントスルトキ

第二十一條 天災事變ニ際シ必要ト認ムルトキハ在監者ヲシテ應急ノ用務ニ就カシムルコトヲ得

前項ノ用務ニ就キタル者ニハ第二十八條ノ規定ヲ準用ス

第二十二條 天災事變ニ際シ監獄内ニ於テ避難ノ手段ナシト認ムルトキハ在監者ヲ他所ニ護送ス可シ若シ護送スルノ途ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得

解放セラレタル者ハ監獄又ハ警察官署ニ出頭ス可シ解放後二十四時間内ニ出頭セサルトキハ刑法第九十七條ニ依リ處斷ス



第二十三條 在監者逃走シタルトキハ監獄官吏ハ逃走後四十八時間内ニ限り之ヲ逮捕スルコトヲ得

前項ノ規定ハ刑事訴訟法第六十條ノ適用ヲ妨ケス

第五章 作業

第二十四條 作業ハ衛生、經濟及ヒ在監者ノ刑期、健康、技能、職業、將來ノ生計等ヲ斟酌シテ之ヲ課ス

十八歳未満ノ者ニ課ス可キ作業ニ付テハ前項ノ外特ニ教養ニ關スル事項ヲ斟酌ス

第二十五條 大祭祝日、一月一日、二月一日及ヒ十二月三十一日ニハ就業ヲ免ス

父母ノ訃ニ接シタル者ハ三日間其就業ヲ免ス

主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時就業ヲ免スルコトヲ得

炊事、洒掃、看護其他監獄ノ經理ニ關シ必要ナル作業ニ就ク者ニ付テハ就業ヲ免セサルコトヲ得

第二十六條 刑事被告人、拘留囚又ハ禁錮囚作業ニ就カンコトヲ請フトキハ其選擇スルモノニ就

キ之ヲ許スコトヲ得

第二十七條 作業ノ收入ハ總テ國庫ノ所得トス

在監者ニシテ作業ニ就クモノニハ命令ノ定ムル所ニ依リ作業賞與金ヲ給スルコトヲ得

作業賞與金ハ行狀、作業ノ成績等ヲ斟酌シテ其額ヲ定ム

第二十八條 在監者就業ニ因リ創傷ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ之カ爲メニ死亡シ又ハ業務ヲ營ミ難キ

ニ至リタルトキハ情狀ニ因リ手當金ヲ給スルコトヲ得

前項ノ手當金ハ釋放ノ際本人ニ之ヲ給シ死亡ノ場合ニ於テハ死亡者ノ父母、配偶者又ハ子ニ

之ヲ給ス

第六章 教誨及ヒ教育

第二十九條 受刑者ニハ教誨ヲ施ス可シ其他ノ在監者教誨ヲ請フトキハ之ヲ許スコトヲ得

第三十條 十八歳未満ノ受刑者ニハ教育ヲ施ス可シ其他ノ受刑者ニシテ特ニ必要アリト認ムル

モノニハ年齢ニ拘ハラヌ教育ヲ施スコトヲ得

第三十一條 在監者文書、圖書ノ閱讀ヲ請フトキハ之ヲ許ス

文書、圖書ノ閱讀ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七章 給養

第三十二條 受刑者ニハ一定ノ衣類、臥具ヲ着用セシム但拘留囚ニハ白衣ノ着用ヲ許シ其他ノ者ニ

ハ襯衣ノ自辨ヲ許スコトヲ得

第三十三條 刑事被告人及ヒ勞役場留置ノ言渡ヲ受ケタル者ハ衣類、臥具ハ自辨トシ其自辨スルコ

ト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

自辨ノ衣類、臥具ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條 在監者ニハ其體質、健康、年齢、作業等ヲ斟酌シテ必要ナル糧食及ヒ飲料ヲ給ス

第三十五條 刑事被告人ニハ糧食ノ自辨ヲ許スコトヲ得

第八章 衛生及ヒ醫療

第三十六條 在監者ノ頭髮、鬚髯ハ之ヲ剪削セシムルコトヲ得但刑事被告人ノ頭髮、鬚髯ハ衛生上特

ニ必要アリト認ムル場合ヲ除ク外其意思ニ反シテ之ヲ剪削セシムルコトヲ得ス

第三十七條 在監者ハ其拘禁セラルル監房ノ清潔ヲ保ツニ必要ナル用務ニ服ス可シ



第三十八條 在監者ニハ其健康ヲ保ツニ必要ナル運動ヲ爲サシム

第三十九條 在監者ニハ種痘其他傳染病豫防ニ必要ト認ムル醫術ヲ行フコトヲ得

第四十條 在監者疾病ニ罹リタルトキハ醫師ヲシテ治療セシメ必要アルトキハ之ヲ病監ニ收容ス

第四十一條 傳染病者ハ嚴ニ之ヲ隔離シ健康者及ヒ他ノ病者ニ接近セシムルコトヲ得ス但懲役囚ヲシテ看護セシムルハ此限ニ在ラス

第四十二條 病者醫師ヲ指定シ自費ヲ以テ治療ヲ補助セシメンコトヲ請フトキハ情狀ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第四十三條 精神病、傳染病其他ノ疾病ニ罹リ監獄ニ在テ適當ノ治療ヲ施スコト能ハスト認ムル病者ハ情狀ニ因リ假ニ之ヲ病院ニ移送スルコトヲ得

前項ニ依リ病院ニ移送シタル者ハ之ヲ在監者ト看做ス

第四十四條 妊婦、產婦、老衰者及ヒ不具者ハ之ヲ病者ニ準スルコトヲ得

第九章 接見及ヒ信書

第四十五條 在監者ニ接見センコトヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

受刑者ニハ其親族ニ非サル者ト接見ヲ爲サシムルコトヲ得ス但特ニ必要アリト認ムル場合ハ此限ニ在ラス

第四十六條 在監者ニハ信書ヲ發シ又ハ之ヲ受クルコトヲ許ス

受刑者ニハ其親族ニ非サル者ト信書ノ發受ヲ爲サシムルコトヲ得ス但特ニ必要アリト認ムル場合ハ此限ニ在ラス

第四十七條 受刑者ニ係ル信書ニシテ不適當ト認ムルモノハ其發受ヲ許サス

前項ニ依リ發受ヲ許ササル信書ハ二年ヲ經過シタル後之ヲ廢棄スルコトヲ得

第四十八條 裁判所其他ノ公務所ヨリ在監者ニ宛テタル文書ハ披閱シテ之ヲ本人ニ交付ス

第四十九條 在監者ニ交付シタル信書及ヒ前條ノ文書ハ本人閱讀ノ後之ヲ領置ス

第五十條 接見ノ立會、信書ノ檢閱其他接見及ヒ信書ニ關スル制限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十章 領置

第五十一條 在監者ノ携有スル物ハ點檢シテ之ヲ領置ス

保存ノ價值ナク又ハ保存ニ不適當ト認ムル物ハ其領置ヲ爲サス又ハ之ヲ解クコトヲ得

領置ヲ爲サス又ハ之ヲ解キタル物ニ付キ在監者相當ノ處分ヲ爲ササルトキハ之ヲ廢棄スルコトヲ得

第五十二條 在監者領置物ヲ以テ其父母、配偶者又ハ子ノ扶助其他正當ノ用途ニ充テントコトヲ請フトキハ情狀ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第五十三條 在監者ニ差入ヲ爲サントコトヲ請フ者アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ許スコトヲ得

在監者ニ宛テ送致シ來リタル物ニシテ其差出人ノ氏名若クハ居所不明ナルトキ、其差入ヲ許ス可カラスト認ムルトキ又ハ在監者ニ於テ其受領ヲ拒ミタルトキハ之ヲ沒入又ハ廢棄スルコトヲ得

第五十四條 在監者ノ私ニ所持スル物ハ之ヲ沒入又ハ廢棄スルコトヲ得

第五十五條 領置物ハ釋放ノ際之ヲ交付ス



第五十六條 死亡者ノ遺留物ハ請求ニ因リ相續人、家族又ハ親族ニ之ヲ交付ス

第五十七條 死亡者ノ遺留物ハ死亡ノ日ヨリ一年內ニ前條ニ掲ケタル者ノ請求ナキトキハ國庫ニ歸屬ス

逃走者ノ遺留物ニシテ逃走ノ日ヨリ一年內ニ居所分明セサルトキ亦同シ

第十一章 賞罰

第五十八條 受刑者改悛ノ狀アルトキハ賞遇ヲ爲スコトヲ得

賞遇ノ種類及ヒ方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 在監者紀律ニ違ヒタルトキハ懲罰ニ處ス

第六十條 懲罰ハ左ノ如シ

一 叱責

二 賞遇ノ三月以内ノ停止

三 賞遇ノ廢止

四 文書、圖書閱讀ノ三月以内ノ禁止

五 請願作業ノ十日以内ノ停止

六 自辨ニ係ル衣類臥具着用ノ十五日以内ノ停止

七 糧食自辨ノ十五日以内ノ停止

八 運動ノ五日以内ノ停止

九 作業賞與金計算高ノ一部又ハ全部減削

十日以内ノ糧食

十一 二月以内ノ輕屏禁

十二 七日以内ノ重屏禁

屏禁ハ受罰者ヲ罰室内ニ晝夜屏居セシメ情狀ニ因リ就業セシメサルコトヲ得重屏禁ニ在テハ仍

ホ罰室ヲ暗クシ臥具ヲ禁ス

第一項各號ノ懲罰ハ之ヲ併科スルコトヲ得

第六十一條 前條第一項第十號ノ懲罰ハ刑事被告人及ヒ十八歲未滿ノ在監者ニ之ヲ科セス

第六十二條 懲罰ニ處セラレタル者疾病其他特別ノ事由アルトキハ其懲罰ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

懲罰ニ處セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ其懲罰ヲ免除スルコトヲ得

第十二章 釋放

第六十三條 在監者ノ釋放ハ恩赦、職權アル者ノ命令又ハ刑期ノ終了ニ因リ關係文書ヲ査閱シテ

其手續ヲ爲スコトヲ得

第六十四條 恩赦ヲ受ケ又ハ假出獄若クハ假出場ヲ許サレタル者ハ其裁可狀又ハ許可書ノ監獄ニ

達シタル後二十四時間内ニ之ヲ釋放ス

第六十五條 前條ノ場合ヲ除ク外命令ニ因リ釋放ヲ爲スコキ者ハ命令書ノ監獄ニ達シタル後十時

間内ニ之ヲ釋放ス

第六十六條 假出獄又ハ假出場ヲ許サレタル者ヲ釋放スルトキハ之ニ證書ヲ交付ス

第六十七條 假出獄ヲ許サレタル者ハ其期間左ノ規定ヲ遵守ス可シ

一 正業ニ就キ善行ヲ保ツコト



二 警察官署ノ監督ヲ受クルコト但警察官署ハ監獄ノ意見ヲ聽キ他ニ其監督ヲ委任スルコトヲ得

三 住居ヲ轉移シ又ハ十日以上旅行ヲ爲サントスルトキハ監督者ノ許可ヲ請フコト主務大臣ハ假出獄ヲ許サレタル者ノ帝國外ニ旅行ヲ爲スヲ許スコトヲ得

第六十八條 満期ノ者ハ其刑期終了ノ翌日午後六時マテニ之ヲ釋放ス

第六十九條 釋放セラル可キ者重キ疾病ニ罹リ監獄ニ於テ醫療中ナルトキハ其請求ニ因リ仍ホ在監セシムルコトヲ得

第七十條 釋放セラル可キ者歸住旅費若クハ相當ノ衣類ヲ有セザルトキ又ハ監獄行政ノ便宜ニ因リ移監セシメタルカ爲メ歸住旅費ノ増加ヲ要スルニ至リタルトキハ衣類又ハ旅費ヲ給與スルコトヲ得

第十三章 死亡

第七十一條 死刑ノ執行ハ監獄内ノ刑場ニ於テ之ヲ爲ス

大祭祝日、一月一日二日及ヒ十二月三十一日ニハ死刑ヲ執行セズ

第七十二條 死刑ヲ執行スルトキハ絞首ノ後死相ヲ檢シ仍ホ五分時ヲ經ルニ非サレハ絞繩ヲ解クコトヲ得ス

第七十三條 在監者死亡シタルトキハ之ヲ假葬ス

死體ハ必要ト認ムルトキハ之ヲ火葬スルコトヲ得

死體又ハ遺骨ハ假葬後二年ヲ經テ之ヲ合葬スルコトヲ得

第七十四條 死亡者ノ親族故舊ニシテ死體又ハ遺骨ヲ請フ者アルトキハ何時ニテモ之ヲ交付スルコトヲ得

コトヲ得但合葬後ハ此限ニ在ラス  
第七十五條 受刑者ノ死體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ解剖ノ爲メ病院、學校又ハ其他ノ公務所ニ之ヲ送付スルコトヲ得

附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
監獄則ハ之ヲ廢止ス但懲治人ニ關スル規定ハ當分ノ内仍ホ其效力ヲ有ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル刑法施行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第二十九號(官報三月二十八日)

刑法施行法

第一條 本法ニ於テ舊刑法ト稱スルハ明治十二年第三十六號布告刑法ヲ謂ヒ他ノ法律ト稱スルハ刑法施行前ニ公布シタル法律及ヒ勅令、布告ニシテ法律ト同一ノ效力ヲ有スルモノヲ謂フ

第二條 刑法施行前ニ舊刑法ノ罪又ハ他ノ法律ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ左ノ例ニ從ヒ刑法ノ主刑ト舊刑法ノ主刑トヲ對照シ刑法第十條ノ規定ニ依リ其輕重ヲ定ム

刑法ノ刑

舊刑法ノ刑

死刑

死刑



無期懲役  
無期禁錮  
無期流刑  
無期徒刑、重懲役、輕懲役、重禁錮  
有期徒刑、重禁獄、輕禁獄、輕禁錮

罰金  
拘留  
科料

第三條 法律ニ依リ刑ヲ加重減輕ス可キトキ又ハ酌量減輕ヲ爲ス可キトキハ加重又ハ減輕ヲ爲シタル後刑ノ對照ヲ爲ス可シ

一 罪ニ付キ二個以上ノ主刑ヲ併科ス可キトキ又ハ二個以上ノ主刑中其一ノ科ス可キトキハ其中ニテ重キ刑ノミニ付キ對照ヲ爲ス可シ併合罪又ハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リ數罪ノ主刑ヲ併科ス可キトキ亦同シ

第四條 刑法施行前舊刑法又ハ他ノ法律ノ規定ニ依リ告訴ヲ待テ論ス可キ罪ヲ犯シタル者ハ刑法ノ規定ニ依リ告訴ヲ要セサルモノト雖モ告訴アルニ非サレハ其罪ヲ論セス

第五條 刑法第六條ニ依リ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スル場合ニ於テハ剝奪公權、停止公權、監視又ハ罰金ヲ附加ス可キトキト雖モ之ヲ附加セス

第六條 刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付キ刑法施行ノ前又ハ後ニ確定裁判アリタル後刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ストキハ左ノ例ニ依ル

- 一 確定裁判アリタル罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ刑法又ハ刑法ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ニ於テハ其罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス
- 二 確定裁判アリタル罪ニ刑法又ハ他ノ法律ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ヲ適用シタルトキト雖モ舊刑法又ハ他ノ法律ニ於テハ其罪トニ付キ數罪俱發ニ關スル規定ニ依ル

第七條 左ニ記載シタル者刑法施行前更ニ刑法ノ有期懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ヲ犯シ刑法施行後其罪ニ付キ裁判ヲ爲ストキハ刑法又ハ他ノ法律ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ニ於テハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

- 一 舊刑法又ハ他ノ法律ニ依リ刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ處セラレタル者
- 二 舊刑法又ハ他ノ法律ニ依リ刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ト同質ノ罪ニ因リ死刑ニ處セラレ其執行ノ免除ヲ得又ハ減輕ニ因リ懲役ニ相當スル刑ニ減輕セラレタル者

第八條 刑法施行前ニ犯シタル一罪ト刑法施行後ニ犯シタル一罪又ハ數罪トニ付キ同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ刑法施行前ノ罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用ス可キトキト雖モ其罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第九條 刑法施行前ニ犯シタル數罪ト刑法施行後ニ犯シタル一罪又ハ數罪トニ付キ同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テ刑法施行前ノ罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用ス可キトキハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リテ定マリタル一ノ重キ罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス



前項ノ場合ニ於テ刑法施行前ノ罪ニ刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ヲ適用ス可キトキハ其數罪ト刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第十條 刑法施行後ニ犯シタル罪ニ付キ確定裁判アリタル後刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ其罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ確定裁判アリタル罪ト其罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第十一條 刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付キ刑法施行後確定裁判アリタル後刑法施行後ニ犯シタル餘罪ニ付キ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ確定裁判アリタル罪ニ舊刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖モ其罪ト餘罪トニ付キ併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第十二條 第七條第一項各號ニ記載シタル者刑法施行後有期懲役ニ該ル罪ヲ犯シタルトキハ累犯ニ關スル規定ヲ適用ス

第十三條 刑法施行後ハ舊刑法又ハ舊刑法施行前ノ法令ノ刑ニ處セラレタル者ト雖モ刑ノ執行假出獄及ヒ時効ニ付テハ刑法ノ規定ヲ適用ス但罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル者ヲ勞役場ニ留置スル場合ニ於テハ檢事ノ請求ニ依リ裁判所決定ヲ以テ其言渡ヲ爲ス可シ

第十四條 刑法施行後ハ舊刑法ノ刑ニ處ス可キ者ト雖モ刑ノ執行猶豫ニ付テハ刑法ノ規定ヲ適用ス

第十五條 刑法施行前假出獄ヲ許サレタル者及ヒ幽閉ヲ免セラレタル者ニ付テハ刑法施行ノ日ヨリ刑法ノ假出獄ニ關スル規定ヲ適用ス

第十六條 懲治場留置ノ執行ハ刑法施行後ト雖モ從前ノ例ニ從フ但司法大臣ハ何時ニテモ其留置ヲ解キ又ハ感化院ニ入院セシムルコトヲ得

第十七條 關席判決ヲ以テ言渡シタル刑ノ時効期間ハ其言渡ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第十八條 剝奪公權、停止公權、監視及附加ノ罰金ノ言渡ハ刑法施行ノ日ヨリ其效力ヲ失フ但既ニ徴收シタル附加ノ罰金ハ之ヲ還付セス

第十九條 他ノ法律ニ定メタル主刑ハ第二條ノ例ニ準シ刑法ノ刑ニ對照シテ之ヲ刑法ノ刑名ニ變更ス但單ニ禁錮トアルハ之ヲ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ變更ス

第二十條 他ノ法律ニ定メタル刑ニ付テハ其期間又ハ金額ヲ變更セス但他ノ法律中特ニ期間又ハ金額ヲ定メサル刑ニ付テハ仍舊刑法總則中期間又ハ金額ニ關スル規定ニ從フ

廢止ス

廢止ス



第二十一條 他ノ法律ニ定メタル刑ヲ加重又ハ減輕ス可キ場合ニ於テハ第二十三條ノ場合ヲ除ク外舊刑法ノ加減例ニ關スル規定ニ依ル

第二十二條 他ノ法律中舊刑法ノ規定ヲ掲ケ又ハ舊刑法ノ規定ニ依リ若クハ之ニ依ラサルコトヲ定メタル場合ニ付キ刑法中其規定ニ相當スル規定アルモノハ刑法ノ規定ニ變更ス

爆發物取締罰則第十條ハ之ヲ廢止ス

第二十三條 前條ノ規定ニ依リ刑法ノ刑ヲ適用ス可キ場合ニ於テハ他ノ法律中刑ノ加重ニ關スル特別ノ規定ハ之ヲ適用セス刑ノ減輕ノ方法ニ付テハ刑法ノ加減例ニ關スル規定ニ從フ

第二十四條 明治二十二年法律第二十八號及ヒ明治二十三年法律第九十九號ハ之ヲ廢止ス

第二十五條 左ニ記載シタル舊刑法ノ規定ハ當分ノ内刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

一 第二編第三章第五節

二 第九十八條乃至第二百條

三 第二編第四章第七節及ヒ第九節

四 第二編第五章第三節

五 第三編第二章第四節

刑法第八條ノ規定及ヒ本法中他ノ法律ニ關スル規定ハ之ヲ前項ノ規定ニ準用ス

第二十六條 左ニ記載シタル罪ハ刑法第二條ノ例ニ從フ

一 軍機保護法ニ掲ケタル罪

二 徵兵令ニ掲ケタル罪

三 明治三十八年法律第六十六號ニ掲ケタル罪

四 通貨及證券模造取締法ニ掲ケタル罪

五 船舶法ニ掲ケタル罪

六 船員法ニ掲ケタル罪

七 船舶職員法ニ掲ケタル罪

八 船舶検査法ニ掲ケタル罪

九 戶籍法ニ掲ケタル罪

十 郵便法ニ掲ケタル罪

十一 舊刑法中印紙ノ偽造、變造及ヒ其知情使用ニ關スル罪

第二十七條 左ニ記載シタル罪ハ刑法第三條ノ例ニ從フ

一 著作權法ニ掲ケタル罪

二 重要物產同業組合法ニ掲ケタル罪

三 移民保護法ニ掲ケタル罪

第二十八條 人ノ資格其他ノ事項ニ關シ舊刑法ノ刑名又ハ罪別ヲ掲ケタル他ノ法律ノ規定ハ刑法施行ノ爲メ變更セラルルコトナシ

第二十九條 死刑、無期又ハ短期一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ト看做ス

第三十條 前條ニ該當セサル懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ト看做ス

前條ニ該當セサル懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ禁錮ニ該ル罪ト看



做ス

前條ニ該當セサル懲役ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重禁錮ニ該ル罪ト看做ス  
前條ニ該當セサル禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕禁錮ニ該ル罪ト看做ス

第三十一條 拘留又ハ科料ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ違警罪ト看做ス

第三十二條 他ノ法律ニ定メタル罪ニシテ死刑、無期又ハ短期六年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ルモノノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三十三條 死刑、無期又ハ六年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタルモノト看做ス

第三十四條 前條ニ記載シタル者及ヒ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ公權ヲ剝奪セラレタルモノト看做ス

第三十五條 六年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ノ刑ニ處セラレタルモノト看做ス

六年未滿ノ懲役ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重禁錮ニ處セラレタルモノト看做ス  
六年未滿ノ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕禁錮ニ處セラレタルモノト看做ス

第三十六條 六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル者及ヒ舊刑法ノ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ刑ノ執行ヲ終リ又ハ其執行ヲ受クルコトナキニ至ルマテ公權ヲ停止

セラレタルモノト看做ス

第三十七條 他ノ法律中舊刑法第三十一條又ハ第三十三條ノ規定アル爲メ人ノ資格ニ關シ別段ノ規定ヲ設ケサリシ場合ニ付テハ舊刑法第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ハ人ノ資格ニ關シ刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

第三十八條 刑事訴訟法第八條ヲ左ノ如ク改ム

第八條 公訴ノ時効ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ完成ス

一 死刑ニ該ル罪ニ付テハ十五年

二 無期又ハ長期十年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ十年

三 長期十年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ七年

四 長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年

五 刑法第八十五條ノ罪ニ付テハ一年

六 拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月

第三十九條 刑事訴訟法第六十二條第三號ヲ左ノ如ク改ム

第三 區裁判所ノ管轄ニ屬スル罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

第四十條 刑事訴訟法第二百五條第二號ヲ左ノ如ク改ム

第二 醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人又ハ此等ノ職ニ在リシ者及ヒ宗教若クハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ



第四十一條 刑事訴訟法第二百二十六條第一項中「刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ四十圓以下ノ罰金又ハ科料」改メ同條第二項中「罰金又ハ科料」改メ

同法第二百二十八條中「刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ四十圓以下ノ罰金又ハ科料」改メ

同法第二百四十四條第一項中「罰金又ハ科料」改メ

第四十二條 刑事訴訟法第六十七條第一項ヲ左ノ如ク改メ第三項ヲ削ル  
被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト思料シタルトキハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スコシ

第四十三條 刑事訴訟法第七十二條ヲ左ノ如ク改メ

第四百七十二條 檢察官免訴又ハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 刑事訴訟法第二百三十六條中「輕罪、重罪」ヲ削ル

第四百十五條 刑事訴訟法第二百四十一條ヲ左ノ如ク改メ

第二百四十一條 裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキハ其事件ヲ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲スコシ檢察官ノ請求アルトキ亦同シ

被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第四十六條 刑事訴訟法第二百六十四條中「更ニ重罪事件トシテ裁判ス可キ旨ノ決定ヲ爲シ」ヲ削ル

第四十七條 刑事訴訟法第二百七十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

監獄ニ於テ執行ス可キ二個以上ノ主刑ノ執行ハ其重キモノヲ先ニス但特別ノ事由アルトキハ

檢察官ハ重キ刑ノ執行ヲ停止シ他ノ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得

第四百十八條 刑事訴訟法第三百十八條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ

第三百十八條ノ二 死刑ノ執行ハ檢察官及ヒ裁判所書記ノ立會ニテ之ヲ爲スコシ  
死刑ノ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ得ス但檢察官又ハ監獄ノ長ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第三百十八條ノ三 死刑ノ言渡ヲ受ケタル者心神喪失シタルトキハ司法大臣ノ命令ニ因リ其瘞癒ニ至ルマテ執行ヲ停止ス

死刑ノ言渡ヲ受ケタル婦女懷胎ナルトキハ分娩後司法大臣ノ命令アルニ非サレハ執行ヲ爲スコトヲ得ス

第四十九條 刑事訴訟法第三百十九條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

懲役、禁錮又ハ拘留ノ言渡ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其事故ノ止ムマテ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

一 心神喪失ノ状態ニ在ルトキ

二 刑ノ執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハサル虞アルトキ

三 受胎後七月以上ナルトキ

四 分娩後一月ヲ經過セサルトキ

第五十條 刑事訴訟法第三百二十條中「之ヲ爲スコシ」ノ下ニ「刑ノ執行ノ停止ニ付キ亦同シ」ヲ加ヘ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス



第五十一條 刑事訴訟法第二十四條、第六十三條、第六十八條、第七十三條及七百七十四條但書ハ之ヲ削ル

第五十二條 刑事訴訟法中復讐及ヒ特赦ニ關スル規定ハ之ヲ削ル

第五十三條 刑法第五十二條又ハ第五十八條ノ規定ニ依リ刑ヲ定ム可キ場合ニ於テハ其犯罪事實ニ付キ最終ノ判決ヲ爲シタル裁判所ノ檢察其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十四條 刑ノ執行猶豫ハ裁判所ニ於テ檢察ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ刑ノ言渡ト同時ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡ス可シ

第五十五條 刑ノ執行猶豫ノ言渡ハ上訴ニ因リ其效力ヲ失フコトナシ但原判決ヲ取消シ又ハ破毀シタル場合ハ此限ニ在ラス

上訴裁判所ハ新ニ執行猶豫ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第五十六條 刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消ス可キ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地又ハ最後ノ住所地ヲ管轄スル地方裁判所ノ檢察其裁判所ニ請求ヲ爲ス可シ

前項ノ請求アリタルトキハ裁判所ハ被告人又ハ其代理人ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 第五十三條及ヒ前條ノ裁判及ヒ抗告ニ付テハ刑事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第五十八條 明治三十八年法律第七十號ニ依リ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケ仍ホ猶豫ノ期間ヲ經過セサル者ハ刑法ニ依リ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルモノト看做ス

第五十九條 明治三十九年法律第五十四號ハ之ヲ廢止ス

第六十條 私訴ハ公訴ニ附帶スルトキハ民事訴訟ノ方式ニ依ラス書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第六十一條 贓物犯人ノ手ニ在ルトキハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第六十二條 左ニ記載シタルモノヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用トス

- 一 豫審、公判ニ付キ呼出シタル證人、鑑定人及ヒ通事ニ給與ス可キ日當、旅費及ヒ止宿料
- 二 第六十六條ニ記載シタル費用

第六十三條 證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ左ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム

- 一 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金二十錢乃至金五十錢但止宿料ヲ給與スル場合ニ於テハ日當ヲ給與セス
- 二 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金三十錢乃至金五圓

第六十四條 證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸路一里ニ付キ金五錢乃至金二十錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

前項ニ掲ケタル者ノ止宿料ハ一日ニ付キ金二十錢乃至金一圓ノ範圍内ニ於テ豫審判事、受託判事又ハ裁判所之ヲ定ム但八里以上ノ地ヨリ來リ滞在スルトキニ非サレハ之ヲ給與セス

第六十五條 證人、鑑定人及ヒ通事ノ日當、旅費及ヒ止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結前公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非サレハ之ヲ給與セス



第六十六條 鑑定、通譯ニ付キ數多ノ時間又ハ特別ノ技能若クハ費用ヲ要スルトキハ日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第六十七條 附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
刑法附則其他舊刑法施行ノ爲メ公布シタル法令ハ之ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所構成法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第三十號 (官報 三月二十八日)  
裁判所構成法中左ノ通改正ス

第十六條ノ一 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル

第一 拘留又ハ科料ニ該ル罪

第二 竊盜ノ罪

第三 竊盜及刑法第二百五十四條ノ罪ノ贓物ニ關スル罪

第四 刑法第三百十條、第三百七十五條、第三百八十五條乃至第三百八十七條及第三百九條ノ罪竝ニ第三百十條ノ未遂罪

第五 一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪

二個以上ノ主刑中其ノ一個ヲ科スヘキ罪ニシテ其ノ刑前項第一又ハ第五ノ規定ニ適セサルモノアルトキハ區裁判所ハ其ノ裁判權ヲ有セス

第十六條ノ一ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ「第十六條ノ二」ヲ「第十六條ノ三」ニ改ム

第十六條ノ二 前條第一項第五ニ記載シタル罪ニ付テハ累犯又ハ併合罪トシテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其ノ裁判權ヲ有ス

第五十條第二號ヲ左ノ如ク改ム

第一 第一審ニシテ終審トシテ

刑法第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪竝ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判

附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ニ提起シタル訴訟ハ本法ニ依リ他ノ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノト雖モ受訴裁判所之ヲ裁判スヘシ

本法施行後重禁錮又ハ輕禁錮ニ處スヘキ罪ノ裁判權ニ付テハ重禁錮ヲ懲役ト看做シ輕禁錮ヲ禁錮ト看做ス



〔參照〕

法律第六號裁判所構成法(明治二十三年二月十日官報)抄録  
 第十六條ノ一 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル  
 第一 盜竊罪  
 第二 竊盜ノ罪及竊盜ノ贓物ニ關スル罪  
 第三 二百圓ヲ超過スル罰金ヲ併科又ハ附加セサル本刑六月以下ノ禁錮ニ該ル罪  
 第四 本刑二百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪  
 第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス  
 第一 終審トシテ  
 (イ) 第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告  
 (ロ) 控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告  
 第二 第一審ニシテ終審トシテ  
 刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノ、豫審及裁判

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所構成法施行條例中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第三十一號(官報三月二十八日)

裁判所構成法施行條例中左ノ通改正ス  
第十四條 削除

附則

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第二十二號裁判所構成法施行條例(明治二十三年三月十九日官報)抄録  
 第十四條 樺戸空知劍路ノ集治區ノ四人罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ノ裁判ニ關ル 明治十五年第十六號第四十一號及明治十八年第四十二號布告ハ仍効力ヲ有ス  
 前項ノ裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第三十二號(官報三月二十八日)

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中長野地方裁判所管内上田區裁判所管轄信濃國更級郡更級村、八幡村、桑原村及稻荷山町ヲ同地方裁判所管内長野區裁判所ノ管轄ニ變更ス

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本法施行前上田區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ同區裁判所之ヲ裁判ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十七日



法律第三十三號(官報三月二十八日)

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中名古屋地方裁判所管内西尾區裁判所管轄三河國碧海郡安城町大字福釜赤松古井同國同郡依佐美村大字高棚及同國幡豆郡豐坂村大字逆川桐山上六栗ヲ同地方裁判所管内岡崎區裁判所ノ管轄ニ同地方裁判所管内岡崎區裁判所管轄同國碧海郡櫻井村大字川島村高ヲ同地方裁判所管内西尾區裁判所ノ管轄ニ變更ス

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前西尾區裁判所又ハ岡崎區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ其ノ各區裁判所之ヲ裁判ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル關稅定率法輸入稅表中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十九日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第三十四號(官報三月三十日)

關稅定率法輸入稅表中左ノ通改正ス

醋

同

八〇〇

一三四ノ二  
一三四ノ三

醋酸石灰  
アセトン

同

〇、四一  
一五、一三

附則

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久  
內務大臣 原 敬  
文部大臣 男爵牧野伸顯

法律第三十五號(官報三月三十一日)

第一條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第一條乃至第十三條及明治二十九年法律第十三號第二條ノ規定ハ樺太廳立小學校教員及其ノ遺族ニ關シ之ヲ準用ス但シ府縣知事ノ職務ハ樺太廳長官之ヲ行フ

第二條 本法ニ依ル給與ハ國庫ノ支辨トス

第三條 樺太廳立小學校正教員ハ其ノ給料額ノ百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ



第四條 市町村立小學校正教員ノ在職年月數樺太廳立小學校正教員ノ在職年月數ハ本法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ相互之ヲ通算ス

府縣立師範學校長俸給及公立學校職員退隱料及遺族扶助料法、明治二十九年法律第十三號、明治三十三年法律第七十七號及在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依ル在職在官年月數ニ付テモ亦前項ニ同シ

前項ニ掲ケタル法律ニ依ル小學校ノ正教員ト樺太廳立小學校正教員トノ間ニ於ケル轉勤ハ之ヲ勸續ト看做ス

第五條 明治三十三年法律第七十五號第一條ノ規定ハ樺太廳立小學校正教員ノ退隱料及遺族扶助料ニ之ヲ準用ス

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル地租條例中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月二十日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久  
內務大臣 原 敬

法律第三十六號 (官報 三月三十一日)

地租條例中左ノ通改正ス

第四條第一項第六號鐵道用地「鐵道用地」ニ改ム

同條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

軌道用地ノ區域ニ關シテハ私設鐵道法第四十一條ノ規定ヲ準用ス

附則

本法ハ明治四十一年分地租ヨリ之ヲ適用ス

〔參照〕

第七號布告地租條例(明治十七年三月十五日)抄錄

第四條 左ニ掲ケル土地ニ付テハ其地租ヲ免ス

- 一 國府縣郡市町村其他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スル土地但有料借地ハ此限ニ在ラス
- 二 府縣郡市町村其他勅令ヲ以テ指定スル公共團體カ公用又ハ公共ノ用ニ供スヘキモノト定メタル其所有地但命令ノ定ムル期間内ニ公用又ハ公共ノ用ニ供セサルトキハ此限ニ在ラス
- 三 鄉村社地
- 四 墳墓地
- 五 用器水踏、溜池、隄塘、井溝
- 六 鐵道用地
- 七 保安林
- 八 公衆ノ用ニ供スル道路

府縣郡市町村其他ノ公共團體ハ前項ノ土地ニ租稅其他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ス但所有者以外ノ者前項第一號又ハ第二號ノ土地ヲ使用收益スル場合ニ於テ其土地ニ對シ使用者ニ租稅其他ノ公課ヲ課スルハ此限ニ在ラス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル地方稅制限ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十日

明治四十一年三月 法律 第三十七號



法律第三十七號(官報三月三十一日)

第一條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ地租附加税又ハ段別割ヲ課スルノ外土

地ニ對シテ課税スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣、北海道ノ區、一級町村及二級町村、沖繩縣ノ區及町村

附加税ノミヲ課スルトキ 地租百分ノ六十

段別割ノミヲ課スルトキ 一段歩ニ付 每地目平均金四十錢

附加税及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ六十ト附

加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

二 其ノ他ノ公共團體

附加税ノミヲ課スルトキ 地租百分ノ四十

段別割ノミヲ課スルトキ 一段歩ニ付 每地目平均金四十錢

附加税及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ四十ト附

加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ營業税附加税ヲ課スルノ外營業税ヲ納

ムル者ノ營業ニ對シ課税スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣 營業税百分ノ二十五

二 其ノ他ノ公共團體 營業税百分ノ三十五

第三條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ所得税附加税ヲ課スルノ外所得税ヲ納

ムル者ノ所得ニ對シ課税スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣 所得税百分ノ十

二 其ノ他ノ公共團體 所得税百分ノ三十五

第四條 府縣費ノ全部ヲ市ニ分賦シタル場合ニ於テハ市ハ前三條ノ市税制限ノ外其ノ分賦金額以

内ニ限リ府縣税制限ニ達スル迄課税スルコトヲ得

府縣費ノ一部ヲ市町村ニ分賦シタル場合ニ於テハ市町村ハ前三條ノ市町村税制限ノ外其ノ分賦

金額以内ニ限リ課税スルコトヲ得但シ府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ合算額ハ府縣税ノ制

限ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ内務大臣ノ許可ヲ受テ第一條乃至第三條ノ制限ヲ超

過シ其ノ百分ノ十二以内ニ於テ課税スルコトヲ得

左ニ掲グル場合ニ於テハ特ニ内務大臣ノ許可ヲ受テ前項ノ制限ヲ超過シテ課税スルコト

ヲ得

一 内務大臣兩大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ

二 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ

三 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ

四 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ

前二項ニ依リ制限ヲ超過シテ課税スルハ第一條乃至第三條ニ定メタル各税目ニ對スル賦課カ各



其ノ制限ニ達シタルトキニ限ル

前三項ノ規定ハ前條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條 本法ノ附加税ハ非常特別税法ニ依ル増徴額ニ對シテハ之ヲ課スルコトヲ得ス

第七條 本法ノ規定ハ特ニ賦課率ヲ定メタル特別法令ノ適用ヲ妨ケス

附則

本法ハ明治四十一年度ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中地租、營業税及所得税ノ地方税制限ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治四十年法律第三十一號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久  
内務大臣 原 敬

法律第三十八號(官報三月三十一日)

明治四十年法律第三十一號中左ノ通改正ス

第三條 地租ノ税額ニ付テハ前二條ノ規定ヲ適用セス其ノ税額及毎納期ノ分納額ニ一錢未滿ノ端  
數アルトキハ之ヲ五厘トシテ計算ス

第四條 國庫ノ收入金又ハ仕拂金ニシテ其ノ全額一錢未滿ノモノハ之ヲ五厘トシテ計算ス

國庫ノ收入金ニシテ收入印紙又ハ郵便切手ヲ以テ納メシムルモノニ付テハ第一條及前項ノ規定  
ヲ適用セス

一筆ノ土地ノ地價ニシテ其ノ全額一錢未滿ノモノハ切上ケテ一錢トス

前三項ノ外國庫ノ收入及仕拂上本法ノ規定ヲ適用セサルモノハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第三十一號(明治四十年三月三十日官報)抄錄

第三條 地租ノ税額ニ付テハ前二條ノ規定ヲ適用セス其ノ税額及毎納期ノ分納額ヲ厘位ニ止メ一厘未滿ノ端數ハ之ヲ切捨

第四條 國庫ノ收入金又ハ仕拂金ニシテ其ノ全額一錢未滿ノモノ及收入印紙又ハ郵便切手ヲ以テ納メシムルモノニ付テハ

第一條ノ規定ヲ適用セス一筆ノ土地ノ地價ニシテ其ノ全額一錢未滿ノモノニ付テモ亦同シ

前項ノ外國庫ノ收入及仕拂上本法ノ規定ヲ適用セサルモノハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治二十三年法律第二十七號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
陸軍大臣 子爵寺內正毅  
大藏大臣 松田正久



法律第三十九號(官報 三月三十一日)

明治二十三年法律第二十七號中左ノ通改正ス

第三條 委任經理ニ屬スル給與ノ殘金、廢物賣却代金及補償金ハ之ヲ積立金ト爲シ委任經理ニ係ル費途ニ使用スルコトヲ得

第四條 削除

附則

本法ハ明治四十一年度ヨリ之ヲ施行ス

従前ノ積立金ハ之ヲ本法ニ依ル積立金ニ併合ス

〔參照〕

法律第二十七號(明治二十三年三月三十一日官報抄録)

第三條 委任經理ニ係ル給與ノ殘金ハ各其數目ニ屬スル積立金ト爲シ便宜之ヲ使用スルコトヲ得

第四條 委任經理ニ屬スル廢物賣却代及損壞遺失等ノ補償金ハ各其經理費ニ充ルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル陸軍營繕費補充資金特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

陸軍大臣 子爵寺內正毅

大藏大臣 松田正久

法律第四十號(官報 三月三十一日)

陸軍營繕費補充資金特別會計法

第一條 陸軍營繕費補充資金ヲ置キ其ノ歲入歲出ハ一般ノ會計ト區分シ特別ノ會計ヲ設置ス

第二條 陸軍營繕費補充資金ハ陸軍ニ於ケル土地建造物ヨリ生スル收入及附屬雜收入ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 陸軍營繕費補充資金ハ左ノ目的ニ使用ス

一 陸軍ニ於ケル土地建造物ノ利用ニ要スル諸費

二 陸軍ニ於ケル土地建造物ノ營繕費補充

第四條 陸軍營繕費補充資金ヲ使用セムトスルトキハ其ノ金額ヲ一般ノ歲入ニ組入レ一般ノ歲出トシテ拂出スヘシ

第五條 陸軍營繕費補充資金ニシテ毎年度内ニ使用セサルモノハ翌年度ニ遞次繰越スヘシ

第六條 政府ハ毎年陸軍營繕費補充資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 陸軍營繕費補充資金ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル關稅定率法輸入稅表中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十一日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
大藏大臣 松田正久

法律第四十一號(官報四月一日)

關稅定率法輸入稅表中左ノ通改正ス

一七二 礦油

一 原油

割温蒸餾法ニ依リ攝氏百二十度ヨリ二百七十五度ニ至ル間ニ於テ蒸餾スル液ノ原液ノ容量ニ對スル百分率

甲 二十ヲ超エサルモノ  
乙 二十五ヲ超エサルモノ  
丙 三十ヲ超エサルモノ  
丁 三十五ヲ超エサルモノ  
戊 四十ヲ超エサルモノ  
己 其ノ他

但シ百分率四十五以上一ヲ増ス毎二十米ガルロンニ付一錢ヲ加フ

每十米ガルロン  
同  
同  
同  
同  
同

〇、一七  
〇、二一  
〇、二五  
〇、二九  
〇、三三  
〇、三六



二 其ノ他	攝氏十五度ニ於ケル比重	從	
甲	〇、七三〇ヲ超エサルモノ	每十米ガ	價二
乙	〇、八七五ヲ超エサルモノ	百	〇、九六
丙 其ノ他		斤	一、二三

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍人恩給法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年三月三十一日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
陸軍大臣 子爵寺内正毅  
海軍大臣 男爵齋藤 實

法律第四十二號(官報四月一日)

軍人恩給法中左ノ通改正ス

第二十二條中但書ヲ削リ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ規定ハ前條ニ當ルトキ及韓國沿岸ノ航海ニハ之ヲ適用セス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

法律第四十五號軍人恩給法(明治二十三年六月二十一日官報抄録)  
第二十二條 海軍軍人ノ外國航海ニ從軍年ニ準シ内國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半個年ニ加算ス其航海十二個月ニ起エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス但第二十一條ニ當ルトキハ本條ヲ適用セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル感化法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
内務大臣 原 敬  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第四十三號(官報四月八日)

感化法中左ノ通改正ス

第三條 感化院ニ關スル經費ハ北海道地方費及府縣ノ負擔トス

第五條 感化院ニハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ヲ入院セシム

一 滿八歳以上十八歳未滿ノ者ニシテ不良行爲ヲ爲シ又ハ不良行爲ヲ爲スノ虞アリ且適當ニ親權ヲ行フモノナク地方長官ニ於テ入院ヲ必要ト認メタル者

二 十八歳未滿ノ者ニシテ親權者又ハ後見人ヨリ入院ヲ出願シ地方長官ニ於テ其ノ必要ヲ認メタル者



三 裁判所ノ許可ヲ經テ懲戒場ニ入ルヘキ者  
 第十一條ノ二 國庫ハ道府縣ノ支出ニ對シ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ六分ノ一乃至二分ノ一ヲ補助ス  
 第十三條ノ二 府縣ハ共同シテ感化院ヲ設置スルコトヲ得  
 前項感化院ノ管理及費用分擔ノ方法ハ關係地方長官ノ協議ニ依リ之ヲ定ム若協議調ハサルトキハ内務大臣之ヲ定ム  
 第十三條ノ三 第五條ニ該當スル者ニシテ別ニ命令ヲ以テ定メタル者ハ之ヲ國立感化院ニ入院セシムルコトヲ得  
 第六條乃至第九條、第十一條、第十二條及第十三條ノ規定ハ國立感化院ニ之ヲ準用ス  
 第十四條中「府縣會ノ決議ヲ經」ヲ削ル  
 第十五條ヲ削ル

〔参照〕

法律第三十七號感化法(明治三十三年三月十日官報)抄録  
 第三條 感化院ニ關スル經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除クノ外府縣ノ負擔トス  
 第五條 感化院ニハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ヲ入院セシム  
 一 地方長官ニ於テ滿八歳以上十六歳未満ノ者ニ對スル適當ノ親權ヲ行フ者若ハ適當ノ後見人ナクシテ遊蕩又ハ乞丐ヲ爲シ若ハ惡交アリト認めタル者  
 二 懲戒場留置ノ言渡ヲ受ケタル幼者  
 三 裁判所ノ許可ヲ經テ懲戒場ニ入ルヘキ者  
 第十四條 本法施行ノ期日ハ府縣會ノ決議ヲ經テ地方長官ノ具申ニ依リ内務大臣之ヲ定ム  
 第十五條 北海道沖繩縣ニ關シテハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル獸疫豫防法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
農商務大臣 松岡康毅

法律第四十四號(官報 四月八日)  
獸疫豫防法中ノ通改正ス

第二條中第一項ノ割註ヲ「東京市、京都市及大阪市ニ於テハ區長、市制町村制ヲニ改ム」ニ改ム  
 第四條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ牛疫感染ノ疑アルモノニシテ第十四條ニ依リ地方長官東京府ハ警視總監以下之ニ依リニ於テ免疫血清ノ注射ヲ行ヒタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條ノ二 前條第一項但書ニ該當スルモノト雖地方長官ニ於テ必要ト認めルトキハ其ノ撲殺ヲ命スルコトヲ得

第五條中割註ヲ削ル

第六條中「及前條」ヲ「又ハ前二條」ニ改ム

第十條第一項中「第四條、第五條」ヲ「第四條、第四條ノ二、第五條」ニ改メ第三號ヲ左ノ如ク改ム

三 牛疫感染ノ疑アル爲撲殺シタル牛羊又ハ免疫血清若ハ豫防液ヲ注射シタル後撲殺シタル獸類  
 評價額五分ノ四



第十一條第四號乃至第六號ヲ左ノ如ク改ム

四 第十二條第二項ノ命令ニ違背シ移動シタル獸類及物品

五 第十四條ニ依リ注射ノ執行ヲ妨ケタル場合ニ於ケル獸類

六 第十五條ノ命令ニ違背シ検査ヲ受ケス又ハ輸入若ハ移入シタル獸類及物品

七 有病地ヨリ輸入又ハ移入シタル獸類及物品

第十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

警察官及獸醫又ハ検査委員ニ於テ必要ト認ムルトキハ一定ノ期間獸疫ニ罹リ又ハ其ノ疑アル獸類ヲ繋留シタル場所及其ノ近傍ニ對シ交通ヲ遮斷スルコトヲ得

第十四條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ獸類ニ付検査ヲ行ヒ又ハ免疫血清若ハ豫防液ノ注射ヲ行フコトヲ得

第十四條ノ二 警察官及獸醫又ハ検査委員獸類ノ検査又ハ免疫血清若ハ豫防液ノ注射ヲ行フ場合ニ於テ助力ヲ要求シタルトキハ所有者又ハ管理人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十五條 外國又ハ本法ヲ施行セサル地方ヨリ獸疫侵入ノ危険アリト認ムルトキハ有病地ヨリ又ハ有病地ヲ經テ輸入シ又ハ移入スル獸類及物品ノ検査ヲ行ヒ又ハ其ノ輸入若ハ移入ヲ停止スルコトヲ得

第十七條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第二條ニ違背シタル獸醫

二 第三條又ハ第四條第一項ニ違背シタル者

三 第五條又ハ第十二條ノ命令ニ違背シタル者

四 第十四條ニ依ル検査又ハ注射ヲ妨ケタル者

五 第十五條ノ検査ヲ受ケス又ハ輸入若ハ移入ノ停止ニ違背シタル者

第十九條 削除

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第六十號獸疫豫防法(明治二十九年三月三十日官報)抄録

第二條第一項

獸類獸疫ニ罹リタルコト若ハ其ノ疑アルコトヲ發見シタル所有者、管理人又ハ獸醫ハ直ニ其ノ旨ヲ所轄警察署又ハ市町村長ヲ知ルル地方長官ニ於テハ四月長又ハ之ニ準スヘキ者ニ届出ヘシ

第四條第一項

牛疫感染ノ疑アリ又ハ之ニ罹リタル牛、羊及狂犬病ニ罹リタル犬ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ検査委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ撲殺スヘシ

第五條

地方長官ハ以下ノニ依リテハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ病性鑑定ノ爲割檢ヲ要スル獸類ヲ撲殺シ又ハ鼻疽及皮膚傳染性胸膈肺炎、家虎列刺、柔羅斯疫ニ罹リタル獸類ノ撲殺ヲ命スルコトヲ得

第六條

所有者又ハ管理人第四條ノ指揮ニ從ハス及前條ノ命令ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ検査委員ニ於テ直ニ撲殺スルコトヲ得

第十條第一項

第十四條第五條及第八條第一項ノ場合ニ於テ地方長官ハ三人以上ノ評價人ヲシテ物品及發病前ノ獸類ノ價格ヲ評價セシムルコトヲ得

第十一條

此法律ニ依リ左ニ掲ケル獸類ヲ撲殺シ又ハ物品ヲ燒棄若ハ埋却シタルトキハ手當金ヲ下付セス 評價額五分ノ四

第十二條

命令ニ違背シ移動シタル獸類及物品



五 第十五條ノ命令ニ違背シ検査ヲ受ケス又ハ輸入シタル獸類及物品  
 六 有病地ヨリ輸入シタル獸類及物品  
 第十四條 地方長官ハ獸疫預防上必要ト認ムルトキハ區域ヲ限リ健康ヲ検査ヲ行フコトヲ得  
 第十五條 外國ヨリ獸疫侵入ノ危険アリト認ムルトキハ有病地ヨリ又ハ有病地ヲ經テ輸入スル獸類及物品ノ検査ヲ行ヒ若  
 ハ其ノ輸入ヲ停止スルコトヲ得  
 第十七條 第四條第一項ニ違背シタル者 第五條ノ命令ニ違背シタル者及第十五條ノ検査ヲ受ケス又ハ輸入停止ニ違背シタ  
 ル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
 獸疫第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ  
 第十九條 第三條ニ違背シタル者及第十二條ノ命令ニ違背シタル者ハ刑法第二百四十九條ノ例ニ依リ處罰ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル畜牛結核病豫防法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
 農商務大臣 松岡康毅  
 內務大臣 原 敬

法律第四十五號(官報 四月八日)

畜牛結核病豫防法中左ノ通改正ス

第七條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ韓國牛ニ對シテハ「ツベルクリン」注射ノ方法ニ依ラサルコトヲ得

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

法律第三十五號畜牛結核病豫防法(明治三十四年四月十三日官報)抄註

第七條第一項 外國ヨリ輸入スル畜牛ハ輸入申告後特ニ定メタル場所ニ於テ「ツベルクリン」注射ノ方法ニ依リ之ヲ検査ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル陸軍刑法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月九日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
 陸軍大臣 子爵寺内正毅

法律第四十六號(官報 四月十日)

陸軍刑法

第一編 總則

第二編 罪

第一章 叛亂ノ罪

第二章 擅權ノ罪

第三章 辱職ノ罪

第四章 抗命ノ罪

第五章 暴行脅迫ノ罪

第六章 侮辱ノ罪



第七章 逃亡ノ罪

第八章 軍用物損壞ノ罪

第九章 掠奪ノ罪

第十章 俘虜ニ關スル罪

第十一章 違令ノ罪

陸軍刑法

第一編 總則

第一條 本法ハ陸軍軍人ニシテ罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

第二條 本法ハ陸軍軍人ニ非スト雖左ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

一 第六十四條乃至第六十七條ノ罪及此等ノ罪ノ未遂罪

二 第七十四條ノ罪

三 第七十九條乃至第八十五條ノ罪

四 第八十六條乃至第八十九條ノ罪

五 第九十一條乃至第九十三條ノ罪及第九十一條第九十二條ノ未遂罪

六 第九十五條第一項第九十六條第九十七條第二項及第九十九條ノ罪

第三條 本法ハ前二條ニ記載シタル者帝國外ニ於テ罪ヲ犯シタルトキト雖之ヲ適用ス

第四條 帝國軍ノ占領地ニ於テ陸軍軍人刑法又ハ他ノ法令ノ罪ヲ犯シタルトキハ之ヲ帝國内ニ於テ犯シタルモノト看做ス

陸軍軍人ニ非スト雖帝國臣民從軍外國人及俘虜ノ犯シタルトキ亦前項ニ同シ

第五條 帝國外ニ在ル部隊ニ屬シ若ハ從フ者又ハ之ニ俘虜タル者其ノ部隊ノ所在地ニ於テ刑法又ハ他ノ法令ノ罪ヲ犯シタルトキ亦前條ニ同シ

第六條 陸軍ト共同作戰ニ從フ海軍軍人ニ對スル行爲ハ其ノ職務、官等、等級又ハ階級ニ相當スル陸軍軍人ニ對スル行爲ト看做ス

第七條 陸軍ト共同作戰ニ從フ外國ノ陸海軍ニ屬スル者ニ對スル行爲ハ其ノ職務、官等、等級又ハ階級ニ相當スル陸軍軍人ニ對スル行爲ト看做ス但シ其ノ外國ニ於テ同一ノ取扱ヲ爲スコトヲ保セサル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 陸軍軍人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ謂フ

一 陸軍ノ現役ニ在ル者但シ未タ入營セサル者及歸休兵ヲ除ク

二 召集中ノ在郷軍人

三 召集ニ依ラス部隊ニ在リテ陸軍軍人ノ勤務ニ服スル在郷軍人

四 前二號ニ記載シタル者ノ外陸軍ノ制服着用中又ハ現ニ服役上ノ義務履行中ノ在郷軍人

五 志願ニ依リ國民軍隊ニ編入セラレ服務中ノ者

第九條 左ニ記載シタル者ハ陸軍軍人ニ準ス

一 陸軍所屬ノ學生生徒

二 陸軍軍屬

三 陸軍ノ勤務ニ服スル海軍軍人

前項第一號ニ記載シタル者ノ中特ニ除外スヘキ者アルトキハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 陸軍將校相當官、陸軍准士官、海軍將校、同相當官、海軍候補生及海軍准士官ハ陸軍將校ニ準



ス陸軍士官ノ候補者ニシテ士官ノ勤務ニ服スル者亦同シ

第十一條 陸軍士官ノ候補者ニシテ下士ノ階級ニ在リ士官ノ勤務ニ服セサル者ハ陸軍下士ニ準ス  
第十二條 陸軍ノ兵役ニ在リテ官等、等級ヲ有セサル者ハ兵卒ニ準ス陸軍士官ノ候補者ニシテ兵卒ノ階級ニ在ル者亦同シ

第十三條 在郷軍人ト稱スルハ陸軍ノ現役以外ノ役ニ在ル者、陸軍ノ現役ニ在リテ未ダ入營セサル者、陸軍ノ歸休兵及退役陸軍將校、同相當官、准士官ヲ謂フ

第十四條 陸軍軍醫ト稱スルハ陸軍文官、同待遇者及宣誓シテ陸軍ノ勤務ニ服スル者ヲ謂フ但シ豫備又ハ退職ノ文官ハ此ノ限ニ在ラス

第十五條 海軍軍人ト稱スルハ海軍刑法ニ於テ海軍軍人ト爲ス者ヲ謂フ

第十六條 上官ト稱スルハ命令關係アル陸軍軍人間ニ於テ命令權ヲ有スル者ヲ謂フ

命令關係ナキ者ノ間ニ於テハ官等、等級又ハ階級ノ上ナル者ハ之ヲ上官ニ準ス但シ兵卒ハ下士勤務上等兵ヲ除ク外總テ同等トス

第十七條 司令官ト稱スルハ軍隊ノ司令ニ任スル陸軍軍人ヲ謂フ

第十八條 哨兵ト稱スルハ儀仗又ハ警戒ノ爲守地ニ在ル陸軍軍人ヲ謂フ

第十九條 部隊ト稱スルハ陸軍ノ軍隊官衙、學校、特務機關及戰時ニ於ケル陸軍ノ特設機關ヲ謂フ

第二十條 軍中ト稱スルハ左ニ記載シタル部隊ニ在ル場合ヲ謂フ

一 戰時ノ體勢ヲ執リタル部隊但シ留守部隊、備戍勤務ニ服スル後備又ハ國民諸隊、戰地以外ノ地ニ在ル輸送又ハ補給諸機關ニシテ對敵狀態ニ在ラサルモノヲ除ク  
二 戰時ノ體勢ヲ執ラサルモ對敵狀態ニ在ル部隊

三 事變又ハ一地方ノ騷擾ニ際シ其ノ鎮定ニ從事スル部隊

第二十一條 陸軍ニ於テ死刑ヲ執行スルトキハ陸軍法衙ヲ管轄スル長官ノ定ムル場所ニ於テ銃殺ス

第二十二條 多衆共同ノ暴行ヲ鎮壓スル爲又ハ敵前ニ在ル部隊ノ急迫ニ臨ミ軍紀ヲ保持スル爲已ムコトヲ得サルニ出テタル行爲ハ之ヲ罰セス

必要ノ程度ヲ超ニタル行爲ハ情狀ニ因リ其ノ刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第二十三條 前條ノ規定ハ刑法又ハ他ノ法令ノ罪ト爲ルヘキ行爲ニ亦之ヲ適用ス

第二十四條 本法及海軍刑法ニ於テ俱ニ罰スヘキ正條アリ且其ノ刑ニ輕重ナキトキハ陸軍軍人ニ準スル者ト雖海軍軍人ニ對シテハ海軍刑法ヲ適用ス

第二編 罪

第一章 叛亂ノ罪

第二十五條 黨ヲ結ヒ兵器ヲ執リ反亂ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁ハ死刑ニ處ス

二 謀議ニ參與シ又ハ群衆ノ指揮ヲ爲シタル者ハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他諸般ノ職務ニ從事シタル者ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 附和隨行シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第二十六條 反亂ヲ爲ス目的ヲ以テ黨ヲ結ヒ兵器、彈藥其ノ他軍用ニ供スル物ヲ劫掠シタル者ハ

前條ノ例ニ同シ

第二十七條 左ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス



一 軍隊又ハ要塞陣營艦船兵器彈藥其ノ他軍用ニ供スル場所建造物其ノ他ノ物ヲ敵國ニ交付スルコト

二 敵國ノ爲ニ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ幫助スルコト

三 軍事上ノ機密ヲ敵國ニ漏泄スルコト

四 敵國ノ爲ニ嚮導ヲ爲シ又ハ地理ヲ指示スルコト

五 敵國ニ降ラシムル爲司令官ヲ強要スルコト

六 敵國ノ爲ニ俘虜ヲ奪取シ又ハ之ヲ逃走セシムルコト

第二十八條 敵國ヲ利スル爲左ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス

一 要塞陣營艦船兵器彈藥其ノ他軍用ニ供スル場所建造物其ノ他ノ物ヲ損壞シ又ハ使用スルコト能ハサルニ至ラシムルコト

二 水陸ノ通路橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ軍隊艦船ノ往來ノ妨害ヲ生ゼシムルコト

三 司令官軍隊ヲ率テ守地若ハ配置ノ地ニ就カス又ハ其ノ地ヲ離ルルコト

四 隊兵ヲ解散シ又ハ其ノ潰走混亂ヲ誘起シ又ハ其ノ連絡集合ヲ妨害スルコト

五 兵器彈藥糧食被服其ノ他軍用ニ供スル物ヲ缺乏セシムルコト

六 命令通報若ハ報告ヲ詐リ傳ヘ又ハ虛偽ノ命令通報若ハ報告ヲ爲スコト

七 造言飛語シ又ハ敵前ニ於テ叫呼喧噪スルコト

第二十九條 前二條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第三十條 反亂者又ハ内亂者ヲ利スル爲前三條ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑無期若ハ三年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第三十一條 前六條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三十二條 第二十五條乃至第三十條ノ罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第三十三條 第二十五條又ハ第二十六條ノ罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者未タ事ヲ行ハサル前自首シタルトキハ其ノ刑ヲ免除ス

第三十四條 本章ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

第二章 擅權ノ罪

第三十五條 司令官外國ニ對シ故ナク戰鬪ヲ開始シタルトキハ死刑ニ處ス

第三十六條 司令官休戰又ハ媾和ノ告知ヲ受ケタル後故ナク戰鬪ヲ爲シタルトキハ死刑ニ處ス

第三十七條 司令官權外ノ事ニ於テ已ムコトヲ得サル理由ナクシテ擅ニ軍隊ヲ進退シタルトキハ死刑又ハ無期若ハ七年以上ノ禁錮ニ處ス

第三十八條 命令ヲ待タズ故ナク戰鬪ヲ爲シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ七年以上ノ禁錮ニ處ス

第三十九條 本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三章 辱職ノ罪

第四十條 司令官其ノ盡スヘキ所ヲ盡サスシテ敵ニ降リ又ハ要塞ヲ敵ニ委シタルトキハ死刑ニ處ス

第四十一條 司令官野戰ノ時ニ在リテ隊兵ヲ率非敵ニ降リタルトキハ其ノ盡スヘキ所ヲ盡シタル



場合ト雖六月以下ノ禁錮ニ處ス

第四十二條 司令官敵前ニ於テ其ノ盡スヘキ所ヲ盡サスシテ隊兵ヲ率井逃避シタルトキハ死刑ニ處ス

第四十三條 司令官軍隊ヲ率井故ナク守地若ハ配置ノ地ニ就カス又ハ其ノ地ヲ離レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑ニ處ス

二 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ五年以上ノ有期禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十四條 司令官出兵ヲ要求スル權アル官憲ヨリ其ノ要求ヲ受ケ故ナク之ニ應セサルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十五條 將校部隊若ハ一部ノ兵員ヲ率井又ハ之ニ屬シ輸送船舶ニ在リテ敵ノ艦船ニ遭遇シタル際其ノ盡スヘキ所ヲ盡サスシテ其ノ船舶ヲ退去シタルトキハ死刑、無期若ハ十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第四十六條 部下多衆共同シテ罪ヲ犯スニ當リ鎮定ノ方法ヲ盡ササル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十七條 哨兵故ナク守地ヲ離レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十八條 哨兵睡眠又ハ酩酊シテ其ノ職務ヲ怠リタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十九條 衛兵、控兵、巡察、斥候其ノ他警戒又ハ傳令ノ勤務ニ服スル者故ナク勤務ノ場所若ハ隊伍ヲ離レタルトキ又ハ到ルヘキ場所ニ到ラサルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑又ハ無期若ハ十年以上ノ禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十條 故ナク規則ニ依ラスシテ哨兵ヲ交代セシメ其ノ他哨令ニ違反シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ一年以上五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十一條 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ斥候、巡察又ハ偵察ノ勤務ニ服スル者虛偽ノ報告ヲ爲シタルトキハ七年以下ノ懲役ニ處ス

戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ軍事ニ關スル命令、通報又ハ報告ノ傳達ヲ掌ル者其ノ命令、通報若ハ報告ヲ詐リ傳ヘ又ハ故ナク之ヲ傳達セサルトキ亦前項ニ同シ

第五十二條 軍事機密ノ圖書、物件ヲ保管スル者危急ノ時ニ當リ之ヲ敵ニ委セサル方法ヲ盡ササルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十三條 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他軍用ニ供スル物ノ運搬又



ハ支給ヲ掌ル者故ナク之ヲ缺乏セシメタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第五十四條 健康ヲ害スヘキ飲食物ヲ配給シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ無期又ハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第五十五條 從軍ヲ免レ又ハ危険ナル勤務ヲ避クル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ、身體ヲ毀傷シ其ノ他詐僞ノ行爲ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ五年以上ノ有期懲役ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第五十六條 第四十條、第四十二條、第四十三條、第四十五條、第四十七條、第四十九條、第五十一條及第五十三條乃至第五十五條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第四章 抗命ノ罪

第五十七條 上官ノ命令ニ反抗シ又ハ之ニ服從セサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑又ハ無期若ハ十年以上ノ禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ一年以上七年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十八條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑又ハ無期禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ首魁ハ無期又ハ五年以上ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ三年以上十年以下ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十九條

暴行ヲ爲スニ當リ上官ノ制止ニ從ハサル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第五章 暴行脅迫ノ罪

第六十條 上官ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十一條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ無期若ハ十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ五年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十二條 上官ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用非テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十三條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス



第六十四條 哨兵ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ四年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十五條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十六條 哨兵ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用非テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十七條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ死刑、無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ無期若ハ二年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十八條 上官又ハ哨兵以外ノ陸軍軍人其ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ四年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

黨與シテ前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ首魁ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十九條 上官又ハ哨兵以外ノ陸軍軍人其ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用

井テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

黨與シテ前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ首魁ハ無期若ハ三年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十條 多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 附和隨行シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十一條 職權ヲ濫用シテ陵虐ノ行爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十二條 第六十條乃至第七十條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第六章 侮辱ノ罪

第七十三條 上官ヲ其ノ面前ニ於テ侮辱シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

文書、圖畫若ハ偶像ヲ公示シ又ハ演說ヲ爲シ其ノ他公然ノ方法ヲ以テ上官ヲ侮辱シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十四條 哨兵ヲ其ノ面前ニ於テ侮辱シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七章 逃亡ノ罪



第七十五條 故ナク職役ヲ離レ又ハ職役ニ就カサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ三日ヲ過キタルトキハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ニ於テ六日ヲ過キタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十六條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ 其ノ他ノ者ハ死刑、無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ三日ヲ過キタルトキハ首魁ハ五年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ 其ノ他ノ者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ニ於テ六日ヲ過キタルトキハ首魁ハ一年以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ 其ノ他ノ者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十七條 敵ニ奔リタル者ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處ス

第七十八條 第七十五條第一號、第七十六條第一號及前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第八章 軍用物損壞ノ罪

第七十九條 陸軍ノ工場、船舶、戰團ノ用ニ供スル建造物、汽車、電車若ハ橋梁又ハ陸軍ノ軍用ニ供スル物ヲ貯藏スル倉庫ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ十年以上ノ懲役ニ處ス

第八十條 露積シタル兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他陸軍ノ軍用ニ供スル物ヲ燒燬シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ無期又ハ一年以上ノ懲役ニ處ス

第八十一條 火藥、汽罐其ノ他激發スヘキ物ヲ破裂セシメテ前二條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ燒燬ノ例ニ同シ

第八十二條 第七十九條ニ記載シタル物又ハ陸軍戰團ノ用ニ供スル鐵道、電線若ハ水陸ノ通路ヲ損壞シ又ハ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ無期又ハ一年以上ノ懲役ニ處ス

第八十三條 兵器、彈藥、糧食、被服、馬匹其ノ他陸軍ノ軍用ニ供スル物ヲ毀棄又ハ傷害シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第八十四條 第七十九條乃至第八十二條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第八十五條 本章ノ規定ハ陸軍ト共同作戰ニ從フ外國陸海軍ノ軍用物ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

第九章 掠奪ノ罪

第八十六條 戰地又ハ帝國軍ノ占領地ニ於テ住民ノ財物ヲ掠奪シタル者ハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯スニ當リ婦女ヲ強姦シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス

第八十七條 戰場ニ於テ戰死者又ハ戰傷病者ノ衣服其ノ他ノ財物ヲ褫奪シタル者ハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス

第八十八條 前二條ノ罪ヲ犯ス者人ヲ傷シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處シ 死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第八十九條 本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス



第十章 俘虜ニ關スル罪

第九十條 俘虜ヲ看守又ハ護送スル者其ノ俘虜ヲ逃走セシメタルトキハ三年以上ノ有期懲役ニ處ス

第九十一條 俘虜ヲ逃走セシメタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

俘虜ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其ノ他逃走ヲ容易ナラシムヘキ行爲ヲ爲シタル者ハ七年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ目的ヲ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第九十二條 俘虜ヲ奪取シタル者ハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス

第九十三條 逃走シタル俘虜ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第九十四條 第九十條乃至第九十二條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十一章 違令ノ罪

第九十五條 哨兵ヲ欺キテ哨所ヲ通過シ又ハ哨兵ノ制止ニ背キタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ一年以上五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ戒嚴地境ナルトキハ三年以上禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

前項ノ外哨兵ニ對シ哨令ヲ犯シタル者亦前項ニ同シ

第九十六條 在郷軍人故ナク召集ノ期限ニ後レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 戰時ニ際シ又ハ事變ノ爲召集ヲ受ケタル場合ニ於テ五日ヲ過キタル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ニ於テ十日ヲ過キタル者ハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第九十七條 兵役ヲ免ルル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ、身體ヲ毀傷シ其ノ他詐僞ノ行爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

在郷軍人召集ヲ免ルル目的ヲ以テ前項ノ行爲ヲ爲シタルトキ亦前項ニ同シ

第九十八條 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ軍事ニ關スル虛僞ノ命令、通報又ハ報告ヲ爲シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第九十九條 戰時又ハ事變ニ際シ軍事ニ關シ造言飛語ヲ爲シタル者ハ三年以上ノ禁錮ニ處ス

第一百條 禮砲、號砲其ノ他空包ヲ發スヘキ場合ニ於テ彈丸、瓦石其ノ他ノ物ヲ裝填シテ發シタル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百一條 哨兵又ハ衛兵故ナク銃砲ヲ發シタルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百二條 戰時、軍中又ハ戒嚴地境ニ在リテ急呼ノ號報アリタル場合ニ故ナク來會セサル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百三條 政治ニ關シ上書、建白其ノ他請願ヲ爲シ又ハ演說若ハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百四條 服從ノ義務ニ違フヘキ事ヲ目的トシテ黨ヲ結ビタルトキハ首魁ハ六月以上五年以下ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治十四年第六十九號布告陸軍刑法ハ之ヲ廢止ス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル陸軍刑法施行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月九日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
陸軍大臣 子爵寺内正毅

法律第四十七號(官報四月十日)

陸軍刑法施行法

第一條 本法ニ於テ舊陸軍刑法ト稱スルハ明治十四年第六十九號布告陸軍刑法ヲ謂ヒ他ノ法律ト稱スルハ陸軍刑法施行前ニ施行シタル法律及勅令、布告ニシテ法律ト同一ノ效力ヲ有スルモノヲ謂フ

第二條 陸軍刑法施行前ニ舊陸軍刑法ノ罪又ハ他ノ法律ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ左ノ例ニ從ヒ陸軍刑法ニ定メタル主刑ト舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ノ主刑トヲ對照シ刑法第十條ノ規定ニ依リ其ノ輕重ヲ定ム

陸軍刑法ニ定メタル刑 舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ノ刑

死刑 死刑

無期懲役 無期徒刑

無期禁錮 無期徒刑

有期懲役 有期徒刑、重懲役、輕懲役、重禁錮

有期禁錮

有期流刑、重禁錮、輕禁錮、輕禁錮

第三條 刑法施行法第三條ノ規定ハ前條ニ定メタル刑ノ對照ニ之ヲ準用ス

第四條 刑法第六條ニ依リ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スル場合ニ於テハ剝奪公權、剝官、停止公權、監視又ハ罰金ヲ附加スヘキトキト雖之ヲ附加セス  
前項ノ場合ニ於テハ將校ニ非スシテ官職ヲ有スル者將校ニ在リテ剝官ヲ附加スル刑ニ該ルトキト雖其ノ官職ヲ失ハス

第五條 陸軍刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付陸軍刑法施行ノ前又ハ後ニ確定裁判アリタル後陸軍刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付裁判ヲ爲ストキハ左ノ例ニ依ル

一 確定裁判アリタル罪ニ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖陸軍刑法ニ於テハ其ノ罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

二 確定裁判アリタル罪ニ陸軍刑法ヲ適用シタルトキト雖舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ニ於テハ其ノ罪ト餘罪トニ付數罪俱發ニ關スル規定ニ依ル

第六條 左ニ記載シタル者陸軍刑法施行前更ニ陸軍刑法ノ有期懲役ニ相當スル刑ニ該ル舊陸軍刑法ノ罪ヲ犯シ陸軍刑法施行後其ノ罪ニ付裁判ヲ爲ストキハ陸軍刑法ニ於テハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

一 舊陸軍刑法ニ依リ陸軍刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ處セラレタル者

二 舊陸軍刑法ニ依リ陸軍刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ト同質ノ罪ニ因リ死刑ニ處セラレ共ノ執行ノ免除ヲ得又ハ減刑ニ因リ懲役ニ相當スル刑ニ減輕セラレタル者

刑法第五十六條第三項ノ規定ハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リ處斷セラレタル者ニ之ヲ準用ス



第七條 陸軍刑法施行前ニ犯シタル一罪ト陸軍刑法施行後ニ犯シタル陸軍刑法ノ一罪又ハ數罪トニ付同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ陸軍刑法施行前ノ罪ニ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキト雖其ノ罪ト陸軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第八條 陸軍刑法施行前ニ犯シタル數罪ト陸軍刑法施行後ニ犯シタル陸軍刑法ノ一罪又ハ數罪トニ付同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テ陸軍刑法施行前ノ罪ニ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リテ定マリタル一ノ重キ罪ト陸軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ陸軍刑法施行前ノ罪ニ陸軍刑法ヲ適用スヘキトキハ其ノ數罪ト陸軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第九條 陸軍刑法施行後ニ犯シタル陸軍刑法ノ罪ニ付確定裁判アリタル後陸軍刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ餘罪ニ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキト雖確定裁判アリタル罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第十條 陸軍刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付陸軍刑法施行後確定裁判アリタル後陸軍刑法施行後ニ犯シタル陸軍刑法ノ罪タル餘罪ニ付裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ確定裁判アリタル罪ニ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖其ノ罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第十一條 陸軍刑法ノ罪ト刑法又ハ刑法ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ノ罪ト併合罪タルヘキ場合ニ於テハ刑法又ハ刑法ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ノ罪ヲ陸軍刑法ノ罪ト看做シ第三條第五條及第七條乃至第十條ノ規定ヲ適用ス

第十二條 第六條第一項各號ニ記載シタル者陸軍刑法施行後有期懲役ニ該ル陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタルトキハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

第六條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十三條 陸軍刑法施行後ハ舊陸軍刑法又ハ海陸軍刑律ノ刑ニ處セラレタル者ト雖刑ノ執行、假出獄及時效ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス但シ死刑ニ付テハ陸軍ニ於テ之ヲ執行スル場合ニ限り陸軍刑法ノ規定ヲ準用ス他ノ法律ニ依リ處セラレタル死刑ニ付亦同シ

前項ノ場合ニ於テハ第二條及明治十五年第四號布告第一條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲スヘシ舊陸軍刑法ノ刑ニ處セラレタル者ノ陸軍刑法施行前ニ於ケル時効期間ノ起算及時效ノ中斷ニ付テハ期滿免除ニ關スル規定ニ從フ

第十四條 陸軍刑法施行後ハ他ノ法律ニ依リ處セラレタル罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル者ヲ勞役場ニ留置スル場合ニハ軍法會議ニ於テハ理事其ノ言渡ヲ爲スヘシ

第十五條 陸軍刑法施行後ハ刑法第六條ニ依リ舊陸軍刑法又ハ他ノ法律ノ刑ニ處スヘキ者ト雖刑ノ執行猶豫ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テハ第二條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲スヘシ

第十六條 陸軍刑法施行前假出獄ヲ許サレタル者及幽閉ヲ免セラレタル者ニ付テハ陸軍刑法施行ノ日ヨリ刑法ノ假出獄ニ關スル規定ヲ準用ス

第十七條 剝奪公權、停止公權及監視ノ言渡ハ陸軍刑法施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フ

第十八條 人ノ資格其ノ他ノ事項ニ關シ舊陸軍刑法ノ罪名又ハ罪別ヲ掲ケタル他ノ法律ノ規定ハ陸軍刑法施行ノ爲變更セラレルコトナシ

第十九條 刑法施行法第二十九條及第三十條ノ規定ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ陸軍刑法ノ罪ニ之



ヲ準用ス

第二十條 刑法施行法第三十三條乃至第三十六條ノ規定ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ陸軍刑法ニ定メタル刑又ハ舊陸軍刑法ノ刑ニ處セラレタル者ニ之ヲ準用ス

第二十一條 陸軍刑法ニ依リ六年未滿ノ懲役又ハ一年以上六年未滿ノ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊陸軍刑法ノ剝官ヲ附加セラレ又ハ之ヲ附加スヘキ刑ニ處セラレタル者ト看做ス舊陸軍刑法ノ剝官ヲ附加スヘキ刑ニ處セラレタル者ニ付亦同シ

第二十二條 他ノ法律中舊陸軍刑法第二十八條、第三十條及第三十一條ノ規定アル爲人ノ資格ニ關シ別段ノ規定ヲ設ケサリシ場合ニ付テハ舊陸軍刑法第二十八條、第三十條及第三十一條ノ規定ハ人ノ資格ニ關シ陸軍刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

第二十三條 舊陸軍刑法ト刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令トノ關係ニ付テハ舊陸軍刑法ヲ舊刑法ト看做シ刑法施行法第二條、第三條、第五條、第六條及第八條乃至第十一條ノ規定ヲ適用ス但シ剝官ニ關シテハ本法第四條ノ例ニ依ル

第二十四條 陸軍治罪法ニ於テ軍人ト稱スルハ陸軍刑法第八條第一號乃至第三號、第五號及第九條第一項第一號、第二號ニ記載シタル者ヲ謂ヒ海軍軍人ト稱スルハ海軍刑法第八條第一號、第二號及第九條第一項第一號、第二號ニ記載シタル者ヲ謂フ

第二十五條 刑事訴訟法第八條ノ規定ハ軍法會議ニ於テ審判スヘキ事件ニ之ヲ準用ス  
第二十六條 陸軍治罪法中復權及特赦ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス  
第二十七條 刑法第五十二條又ハ第五十八條ノ規定ニ依リ刑ヲ定ムヘキ場合ニ於テハ其ノ犯罪事實ニ付最終ノ判決ヲ爲シタル軍法會議ニ於テ判決ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第二十八條 軍法會議ニ於テハ刑ノ執行猶豫ハ判決ヲ以テ之ヲ爲シ刑ノ言渡ト同時ニ之ヲ言渡スヘシ  
第二十九條 刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消スヘキ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ爲シタル軍法會議、刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地ヲ管轄スル軍法會議又ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所屬部隊ノ軍法會議ニ於テ判決ヲ以テ之ヲ取消シ其ノ言渡ヲ爲スヘシ

第三十條 前三條ノ判決及其ノ言渡ニ付テハ陸軍治罪法中判決ニ關スル規定ヲ準用ス  
第三十一條 軍法會議ニ於テハ證人、鑑定人及通事ノ日當、旅費其ノ他ノ給與ニ關シ刑法施行法第六十三條乃至第六十六條ノ規定ヲ準用ス但シ豫審判事、受託判事又ハ裁判所ノ行フヘキ職務ハ理事之ヲ行フ

附則

本法ハ陸軍刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル海軍刑法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月九日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
海軍大臣 男爵齋藤 實

法律第四十八號 (官報 四月十日)  
海軍刑法

第一編 總則



第二編 罪

- 第一章 叛亂ノ罪
- 第二章 擅權ノ罪
- 第三章 辱職ノ罪
- 第四章 抗命ノ罪
- 第五章 暴行脅迫ノ罪
- 第六章 侮辱ノ罪
- 第七章 逃亡ノ罪
- 第八章 軍用物損壞ノ罪
- 第九章 掠奪ノ罪
- 第十章 俘虜ニ關スル罪
- 第十一章 違令ノ罪

海軍刑法

第一編 總則

- 第一條 本法ハ海軍軍人ニシテ罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス
- 第二條 本法ハ海軍軍人ニ非スト雖左ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス
  - 一 第六十二條乃至第六十五條ノ罪及此等ノ罪ノ未遂罪
  - 二 第七十二條ノ罪
  - 三 第七十八條乃至第八十五條ノ罪

- 四 第八十六條乃至第八十九條ノ罪
- 五 第九十一條乃至第九十三條ノ罪及第九十一條第九十二條ノ未遂罪
- 六 第九十五條第九十六條第九十七條第二項第九十八條及第百條ノ罪
- 第三條 本法ハ前二條ニ記載シタル者帝國外ニ於テ罪ヲ犯シタルトキト雖之ヲ適用ス
- 第四條 帝國軍ノ占領地ニ於テ海軍軍人刑法又ハ他ノ法令ノ罪ヲ犯シタルトキハ之ヲ帝國内ニ於テ犯シタルモノト看做ス
- 第五條 海軍軍人ニ非スト雖帝國臣民、從軍外國人及俘虜ノ犯シタルトキ亦前項ニ同シ
- 第五條 帝國外ニ在ル海軍官衙團隊ニ屬シ若ハ從フ者又ハ之ニ俘虜タル者其ノ官衙團隊ノ所在地ニ於テ刑法又ハ他ノ法令ノ罪ヲ犯シタルトキ亦前條ニ同シ
- 第六條 海軍ト共同作戰ニ從フ陸軍軍人ニ對スル行爲ハ其ノ職務、官等、等級又ハ階級ニ相當スル海軍軍人ニ對スル行爲ト看做ス
- 第七條 海軍ト共同作戰ニ從フ外國ノ陸海軍ニ屬スル者ニ對スル行爲ハ其ノ職務、官等、等級又ハ階級ニ相當スル海軍軍人ニ對スル行爲ト看做ス但シ其ノ外國ニ於テ同一ノ取扱ヲ爲スコトヲ保セサル場合ハ此ノ限ニ在ラス
- 第八條 海軍軍人ト稱スルハ海軍ノ高等武官、候補生、准士官及下士卒ニシテ左ニ記載シタル者ヲ謂フ
  - 一 現役ニ在ル者但シ召集中ニ非サル歸休兵ヲ除ク
  - 二 豫備役、後備役ニ在リ召集中ノ者
  - 三 前二號ニ記載シタル者ノ外海軍制服着用中ノ者



第九條 左ニ記載シタル者ハ海軍軍人ニ準ス

一 海軍所屬ノ學生、生徒

二 海軍軍屬

三 海軍ノ勤務ニ服スル陸軍軍人

前項第一號ニ記載シタル者ノ中特ニ除外スヘキ者アルトキハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 海軍軍屬ト稱スルハ海軍文官、同待遇者及宣誓シテ海軍ノ勤務ニ服スル者ヲ謂フ

第十一條 陸軍軍人ト稱スルハ陸軍刑法ニ於テ陸軍軍人ト爲ス者ヲ謂フ

第十二條 上官ト稱スルハ命令關係アル海軍軍人間ニ於テ命令權ヲ有スル者ヲ謂フ

命令關係ナキ者ノ間ニ於テハ官等、等級又ハ階級ノ上ナル者ハ之ヲ上官ニ準ス但シ卒ハ總テ同

等トス

第十三條 指揮官ト稱スルハ艦船、軍隊ヲ指揮スル海軍軍人ヲ謂フ

陸海軍用船又ハ拿捕船舶ニ乗組ミ之ヲ監督スル海軍軍人ハ指揮官ニ準ス

第十四條 守兵ト稱スルハ儀仗又ハ警戒ノ爲守所ニ在ル海軍軍人ヲ謂フ

第十五條 事變又ハ一地方ノ騷擾ニ際シ共ノ鎮定ニ從事スル艦船、軍隊ニハ戰時ノ規定ヲ適用ス

第十六條 海軍ニ於テ死刑ヲ執行スルトキハ海軍法術ヲ管轄スル長官ノ定ムル場所ニ於テ銃殺ス

第十七條 多衆共同ノ暴行ヲ鎮壓スル爲又ハ敵前若ハ艦船危急ノ際ニ於テ軍紀ヲ保持スル爲已ム

コトヲ得サルニ出テタル行爲ハ之ヲ罰セス

必要ノ程度ヲ超エタル行爲ハ情狀ニ因リ其ノ刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第十八條 前條ノ規定ハ刑法又ハ他ノ法令ノ罪ト爲ルニキ行爲ニ亦之ヲ適用ス

第十九條 本法及陸軍刑法ニ於テ俱ニ罰スヘキ正條アリ且共ノ刑ニ輕重ナキトキハ海軍軍人ニ準

スル者ト雖陸軍軍人ニ對シテハ陸軍刑法ヲ適用ス

第二編 罪

第一章 叛亂ノ罪

第二十條 黨ヲ結ヒ兵器ヲ執リ反亂ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁ハ死刑ニ處ス

二 謀議ニ參與シ又ハ群衆ノ指揮ヲ爲シタル者ハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處

シ共ノ他諸般ノ職務ニ從事シタル者ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 附和隨行シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第二十一條 反亂ヲ爲ス目的ヲ以テ黨ヲ結ヒ兵器、彈藥共ノ他軍用ニ供スル物ヲ劫掠シタル者ハ

前條ノ例ニ同シ

第二十二條 左ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス

一 軍隊又ハ艦船、兵器、彈藥共ノ他軍用ニ供スル場所、建造物共ノ他ノ物ヲ敵國ニ交付スルコト

二 敵國ノ爲ニ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ幫助スルコト

三 軍事上ノ機密ヲ敵國ニ漏泄スルコト

四 敵國ノ爲ニ嚮導ヲ爲シ又ハ地理ヲ指示スルコト

五 敵國ニ降ラシムル爲指揮官ヲ強要スルコト

六 敵國ノ爲ニ俘虜ヲ奪取シ又ハ之ヲ逃走セシムルコト

第二十三條 敵國ヲ利スル爲左ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス



一 艦船、兵器、彈藥其ノ他軍用ニ供スル場所、建造物其ノ他ノ物ヲ損壞シ又ハ使用スルコト能ハサルニ至ラシムルコト

二 水陸ノ通路、橋梁、燈臺、浮標ヲ損壞又ハ壅塞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ艦船、軍隊ノ往來ノ妨害ヲ生セシムルコト

三 指揮官其ノ艦船、軍隊ヲ率テ守所若ハ配置ノ場所ニ就カス又ハ其ノ場所ヲ離ルルコト

四 艦隊、隊兵ヲ解散シ又ハ其ノ潰走、混亂ヲ誘起シ又ハ艦船、隊兵ノ連絡、集合ヲ妨害スルコト

五 兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他軍用ニ供スル物ヲ缺乏セシムルコト

六 命令、通報若ハ報告ヲ詐リ傳ヘ又ハ虛偽ノ命令、通報若ハ報告ヲ爲スコト

七 造言、飛語シ又ハ敵前ニ於テ叫呼、喧噪スルコト

第二十四條 前二條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第二十五條 反亂者又ハ内亂者ヲ利スル爲前二條ニ記載シタル行爲ヲ爲シタル者ハ死刑、無期若ハ三年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第二十六條 前六條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二十七條 第二十條乃至第二十五條ノ罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第二十八條 第二十條又ハ第二十一條ノ罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者未タ事ヲ行ハサル前自首シタルトキハ其ノ刑ヲ免除ス

第二十九條 本章ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

第二章 擅權ノ罪

第二十條 指揮官外國ニ對シテ故ナク戰闘ヲ開始シタルトキハ死刑ニ處ス

第二十一條 指揮官休戰又ハ媾和ノ告知ヲ受ケタル後故ナク戰闘ヲ爲シタルトキハ死刑ニ處ス

第二十二條 指揮官艦外ノ事ニ於テ已ムコトヲ得サル理由ナクシテ擅ニ艦船、軍隊ヲ進退シタルトキハ死刑又ハ無期若ハ七年以上ノ禁錮ニ處ス

第二十三條 命令ヲ待タズ故ナク戰闘ヲ爲シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ七年以上ノ禁錮ニ處ス

第二十四條 本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第三章 辱職ノ罪

第三十五條 指揮官其ノ盡スヘキ所ヲ盡サスシテ敵ニ降リ又ハ其ノ艦船若ハ守所ヲ敵ニ委シタルトキハ死刑ニ處ス

第三十六條 指揮官敵前ニ於テ其ノ盡スヘキ所ヲ盡サスシテ艦船、軍隊ヲ率テ逃避シタルトキハ死刑ニ處ス

第三十七條 指揮官其ノ艦船危急ノ時ニ當リ故ナク救護ノ方法ヲ盡サス又ハ衆ニ先チテ其ノ艦船ヲ退去シタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ無期又ハ三年以上ノ禁錮ニ處ス

第三十八條 指揮官敵ノ船舶ヲ拿捕スヘキ場合ニ於テ故ナク之ヲ拿捕セサルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第三十九條 指揮官敵前ニ於テ帝國又ハ帝國ト共同作戰ニ從フ外國ノ艦船ヲ救護スヘキ場合ニ於



テ故ナク之ヲ救護セサルトキハ一年以上ノ有期禁錮ニ處ス

第四十條 指揮官護衛ノ命ヲ受ケタル艦船ヲ故ナク委棄シタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑ニ處ス

二 戰時ナルトキハ五年以上ノ有期禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十一條 指揮官其ノ艦船軍隊ヲ率非故ナク守所若ハ配置ノ場所ニ就カス又ハ其ノ場所ヲ離レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑ニ處ス

二 戰時ナルトキハ五年以上ノ有期禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十二條 指揮官又ハ乗員故ナク其ノ艦船ヲ覆没又ハ破壊シタルトキハ死刑ニ處シ之ヲ損壞シタルトキハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

第四十三條 指揮官出兵ヲ要求スル權アル官憲ヨリ其ノ要求ヲ受ケ故ナク之ニ應セサルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十四條 指揮官衝突、坐礁其ノ他ノ危難ニ罹リタル艦船アルニ當リ救護ノ請求ヲ受ケ故ナク之ニ應セサルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十五條 部下多衆共同シテ罪ヲ犯スニ當リ鎮定ノ方法ヲ盡ササル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十六條 艦船當直將校、守兵其ノ他緊要ナル勤務ニ服スル者故ナク其ノ勤務ノ場所ヲ離レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑又ハ無期ノ禁錮ニ處ス

二 戰時又ハ擱岸、坐礁其ノ他艦船危險ノ場合ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十七條 艦船當直將校睡眠又ハ酩酊シテ其ノ職務ヲ怠リタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 戰時又ハ航海中ナルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十八條 守兵其ノ他緊要ナル勤務ニ服スル者前條ノ罪ヲ犯シタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 戰時又ハ航海中ナルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第四十九條 戰時又ハ事變ニ際シ偵察ノ勤務ニ服スル者虛偽ノ報告ヲ爲シタルトキハ七年以下ノ懲役ニ處ス

戰時又ハ事變ニ際シ軍事ニ關スル命令、通報又ハ報告ノ傳達ヲ掌ル者其ノ命令、通報若ハ報告ヲ詐リ傳へ又ハ故ナク之ヲ傳達セサルトキ亦前項ニ同シ

第五十條 軍事機密ノ圖書、物件ヲ保管スル者危急ノ時ニ當リ之ヲ敵ニ委セサル方法ヲ盡ササルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十一條 戰時又ハ事變ニ際シ兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他軍用ニ供スル物ノ運搬又ハ支給ヲ掌ル者故ナク之ヲ缺乏セシメタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第五十二條 健康ヲ害スヘキ飲食物ヲ配給シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス因テ人ヲ死



ニ致シタル者ハ無期又ハ五年以上ノ懲役ニ處ス

第五十三條 從軍ヲ免レ又ハ危險ナル勤務ヲ避クル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ、身體ヲ毀傷シ其ノ他詐僞ノ行爲ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ五年以上ノ有期懲役ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第五十四條 第三十五條乃至第三十七條、第四十條乃至第四十二條、第四十六條、第四十九條及第五十一條乃至第五十三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第四章 抗命ノ罪

第五十五條 上官ノ命令ニ反抗シ又ハ之ニ服從セサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑又ハ無期若ハ十年以上ノ禁錮ニ處ス

二 戰時又ハ艦船救護ノ爲緊要ノ方略ヲ爲ス際ナルトキハ一年以上七年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十六條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑又ハ無期禁錮ニ處ス

二 戰時又ハ艦船救護ノ爲緊要ノ方略ヲ爲ス際ナルトキハ首魁ハ無期又ハ五年以上ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ三年以上十年以下ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

第五十七條 暴行ヲ爲スニ當リ上官ノ制止ニ從ハサル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第五章 暴行脅迫ノ罪

第五十八條 上官ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第五十九條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ無期若ハ十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ五年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十條 上官ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ無期若ハ二年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十一條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十二條 守兵ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス



二 其ノ他ノ場合ナルトキハ四年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十三條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十四條 守兵ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用井テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十五條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ首魁ハ死刑、無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ無期若ハ二年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十六條 上官又ハ守兵以外ノ海軍軍人其ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ四年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

黨與シテ前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ首魁ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十七條 上官又ハ守兵以外ノ海軍軍人其ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シ兵器又ハ兇器ヲ用井テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

黨與シテ前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ首魁ハ無期若ハ三年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十八條 多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁ハ三年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二 他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三 附和隨行シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第六十九條 職權ヲ濫用シテ陵虐ノ行爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十條 第五十八條乃至第六十八條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第六章 侮辱ノ罪

第七十一條 上官ヲ其ノ面前ニ於テ侮辱シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

文書、圖畫若ハ偶像ヲ公示シ又ハ演說ヲ爲シ其ノ他公然ノ方法ヲ以テ上官ヲ侮辱シタル者ハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七十二條 守兵ヲ其ノ面前ニ於テ侮辱シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

第七章 逃亡ノ罪

第七十三條 故ナク職役ヲ離レ又ハ職役ニ就カサル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス



二 戰時ニ在リテ三日ヲ過キタルトキハ五年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 三 其ノ他ノ場合ニ於テ六日ヲ過キタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 第七十四條 黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス  
 一 敵前ナルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ死刑、無期若ハ七年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 二 戰時ニ在リテ三日ヲ過キタルトキハ首魁ハ五年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 三 其ノ他ノ場合ニ於テ六日ヲ過キタルトキハ首魁ハ一年以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 第七十五條 艦船ノ乘員故ナク其ノ艦船發航ノ期ニ後レタルトキハ其ノ經過日數ヲ問ハス前二條ノ規定ヲ適用ス  
 第七十六條 敵ニ奔リタル者ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ處ス  
 第七十七條 第七十三條第一號、第七十四條第一號及前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス  
 第八章 軍用物損壞ノ罪  
 第七十八條 海軍ノ艦船、工場、戰闘ノ用ニ供スル建造物、汽車、電車若ハ橋梁又ハ海軍ノ軍用ニ供スル物ヲ貯藏スル倉庫ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ十年以上ノ懲役ニ處ス  
 第七十九條 露積シタル兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他海軍ノ軍用ニ供スル物ヲ燒燬シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス  
 一 戰時ナルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス  
 二 其ノ他ノ場合ナルトキハ無期又ハ二年以上ノ懲役ニ處ス

第八十條 火藥、汽罐其ノ他激發スヘキ物ヲ破裂セシメテ前二條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ燒燬ノ例ニ同シ  
 第八十一條 海軍ノ艦船ヲ覆没又ハ破壞シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス  
 第八十二條 第七十八條ニ記載シタル物又ハ海軍戰闘ノ用ニ供スル鐵道、電線若ハ水陸ノ通路ヲ損壞シ又ハ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ無期又ハ二年以上ノ懲役ニ處ス  
 第八十三條 兵器、彈藥、糧食、被服其ノ他海軍ノ軍用ニ供スル物ヲ毀棄又ハ傷害シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス  
 第八十四條 第七十八條乃至第八十二條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス  
 第八十五條 本章ノ規定ハ海軍ト共同作戰ニ從フ外國陸海軍ノ軍用物ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス  
 第九章 掠奪ノ罪  
 第八十六條 戰地又ハ帝國國軍ノ占領地ニ於テ住民ノ財物ヲ掠奪シタル者ハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス  
 前項ノ罪ヲ犯スニ當リ婦女ヲ強姦シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス  
 第八十七條 戰場ニ於テ戰死者又ハ戰傷病者ノ衣服其ノ他ノ財物ヲ褫奪シタル者ハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス  
 第八十八條 前二條ノ罪ヲ犯ス者人ヲ傷シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處シ死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス



第八十九條 本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十章 俘虜ニ關スル罪

第九十條 俘虜ヲ看守又ハ護送スル者其ノ俘虜ヲ逃走セシメタルトキハ三年以上ノ有期懲役ニ處ス

第九十一條 俘虜ヲ逃走セシメタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

俘虜ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其ノ他逃走ヲ容易ナラシムヘキ行為ヲ爲シタル者ハ七年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ目的ヲ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

第九十二條 俘虜ヲ奪取シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

第九十三條 逃走シタル俘虜ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第九十四條 第九十條乃至第九十二條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十一章 違令ノ罪

第九十五條 守兵ヲ欺キテ守所ヲ通過シ又ハ守兵ノ制止ニ背キタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ一年以上五年以下ノ禁錮ニ處ス

二 戰時ナルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

三 其ノ他ノ場合ナルトキハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第九十六條 歸休兵及豫備役、後備役ニ在ル者故ナク召集ノ期限ニ後レタルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 戰時ニ際シ又ハ事變ノ爲召集ヲ受ケタル場合ニ於テ五日ヲ過キタル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

處ス

二 其ノ他ノ場合ニ於テ十日ヲ過キタル者ハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

第九十七條 兵役ヲ免ルル目的ヲ以テ疾病ヲ作爲シ、身體ヲ毀傷シ其ノ他詐僞ノ行為ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

歸休兵及豫備役、後備役ニ在ル者召集ヲ免ルル目的ヲ以テ前項ノ行為ヲ爲シタルトキ亦前項ニ同シ

第九十八條 艦船ノ危急ニ際シ指揮官ノ指揮ヲ待タズ其ノ艦船ヲ退去シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ナルトキハ三年以上ノ有期禁錮ニ處ス

二 其ノ他ノ場合ナルトキハ五年以下ノ禁錮ニ處ス

第九十九條 戰時又ハ事變ニ際シ軍事ニ關スル虚偽ノ命令、通報又ハ報告ヲ爲シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス

第一百條 戰時又ハ事變ニ際シ軍事ニ關シ造言飛語ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百一條 禮砲、號砲其ノ他空包ヲ發スヘキ場合ニ於テ彈丸、瓦石其ノ他ノ物ヲ裝填シテ發シタル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百二條 守兵故ナク銃砲ヲ發シタルトキハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百三條 戰時又ハ事變ニ際シ急呼ノ號報アリタル場合ニ故ナク來會セサル者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

第一百四條 政治ニ關シ上書、建白其ノ他請願ヲ爲シ又ハ演說若ハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタル者

ニ處ス



ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス  
第二百五條 服從ノ義務ニ違フヘキ事ヲ目的トシテ黨ヲ結ビタルトキハ首魁ハ六月以上五年以下ノ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ二年以下ノ禁錮ニ處ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治十四年第七十號布告海軍刑法ハ之ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル海軍刑法施行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月九日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
海軍大臣 男爵齋藤 實

法律第四十九號(官報四月十日)

海軍刑法施行法

第一條 本法ニ於テ舊海軍刑法ト稱スルハ明治十四年第七十號布告海軍刑法ヲ謂ヒ他ノ法律ト稱スルハ海軍刑法施行前ニ施行シタル法律及勅令、布告ニシテ法律ト同一ノ效力ヲ有スルモノヲ謂フ

第二條 海軍刑法施行前ニ舊海軍刑法ノ罪又ハ他ノ法律ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ左ノ例ニ從ヒ海軍刑法ニ定メタル主刑ト舊海軍刑法又ハ他ノ法律ノ主刑トヲ對照シ刑法第十條ノ規定ニ依リ

其ノ輕重ヲ定ム

海軍刑法ニ定メタル刑

舊海軍刑法又ハ他ノ法律ノ刑

死刑

死刑

無期懲役

無期徒刑

無期禁錮

無期流刑

有期懲役

有期徒刑、重懲役、輕懲役、重禁錮

有期禁錮

有期流刑、重禁獄、輕禁獄、輕禁錮

第三條 刑法施行法第三條ノ規定ハ前條ニ定メタル刑ノ對照ニ之ヲ準用ス

第四條 刑法第六條ニ依リ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スル場合ニ於テハ剝奪公權、剝官、停止公權、監視又ハ罰金ヲ附加スヘキトキト雖之ヲ附加セス

前項ノ場合ニ於テハ將校ニ非スシテ官職ヲ有スル者將校ニ在リテ剝官ヲ附加スル刑ニ該ルトキト雖其ノ官職ヲ失ハス

第五條 海軍刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付海軍刑法施行ノ前又ハ後ニ確定裁判アリタル後海軍刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付裁判ヲ爲ストキハ左ノ例ニ依ル

一 確定裁判アリタル罪ニ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖海軍刑法ニ於テハ其ノ罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

二 確定裁判アリタル罪ニ海軍刑法ヲ適用シタルトキト雖舊海軍刑法又ハ他ノ法律ニ於テハ其ノ罪ト餘罪トニ付數罪俱發ニ關スル規定ニ依ル

第六條 左ニ記載シタル者海軍刑法施行前更ニ海軍刑法ノ有期懲役ニ相當スル刑ニ該ル舊海軍刑法



法ノ罪ヲ犯シ海軍刑法施行後其ノ罪ニ付裁判ヲ爲ストキハ海軍刑法ニ於テハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス

一 舊海軍刑法ニ依リ海軍刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ處セラレタル者  
二 舊海軍刑法ニ依リ海軍刑法ノ懲役ニ相當スル刑ニ該ル罪ト同質ノ罪ニ依リ死刑ニ處セラレ其ノ執行ノ免除ヲ得又ハ減刑ニ依リ懲役ニ相當スル刑ニ減輕セラレタル者

刑法第五十六條第三項ノ規定ハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リ處斷セラレタル者ニ之ヲ準用ス  
第七條 海軍刑法施行前ニ犯シタル一罪ト海軍刑法施行後ニ犯シタル海軍刑法ノ一罪又ハ數罪トニ付同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ海軍刑法施行前ノ罪ニ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキト雖其ノ罪ト海軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第八條 海軍刑法施行前ニ犯シタル數罪ト海軍刑法施行後ニ犯シタル海軍刑法ノ一罪又ハ數罪トニ付同時ニ裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ海軍刑法施行前ノ罪ニ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキハ數罪俱發ニ關スル規定ニ依リテ定マリタル一ノ重キ罪ト海軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ海軍刑法施行前ノ罪ニ海軍刑法ヲ適用スヘキトキハ其ノ數罪ト海軍刑法施行後ノ一罪又ハ數罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ適用ス

第九條 海軍刑法施行後ニ犯シタル海軍刑法ノ罪ニ付確定裁判アリタル後海軍刑法施行前ニ犯シタル餘罪ニ付裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ餘罪ニ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用スヘキトキト雖確定裁判アリタル罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス  
第十條 海軍刑法施行前ニ犯シタル罪ニ付海軍刑法施行後確定裁判アリタル後海軍刑法施行後ニ

犯シタル海軍刑法ノ罪タル餘罪ニ付裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ確定裁判アリタル罪ニ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ヲ適用シタルトキト雖其ノ罪ト餘罪トニ付併合罪ニ關スル規定ヲ準用ス

第十一條 海軍刑法ノ罪ト刑法又ハ刑法ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ノ罪ト併合罪タルヘキ場合ニ於テハ刑法又ハ刑法ノ罪名ニ依リ刑ヲ定メタル法令ノ罪ヲ海軍刑法ノ罪ト看做シ第三條第五條及第七條乃至第十條ノ規定ヲ適用ス

第十二條 第六條第一項各號ニ記載シタル者海軍刑法施行後有期懲役ニ該ル海軍刑法ノ罪ヲ犯シタルトキハ累犯ニ關スル規定ヲ準用ス  
第六條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十三條 海軍刑法施行後ハ舊海軍刑法又ハ海陸軍刑律ノ刑ニ處セラレタル者ト雖刑ノ執行、假出獄及時效ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス但シ死刑ニ付テハ海軍ニ於テ之ヲ執行スル場合ニ限り海軍刑法ノ規定ヲ準用ス他ノ法律ニ依リ處セラレタル死刑ニ付亦同シ

前項ノ場合ニ於テハ第二條及明治十五年第四號布告第一條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲スヘシ  
舊海軍刑法ノ刑ニ處セラレタル者ノ海軍刑法施行前ニ於ケル時効期間ノ起算及時效ノ中斷ニ付テハ期滿免除ニ關スル規定ニ從フ

第十四條 海軍刑法施行後ハ他ノ法律ニ依リ處セラレタル罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル者ヲ勞役場ニ留置スル場合ニハ軍法會議ニ於テハ主理其ノ言渡ヲ爲スヘシ  
第十五條 海軍刑法施行後ハ刑法第六條ニ依リ舊海軍刑法又ハ他ノ法律ノ刑ニ處スヘキ者ト雖刑ノ執行猶豫ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス  
前項ノ場合ニ於テハ第二條ノ例ニ依リ主刑ノ對照ヲ爲スヘシ



第十六條 海軍刑法施行前假出獄ヲ許サレタル者及幽閉ヲ免セラレタル者ニ付テハ海軍刑法施行ノ日ヨリ刑法ノ假出獄ニ關スル規定ヲ準用ス

第十七條 剝奪公權停止公權及監視ノ言渡ハ海軍刑法施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フ

第十八條 人ノ資格其ノ他ノ事項ニ關シ舊海軍刑法ノ刑名又ハ罪別ヲ掲ケタル他ノ法律ノ規定ハ海軍刑法ノ施行ノ爲變更セラレルコトナシ

第十九條 刑法施行法第二十九條及第三十條ノ規定ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ海軍刑法ノ罪ニ之ヲ準用ス

第二十條 刑法施行法第三十三條乃至第三十六條ノ規定ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ海軍刑法ニ定メタル刑又ハ舊海軍刑法ノ刑ニ處セラレタル者ニ之ヲ準用ス

第二十一條 海軍刑法ニ依リ六年未滿ノ懲役又ハ一年以上六年未滿ノ禁錮ニ處セラレタル者ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊海軍刑法ノ剝奪公權ニ付テハ之ヲ附加スヘキ刑ニ處セラレタル者ト看做ス舊海軍刑法ノ剝奪公權ニ付テハ之ヲ附加スヘキ刑ニ處セラレタル者ニ付亦同シ

第二十二條 他ノ法律中舊海軍刑法第十七條、第十八條及第二十一條ノ規定アル爲人ノ資格ニ關シ別段ノ規定ヲ設ケサリシ場合ニ付テハ舊海軍刑法第十七條、第十八條及第二十一條ノ規定ハ人ノ資格ニ關シ海軍刑法施行前ト同一ノ效力ヲ有ス

第二十三條 舊海軍刑法ト刑法又ハ刑法ノ刑名ニ依リ刑ヲ定メタル法令トノ關係ニ付テハ舊海軍刑法ヲ看做シ刑法施行法第二條、第三條、第五條、第六條及第八條乃至第十一條ノ規定ヲ適用ス但シ剝奪公權ニ關シテハ本法第四條ノ例ニ依ル

第二十四條 海軍治罪法ニ於テ軍人ト稱スルハ海軍刑法第八條第一號、第二號及第九條第一項第一號、第二號ニ記載シタル者ヲ謂ヒ陸軍軍人ト稱スルハ陸軍刑法第八條第一號乃至第三號、第五號及第九條第一項第一號、第二號ニ記載シタル者ヲ謂フ

第二十五條 刑事訴訟法第八條ノ規定ハ軍法會議ニ於テ審判スヘキ事件ニ之ヲ準用ス

第二十六條 海軍治罪法中復權及特赦ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

第二十七條 刑法第五十二條又ハ第五十八條ノ規定ニ依リ刑ヲ定ムヘキ場合ニ於テハ其ノ犯罪事實ニ付最終ノ判決ヲ爲シタル軍法會議ニ於テ判決ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第二十八條 軍法會議ニ於テハ刑ノ執行猶豫ハ判決ヲ以テ之ヲ爲シ刑ノ言渡ト同時ニ之ヲ言渡スヘシ

第二十九條 刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ取消スヘキ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ爲シタル軍法會議又ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ所在地ニ最モ近キ軍法會議ニ於テ判決ヲ以テ之ヲ取消シ其ノ言渡ヲ爲スヘシ

第三十條 前三條ノ判決及其ノ言渡ニ付テハ海軍治罪法中判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第三十一條 軍法會議ニ於テハ證人、鑑定人及通事ノ日當、旅費其ノ他ノ給與ニ關シ刑法施行法第六十三條乃至第六十六條ノ規定ヲ準用ス但シ豫審判事、受託判事又ハ裁判所ノ行フヘキ職務ハ主理之ヲ行フ

附則

本法ハ海軍刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル水利組合法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月十一日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
内務大臣 原 敬

法律第五十號 (官報 四月十三日)

水利組合法

第一章 總則

第一條 水利土功ニ關スル事業ニシテ特別ノ事情ニ依リ府縣其ノ他ノ地方公共團體ノ事業ト爲スコトヲ得サルモノアル場合ニ於テハ水利組合ヲ設置スルコトヲ得

第二條 水利組合ハ法人トス

第三條 水利組合ハ組合同規約ヲ設ケ組合ニ關スル重要ノ事項ヲ規定スヘシ  
組合同規約ハ之ヲ告示スヘシ其ノ改正アリタルトキ亦同シ

第四條 水利組合ハ分チテ左ノ二種トス

- 一 普通水利組合
- 二 水害豫防組合

第五條 普通水利組合ハ灌溉排水ニ關スル事業ノ爲設置スルモノトス

第六條 普通水利組合ハ組合事業ノ爲利益ヲ受クル土地ヲ以テ區域トシ其ノ區域内ニ於テ土地ヲ

所有スル者ヲ以テ組合員トス但シ舊慣アルモノハ其ノ舊慣ニ依リ區域ヲ畫スルコトヲ得

第七條 水害豫防組合ハ水害防禦ニ關スル事業ノ爲設置スルモノトス

第八條 水害豫防組合ハ水害ヲ受クヘキ土地ヲ以テ區域トシ其ノ區域内ニ於テ土地、家屋及組合規約ニ指定スル工作物ヲ所有スル者ヲ以テ組合員トス但シ舊慣アルモノハ其ノ舊慣ニ依リ區域ヲ畫スルコトヲ得

第九條 水害豫防組合ニ於テ其ノ區域全部ニ涉リ灌溉排水ニ關スル事業ノ必要アルトキハ組合員ノ議決ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ得テ其ノ事業ヲ兼營スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ灌溉排水ノ事業ニ關スル部分ニ付テハ普通水利組合ノ規定ヲ準用ス

第二章 組合ノ設置及廢止

第十條 水利組合ヲ設置セムトスルトキハ府縣知事ニ於テ組合區域ヲ指定シ關係地ノ郡長市町村長ノ内一人又ハ數人ニ創立委員ヲ命スヘシ但シ普通水利組合ノ設置ニ付テハ組合員タルヘキ者五人以上ノ申請又ハ組合事業ニ關係アル郡長又ハ市町村長ノ具申アル場合ニ限ル

第三十三條第三項ノ規定ハ創立委員ニ之ヲ準用ス

第十一條 創立委員ハ組合同規約案ヲ調製シ關係者ノ總會議ニ付スヘシ關係者百人以上アルトキハ府縣知事ノ許可ヲ得テ便宜總代人ヲ選ハシメ其ノ集會ヲ以テ總會議ニ充ツルコトヲ得  
總會議又ハ總代人會ノ議長ハ創立委員ヲ以テ之ニ充ツ創立委員數人アルトキハ府縣知事其ノ中一人ヲ指定ス

總會議又ハ總代人會ハ關係者又ハ總代人ノ三分ノ二以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス但シ特別ノ事情アルトキハ創立委員ハ府縣知事ノ定ムル所ニ依リ關係者又ハ總代人ノ代人



ヲ許スコトヲ得

總會議又ハ總代人會ノ議事ハ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル  
總會議費又ハ總代人會費其ノ他創立ニ關スル費用ハ組合設置ノ後組合費ヨリ之ヲ支辨スヘシ

第十二條 創立委員ハ組合規約ノ議決ヲ經タルトキ府縣知事ニ其ノ許可ヲ請フヘシ

第十三條 普通水利組合關係者ノ總會議又ハ總代人會ニ於テ議決シタル組合規約又ハ其ノ議決ノ  
方法法令ニ背キ又ハ公益ニ害アリト認ムルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ之ヲ再議ニ付シ仍其  
ノ議決ヲ改メサルトキハ内務大臣ノ指揮ヲ請フヘシ

水害豫防組合關係者ノ總會議若ハ總代人會成立セス又ハ其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セス又ハ議  
決スルモ其ノ議決公益ニ害アリト認ムルトキハ府縣知事ニ於テ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スル  
コトヲ得

第十四條 水利組合ハ組合規約ノ許可又ハ前條第二項ニ依ル組合規約ノ設定ニ依リ成立ス

前項ノ場合ニ於テハ府縣知事ハ組合設置ノ旨ヲ告示スヘシ

第十五條 水利組合ノ廢置分合又ハ區域ノ變更ハ普通水利組合ニ在リテハ組合會ノ議決又ハ協議  
ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ得テ之ヲ行ヒ水害豫防組合ニ在リテハ組合會ノ意見ヲ徵シ府縣知事之  
ヲ行フ

前項ノ場合ニ於テ組合規約ノ設定若ハ改正又ハ財産處分ヲ要スルトキハ組合會ノ議決又ハ協議  
ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ但シ水害豫防組合ニ於テ協議調ハサルトキハ府縣知事之ヲ定  
ム

水利組合ハ民法上ノ義務ヲ完了スルニ非サレハ之ヲ廢止スルコトヲ得ス

普通水利組合ノ區域ヲ變更スル場合ニ於テ新ニ組合區域ニ編入セラルル土地アルトキハ管理者

ハ其ノ土地ノ關係者ノ同意又ハ關係者ノ總會議若ハ總代人會ノ同意ヲ得ルヲ要ス

前項總會議又ハ總代人會ニ關シテハ第十一條ノ規定ヲ準用ス但シ創立委員ノ職務ハ管理者之ヲ  
行フ

第十六條 水利組合ノ廢置分合又ハ區域ノ變更アリタルトキハ府縣知事ハ之ヲ告示スヘシ

第三章 組合ノ會議

第十七條 水利組合ニ組合會ヲ置ク

第十八條 組合會議員ハ其ノ被選舉權アル者ニ就キ選舉人之ヲ選舉ス

組合會議員選舉人被選舉人ノ資格議員ノ定數任期及選舉ニ關スル事項ハ組合規約ヲ以テ之ヲ定  
ムヘシ

組合會議員ノ選舉ヲ終リタルトキハ管理者ハ直ニ選舉錄ノ謄本ヲ添ヘ之ヲ第一次監督官廳ニ報  
告スヘシ

當選者定リタルトキハ管理者ハ直ニ其ノ住所氏名ヲ告示シ併セテ之ヲ第一次監督官廳ニ報告ス  
ヘシ

組合會議員ノ選舉ニ付テハ衆議院議員選舉ニ關スル罰則ヲ準用ス

第十九條 選舉ノ規定ニ違反スルコトアルトキハ選舉ノ結果ニ異動ヲ生スルノ虞アル場合ニ限り

其ノ選舉ノ全部又ハ一部ヲ無効トス

當選者ニシテ被選舉權ヲ有セサルトキハ其ノ當選ヲ無効トス

第二十條 選舉人選舉又ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキハ選舉ニ關シテハ選舉ノ日ヨリ當選ニ



關シテハ告示ノ日ヨリ七日以内ニ之ヲ管理者ニ申立ツルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ管理者ハ十四日以内ニ組合會ノ決定ニ付スヘシ組合會ハ其ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ十四日以内ニ之ヲ決定スヘシ

前項組合會ノ決定ニ不服アル者ハ第一次監督官廳ニ訴願スルコトヲ得

第一次監督官廳ニ於テ選舉又ハ當選ノ效力ニ關シ異議アルトキハ選舉又ハ當選ノ報告ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ之ヲ處分スルコトヲ得

前項ノ處分アリタルトキハ其ノ前後ニ爲シタル異議ノ申立及組合會ノ決定ハ無効トス

本條第一次監督官廳ノ處分又ハ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ處分又ハ裁決ニ不服アル者ハ直ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

組合會議員ハ選舉又ハ當選ニ關スル異議ノ決定訴願ノ裁決確定シ又ハ判決アル迄ハ會議ニ列席シ議事ニ參與スルノ權ヲ失ハス

第二十一條 組合會議員ニシテ被選舉權ヲ有セサル者ハ其ノ職ヲ失フ其ノ被選舉權ニ關スル異議ハ組合會之ヲ決定ス

管理者ニ於テ組合會議員中被選舉權ヲ有セサル者アリト認ムルトキハ之ヲ組合會ノ決定ニ付スヘシ

本條組合會ノ決定ニ不服アル者ハ第一次監督官廳ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不服アル者ハ直ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十條第六項ノ規定ハ本條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十二條 前二條ニ規定スル異議ノ決定訴願ノ裁決及第二十條第三項ノ處分ハ直ニ之ヲ告示スヘシ

第二十三條 組合會ハ組合ニ關スル事件ヲ議決ス

組合會ノ議決スヘキ事件ノ概目左ノ如シ

- 一 組合規約ヲ設定改正スル事
  - 二 組合費ヲ以テ支辨スヘキ事業
  - 三 歲入出豫算ヲ定ムル事
  - 四 決算報告ヲ認定スル事
  - 五 法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料手数料加入金組合費及夫役現品ノ賦課徵收ニ關スル事
  - 六 不動産ノ管理處分及取得ニ關スル事
  - 七 積立基金ノ設置管理及處分ニ關スル事
  - 八 歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ拋棄ヲ爲ス事
  - 九 財産及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事
  - 十 組合吏員ノ身元保證ニ關スル事
  - 十一 組合ニ係ル訴願訴訟及和解ニ關スル事
- 第二十四條 組合會ハ組合ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閲シ管理者ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理議決ノ執行及出納ヲ検査スルコトヲ得



組合會ハ議員中ヨリ委員ヲ選舉シ管理者又ハ其ノ指定シタル吏員立會ノ上實地ニ就キ前項組合會ノ權限ニ屬スル事件ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十五條 組合會ハ管理者ヲ以テ議長トス管理者故障アルトキハ其ノ代理者議長ノ職務ヲ代理ス管理者及其ノ代理者共ニ故障アルトキハ臨時ニ議員中ヨリ假議長ヲ選舉スヘシ

組合會ハ組合ノ區域數市町村ニ涉ルモノニ在リテハ組合規約ヲ以テ議員中ヨリ議長副議長各一人ヲ選舉スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ議長故障アルトキハ副議長之ニ代リ議長副議長共ニ故障アルトキハ前項ノ例ニ依ル

前項選舉ニ關スル事項ハ組合規約ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

議員中ヨリ議長ヲ選舉スル組合ニ在リテハ議長ハ會議録ヲ添ヘ會議ノ結果ヲ管理者ニ報告スヘシ

第二十六條 管理者及其ノ委任又ハ囑託ヲ受ケタル者ハ會議ニ於テ議事ニ付辯明ヲ爲スコトヲ得

第二十七條 組合會ハ毎年一回通常會ヲ開キ其ノ他臨時ノ必要アル毎ニ臨時會ヲ開ク臨時會ニ付スヘキ事件ハ召集ノ告知ト共ニ之ヲ告知スヘシ但シ其ノ開會中急施ヲ要スル事件アルトキハ管理者ハ直ニ之ヲ其ノ會議ニ付スルコトヲ得

組合會ハ管理者之ヲ召集ス議員定數三分ノ一以上ノ請求アルトキハ管理者ハ之ヲ召集スヘシ管理者ハ必要アル場合ニ於テハ會期ヲ定メテ組合會ヲ召集スルコトヲ得

組合會ノ會議ハ公開ス但シ左ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

- 一 管理者ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ
- 二 議長ニ於テ傍聽禁止ノ必要アリト認メタルトキ

三 議員三人以上ノ發議ニ依リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

前項第三號ニ依ル發議ハ討論ヲ用井ス其ノ可否ヲ決スヘシ

召集ハ開會ノ日ヨリ少クトモ二日前ニ告知スヘシ但シ急施ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

組合會ハ管理者之ヲ開閉ス

第二十八條 組合會ハ議員定數ノ半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス但シ同一ノ事件ニ付召集再回ニ至ルモ仍半數ニ滿タサルトキ又ハ召集ニ應スルモ出席議員定數ヲ闕キ議長ニ於テ更ニ出席ヲ催告シ仍半數ニ滿タサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 組合會ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第三十條 組合規約ノ設定改正及普通水利組合ノ廢置分合又ハ區域ノ變更ニ關スル議決ハ議員定數ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第三十一條 組合會ノ職務權限及處務規程ニ關シテハ本章中規定スルモノノ外市制町村制ノ規定ヲ準用ス

第三十二條 特別ノ事情アル組合ニ於テハ府縣知事ハ組合會ヲ設ケス組合員ノ總會ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得但シ總會ニ出席スヘキ組合員ニ關シテハ組合規約ノ定ムル所ニ依ル

組合總會ニ關シテハ組合會ニ關スル規定ヲ準用ス

#### 第四章 組合ノ管理

第三十三條 府縣知事ハ水利組合關係地ノ郡長又ハ市町村長ノ内一人ヲ指定シ其ノ組合ノ事務ヲ管理セシムヘシ

府縣知事ニ於テ管理者ヲ指定シタルトキハ直ニ之ヲ告示スヘシ



管理者タル郡長又ハ市町村長故障アルトキハ其ノ代理者之ヲ代理ス  
組合ノ區域數市町村ニ涉ル場合ニ於テ選舉區又ハ選舉分會ヲ設ケタルトキハ各市町村長又ハ其ノ代理者ハ管理者ノ未ニ依リ議員選舉ニ關スル事務ヲ管理スヘシ組合員及組合費賦課物件ノ異動ニ關スル事務ニ付テモ亦同シ

第三十四條 組合ノ出納其ノ他會計事務ハ郡長管理者タル場合ハ郡長ノ指定シタル郡書記ヲシテ之ヲ掌ラシメ市町村長管理者タル場合ハ其ノ市町村收入役ヲシテ之ヲ掌ラシムヘシ  
特別ノ事情アル場合ニ於テハ管理者ニ於テ第三十六條ノ吏員中ニ就キ會計事務ヲ掌ル者ヲ定ムルコトヲ得

前項會計事務ヲ掌ル吏員ニ付テハ第一次監督官廳ノ認可ヲ受クヘシ  
第三十五條 組合ハ組合規約ヲ以テ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得

委員ノ組織選任任期等ニ關スル事項ハ組合規約ヲ以テ之ヲ定ムヘシ  
第三十六條 組合ハ書記技術員其ノ他ノ有給吏員ヲ置クコトヲ得

吏員ハ管理者之ヲ任免ス  
第三十七條 管理者ハ組合ヲ代表シ組合一切ノ事務ヲ擔任ス  
管理者ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

- 一 組合會ノ議決ヲ經ヘキ事件ニ付其ノ議案ヲ發シ及其ノ議決ヲ執行スル事
- 二 財産及營造物ヲ管理スル事
- 三 收入支出ヲ命令シ及會計ヲ監督スル事
- 四 證書及公文書類ヲ保管スル事

五 法令又ハ組合會ノ議決ニ依リ使用料手数料加入金組合費及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

第三十八條 管理者ハ組合吏員ヲ指揮監督シ其ノ任命ニ係ル組合吏員ニ對シテハ懲戒ヲ行フコトヲ得其ノ懲戒處分ハ譴責及五圓以下ノ過怠金トス

第三十九條 組合會ノ議決若ハ選舉其ノ權限ヲ越エ又ハ法令若ハ組合規約ニ背クト認ムルトキハ管理者ハ其ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シ其ノ執行ヲ要スルモノニ在リテハ其ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議ニ付シ又ハ再選舉ヲ行ハシメ仍議決ニ付テハ其ノ議決ヲ改メサルトキハ第一次監督官廳ノ指揮ヲ請フヘシ但シ場合ニ依リ再議ニ付セスシテ直ニ指揮ヲ請フコトヲ得

監督官廳ハ前項ノ議決又ハ選舉ヲ取消スコトヲ得但シ指揮ノ申請アリタルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
前二項郡長ノ處分ニ不服アル組合會ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決又ハ前二項府縣知事ノ處分ニ不服アル組合會ハ行政裁判所ニ出訴スコトヲ得

組合會ノ議決公益ヲ害シ又ハ組合ノ收支ニ關シ不適當ナリト認ムルトキハ管理者ハ其ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シ其ノ執行ヲ要スルモノニ在リテハ其ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議ニ付シ仍其ノ議決ヲ改メサルトキハ第一次監督官廳ノ指揮ヲ請フヘシ但シ場合ニ依リ再議ニ付セスシテ直ニ指揮ヲ請フコトヲ得

前項第一次監督官廳ノ處分ニ不服アル組合會ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アルトキハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不服アルトキハ直ニ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得



第四十條 組合會成立セス又ハ第二十八條但書ノ場合ニ於テ仍會議ヲ開クコト能ハサルトキハ  
 管理者ハ第一次監督官廳ニ具狀シテ指揮ヲ請ヒ其ノ議決スヘキ事件ヲ處分スルコトヲ得  
 組合會ニ於テ其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セサルトキハ前項ノ例ニ依ル  
 組合會ノ決定スヘキ事件ニ關シテハ前二項ノ例ニ依ル此ノ場合ニ於ケル管理者ノ處分ニ關シテ  
 ハ各本條ノ規定ニ準シ訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得  
 本條ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ組合會ニ報告スヘシ

第四十一條 組合會ノ權限ニ屬スル事件ニ關シ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テ組合會成立セス又ハ  
 管理者ニ於テ之ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキハ管理者ハ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ之ヲ  
 組合會ニ報告スヘシ

前項管理者ノ處分ニ關シテハ各本條ノ規定ニ準シ訴願及訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第四十二條 委員ハ管理者ノ指揮監督ヲ承ケ財産又ハ營造物ヲ管理シ其ノ他組合事務ノ一部ヲ調  
 査シ又ハ一時ノ委託ニ依リ事務ヲ處辨ス

第四十三條 吏員ハ管理者ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第四十四條 組合會議員及委員ハ職務ノ爲要スル費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得郡長又ハ市町村長  
 ニ於テ管理者タル職務ヲ行フ爲要スル費用第三十三條第四項ノ事務ヲ行フ爲要スル費用及郡書  
 記又ハ市町村收入役ニ於テ組合ノ會計事務ヲ行フ爲要スル費用ニ付亦同シ  
 吏員ニハ退隱料退職給與金死亡給與金及遺族扶助料ヲ支給スルコトヲ得

第四十五條 費用辨償額給料額旅費額及其ノ支給方法ハ組合會ノ議決ヲ經第一次監督官廳ノ許可  
 ヲ得テ之ヲ定ム

退隱料退職給與金死亡給與金遺族扶助料及其ノ支給方法ハ組合會ノ議決ヲ經內務大臣ノ許可ヲ  
 得テ之ヲ定ム

第四十六條 費用辨償給料旅費退隱料退職給與金死亡給與金及遺族扶助料ハ組合ノ負擔トス

第五章 組合ノ財務

第四十七條 組合ハ其ノ必要ナル費用及法律勅令ニ依リ組合ノ負擔ニ屬スル費用ヲ支辨スル義務  
 ヲ負フ

第四十八條 普通水利組合費ハ土地ニ對シテ之ヲ賦課シ水害豫防組合費ハ土地及家屋其ノ他第八  
 條ニ依ル工作物ニ對シテ之ヲ賦課スルモノトス但シ特別ノ事情アルモノハ土地ニ對シテノミ之  
 ヲ賦課スルコトヲ得

普通水利組合ニ於テハ新ニ區域内ニ編入スル土地ニ付組合費ノ外一時ノ加入金ヲ徴收スルコト  
 ヲ得

第四十九條 組合ハ其ノ事業ノ爲夫役現品ヲ組合員ニ賦課スルコトヲ得

水害豫防組合ニ在リテハ夫役ニ限リ其ノ區域内ノ總居住者ニ之ヲ賦課スルコトヲ得  
 夫役現品及其ノ代納ニ關スル規定ハ組合規約ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第五十條 非常災害ノ爲必要アルトキハ組合ハ他人ノ土地ヲ一時使用シ又ハ其ノ土石竹木其ノ  
 他ノ現品ヲ使用シ若ハ收用スルコトヲ得但シ其ノ損失ヲ補償スルコトヲ要ス

水害豫防組合ニ於テハ前項ノ外出水ノ爲危險アルトキニ限リ管理者警察官又ハ監督官廳ニ於テ  
 組合區域内ノ總居住者ヲシテ防禦ニ從事セシムルコトヲ得  
 第一項ニ依リ補償スヘキ金額ハ協議ニ依リ之ヲ定ム協議調ハサルトキハ鑑定人ノ意見ヲ徴シ府



縣知事之ヲ決定ス其ノ決定ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得  
第一項土地ノ一時使用ニ關スル組合ノ處分ニ不服アル者ハ第一次監督官廳ニ訴願シ其ノ裁決ニ  
不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得但シ府縣  
知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不服アル者ハ直ニ内務大臣ニ訴願スルコトヲ  
得

第五十一條 組合内ノ一部ニ對シ特ニ利益アル事件ニ關シテハ組合ハ不均一ノ賦課ヲ爲シ又ハ組  
合内ノ一部ニ對シ特ニ賦課スルコトヲ得

舊慣アルモノハ組合規約ヲ以テ特別ノ賦課方法ヲ定ムルコトヲ得

第五十二條 組合費ノ賦課ヲ免除スヘキモノニ關シテハ市町村稅ノ例ニ依ル

第五十三條 組合ハ其ノ營造物ヲ事業ノ妨害ト爲ラサル範圍内ニ於テ他ノ目的ニ使用セシムルコ  
トヲ得

前項ノ使用ニ付テハ使用料ヲ徵收スルコトヲ得

第五十四條 組合ノ區域敷市町村ニ涉ルトキハ各市町村ハ管理者ノ求ニ依リ其ノ市町村内ニ於ケ  
ル組合費其ノ他組合ノ收入ノ賦課徵收ヲ爲スヘシ

前項組合費其ノ他組合ノ收入ノ徵收ニ關シテハ組合規約ノ規定ニ依リ徵收金百分ノ四以内ヲ其  
ノ市町村ニ交付スルコトヲ得

第五十五條 市町村ハ避クヘカラサル災害ニ因リ既收ノ組合費其ノ他組合ノ收入ヲ失ヒタルトキ  
ハ其ノ納入義務ノ免除ヲ組合ニ請求スルコトヲ得  
組合ニ於テ前項ノ請求ニ應セサルトキハ市町村ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ十四日以内ニ組合

ノ第一次監督官廳ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アルトキハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アルト  
キハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不  
服アルトキハ直ニ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ對シテハ組合ヨリモ亦訴願ヲ提起スルコトヲ得

本條ノ裁決書ハ之ヲ市町村及組合ニ交付スヘシ

第五十六條 組合費其ノ他組合ノ收入ノ督促及滯納處分ニ關シテハ市町村稅ノ例ニ依ル

前項ノ場合ニ關シテハ第五十四條第一項ノ規定ヲ準用ス

第五十七條 組合費其ノ他組合ノ收入ノ督促ニ付テハ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

前條第二項ノ場合ニ於テハ前項ノ督促手数料ヲ其ノ市町村ニ交付スヘシ

組合ノ徵收金ハ市町村ノ徵收金ニ次テ先取特權ヲ有シ其ノ追徵還付及時效ニ付テハ國稅ノ例ニ  
依ル

第五十八條 管理者ハ組合費ノ賦課ヲ受ケタル者ノ中特別ノ事情アル者ニ對シ會計年度内ニ限リ  
其ノ納付ノ延期ヲ許スコトヲ得其ノ年度ヲ越エル場合ハ組合會ノ議決ヲ經ヘシ

管理者ハ特別ノ事情アル者ニ限リ組合會ノ議決ヲ經テ組合費ヲ減免スルコトヲ得

第五十九條 組合費及夫從現品ノ賦課ヲ受ケタル者其ノ賦課ニ付違法又ハ錯誤アリト認ムルトキ  
ハ賦課令狀ノ交付後三月以内ニ管理者ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

加入金使用料及手数料ノ徵收ニ付テモ亦前項ノ例ニ依ル

本條ノ異議ハ組合會ノ決定ニ付スヘシ其ノ決定ニ不服アル者ハ第一次監督官廳ニ訴願シ其ノ裁  
決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但



シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不服アル者ハ直ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

組合費其ノ他組合ノ收入ノ滞納處分ニ不服アル者ハ第一次監督官廳ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ裁決ニ不服アル者ハ直ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

組合費其ノ他組合ノ收入ノ滞納處分中差押物件ノ公賣ハ處分ノ確定ニ至ル迄執行ヲ停止ス

第六十條 組合ハ特定ノ目的ノ爲積立基金ヲ設クルコトヲ得

第六十一條 組合ハ其ノ事業ノ關係上必要アル場合ニ於テハ寄附又ハ補助ヲ爲スコトヲ得

第六十二條 組合ハ其ノ負債ヲ償還スル爲又ハ組合永久ノ利益トナルヘキ支出ヲ要スル爲又ハ天災事變等ノ爲已ムヲ得サル場合ニ限り組合債ヲ起スコトヲ得

組合債ヲ起スニ付組合會ノ議決ヲ經ルトキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ニ付議決ヲ經ヘシ

組合ハ豫算内ノ支出ヲ爲ス爲本條ノ例ニ依ラス一時ノ借入金ヲ爲スコトヲ得

前項ノ借入金ハ其ノ會計年度内ノ收入ヲ以テ償還スヘシ

第六十三條 管理者ハ毎會計年度ノ歲入出豫算ヲ調製シ會計年度前通常組合會ノ議決ニ付スヘシ

管理者ハ組合會ノ議決ヲ經テ既定豫算ノ追加又ハ更正ヲ爲スコトヲ得

組合ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

第六十四條 組合費ヲ以テ支辨スル事件ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其ノ費用ヲ支出スヘキモノハ組合會ノ議決ヲ經テ其ノ年期间各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲ス

コトヲ得

第六十五條 豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツル爲豫備費ヲ設クヘシ

豫備費ハ組合會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第六十六條 豫算ハ議決ヲ經タル後直ニ之ヲ第一次監督官廳ニ報告シ且其ノ要領ヲ告示スヘシ

第六十七條 組合會ニ於テ豫算ヲ議決シタルトキハ管理者ヨリ其ノ謄本ヲ組合ノ會計事務ヲ掌ル官吏吏員ニ交付スヘシ

會計事務ヲ掌ル官吏吏員ハ管理者又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又命令ヲ受クルモ支出ノ豫算ナキトキ又ハ豫備費支出及費目流用其ノ他財務ニ關スル規定ニ依ラサルトキ亦同シ

第六十八條 組合ノ支拂金ニ關スル時効ニ付テハ政府ノ支拂金ノ例ニ依ル

第六十九條 組合ノ出納ハ翌年度六月三十日ヲ以テ閉鎖ス

決算ハ出納閉鎖後一月以内ニ證書類ヲ併セテ會計事務ヲ掌ル官吏吏員ヨリ之ヲ管理者ニ提出スヘシ管理者ハ之ヲ審査シ意見ヲ付シテ次ノ通常會迄ニ組合會ノ認定ニ付スヘシ

決算及其ノ認定ニ關スル組合會ノ議決ハ之ヲ第一次監督官廳ニ報告シ且決算ハ其ノ要領ヲ告示スヘシ

決算ノ認定ニ關スル會議ニ於テハ管理者及其ノ代理者共ニ議長タルコトヲ得ス

第七十條 豫算調製ノ式及費目流用其ノ他財務ニ關シ必要ナル規定ハ内務大臣之ヲ定ム

第六章 組合ノ聯合

第七十一條 水利組合ニ於テ共同事業ヲ爲スノ必要アルトキハ其ノ協議ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ



得テ水利組合ノ聯合ヲ設クルコトヲ得  
水利組合聯合ハ之ヲ法人トス

水利組合聯合ニシテ其ノ聯合組合ノ數ヲ増減シ又ハ共同事業ノ變更ヲ爲サムトスルトキハ組合ノ協議ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ其ノ聯合ヲ解カムトスルトキ亦同シ  
水利組合聯合ニ關シテハ水利組合ニ關スル規定ヲ準用ス其ノ準用シ難キ事項及特ニ必要ナル事項ハ内務大臣ノ許可ヲ得テ府縣知事之ヲ定ム

第七章 組合ノ監督

第七十二條 組合ハ第一次ニ於テ郡長之ヲ監督シ第二次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第三次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス但シ組合ノ區域郡市若ハ數郡ニ涉リ又ハ市内ニ止ル場合及郡内ニ止ルモ郡長管理著タル場合ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス  
監督官廳ハ組合事務ノ監督上必要ナル命令ヲ發シ處分ヲ爲スコトヲ得  
上級監督官廳ハ下級監督官廳ノ組合事務ニ關シテ爲シタル命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ之ヲ取消スコトヲ得

第七十三條 本法ニ規定スル異議ノ申立又ハ訴願ノ提起ハ處分ヲ爲シ又ハ決定書若ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル日ヨリ其ノ交付ヲ受ケサル者ハ告示ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ爲スヘシ但シ本法中別ニ期間ヲ定メタルモノハ此ノ限ニ在ラス

本法ニ規定スル行政訴訟ハ處分ヲ爲シ又ハ裁決書ノ交付ヲ受ケタル日ヨリ其ノ交付ヲ受ケサル者ハ告示ノ日ヨリ二十一日以内ニ之ヲ提起スヘシ  
本法ニ規定スル異議ノ決定ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ理由ヲ付シ之ヲ申立人ニ交付スヘシ

本法ニ規定スル異議ノ申立ニ關スル期間ノ計算ニ付テハ訴願法ノ規定ニ依リ  
異議ノ申立アルモ處分ノ執行ハ之ヲ停止セス但シ行政廳ハ其ノ職權ニ依リ又ハ關係者ノ請求ニ依リ必要ト認ムルトキハ之ヲ停止スルコトヲ得

第七十四條 監督官廳ハ必要アル場合ニ於テハ期間ヲ定メテ組合會ノ停會ヲ命スルコトヲ得

第七十五條 内務大臣ハ組合會ノ解散ヲ命スルコトヲ得

組合會解散ノ場合ニ於テハ三月以内ニ議員ヲ選舉スヘシ

第七十六條 組合ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命スル所ノ費用ヲ豫算ニ載セサルトキハ第一次監督官廳ハ理由ヲ示シテ其ノ費用ヲ豫算ニ加フルコトヲ得

組合又ハ管理者其ノ他ノ官吏吏員ニ於テ執行スヘキ事件ヲ執行セサルトキハ第一次監督官廳ニ於テ之ヲ執行スルコトヲ得但シ其ノ費用ハ組合ノ負擔トス

本條ノ處分ニ不服アル組合又ハ管理者其ノ他ノ官吏吏員ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ府縣知事カ第一次監督官廳タル場合ニ於テ其ノ處分又ハ裁決ニ不服アルトキハ直ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十七條 組合ニ於テ負債ヲ起シ竝起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定メ又ハ變更セムトスルトキハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クヘシ但シ第六十二條第三項ノ借入金ハ此ノ限ニ在ラス

第七十八條 左ニ掲クル事件ハ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

- 一 組合規約ヲ設定改正スル事
- 二 不動産ノ管理及處分ニ關スル事



三 不均ノ賦課ヲ爲シ又ハ組合内ノ一部ニ對シ特ニ賦課ヲ爲ス事  
 四 加入金使用料手數料ヲ新設シ増額シ又ハ變更スル事  
 五 積立基金ノ設置管理及處分ニ關スル事  
 六 寄附及補助ヲ爲ス事  
 七 繼續費ヲ定メ又ハ變更スル事  
 第七十九條 組合ノ事務ニ關シ監督官廳ノ許可ヲ受クヘキ事件ニ付テハ監督官廳ハ許可申請ノ趣旨ニ反セスト認ムル範圍内ニ於テ更正シテ許可ヲ與フルコトヲ得  
 第八十條 組合ノ事務ニ關シ監督官廳ノ許可ヲ受クヘキ事件中其ノ輕易ナルモノハ命令ノ規定ニ依リ其ノ許可ノ職權ヲ下級監督官廳ニ委任スルコトヲ得  
 第八十一條 監督官廳タル府縣知事郡長ハ第三十五條ノ委員及第三十六條ノ吏員ニ對シ懲戒ヲ行フコトヲ得其ノ懲戒處分ハ譴責二十五圓以下ノ過怠金及解職トス  
 郡長ノ行ヒタル解職ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其ノ裁決又ハ府縣知事ノ行ヒタル解職ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得  
 府縣知事ハ吏員ノ解職ヲ行ハムトスル前其ノ停職ヲ命シ且場合ニ依リ給料又ハ報酬ヲ支給セシメサルコトヲ得  
 懲戒ニ依リ解職セラレタル者ハ二年間水利組合ノ公職ニ選舉セラレ又ハ任命セララルコトヲ得ス  
 第八十二條 組合吏員ノ服務紀律賠償責任身元保證及事務引繼ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第八章 雜則

第八十三條 本法ノ規定ニ依リ初テ議員ヲ選舉スル場合ニ於テ組合會ノ議決スヘキ事項ハ其ノ成立ニ至ル迄管理者ニ於テ之ヲ行フヘシ  
 第八十四條 本法ノ規定ニ依リ府縣知事ノ職權ニ屬スル事件ニシテ道府縣ニ涉ルモノアルトキハ關係府縣知事ノ具狀ニ依リ内務大臣ニ於テ其ノ事件ヲ管理スヘキ府縣知事ヲ指定スヘシ  
 第八十五條 本法ハ市制町村制ヲ施行セサル地ニハ之ヲ施行セス勅令ヲ以テ別ニ其ノ制ヲ定ム  
 附 則  
 第八十六條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
 水利組合條例ハ之ヲ廢止ス  
 第八十七條 本法施行ノ際現ニ存スル水利組合ハ本法ニ依リ設置シタルモノト看做ス  
 第八十八條 水利組合條例ニ依リ爲シタル諸般ノ行爲ハ仍其ノ效力ヲ有ス  
 第八十九條 水利組合條例ニ依リ爲シタル處分ニ對スル異議訴願又ハ訴訟ニ關シテハ水利組合條例ニ依ル  
 第九十條 本法施行ノ際現ニ存スル舊町村會又ハ水利土功會ニシテ其ノ目的トスル事業カ本法ノ規定ニ抵觸セサルトキハ之ヲ本法ノ規定ニ依リ設置シタル水利組合ト看做ス  
 前項ノ場合ニ於テ從來ノ吏員及議員ハ總テ其ノ職ヲ失フモノトス  
 第一項ノ水利組合及其ノ管理者ハ府縣知事ニ於テ直ニ之ヲ告示スヘシ  
 前項ノ告示アリタルトキハ管理者ハ遲滯ナク組合規約ヲ定メ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル肥料取締法改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月十一日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
農商務大臣 松岡康毅

法律第五十一號(官報四月十三日)

肥料取締法

- 第一條 本法ニ於テ肥料ト稱スルハ植物ノ營養ニ供用スル物料ヲ謂フ
- 第二條 肥料ノ製造、輸入、移入又ハ賣買ヲ營業ト爲サムトスル者ハ地方長官ノ免許ヲ受クヘシ  
肥料ノ調合又ハ製造業ニ伴フ肥料ト爲ルヘキ副産物ノ産出ハ之ヲ肥料ノ製造ト看做ス  
前項ノ製造業及副産物ハ主務大臣之ヲ指定ス
- 第三條 前條第一項ノ免許願書ニハ製造者ニ在リテハ製造場ノ位置、製造及藏置ニ關スル設備、肥料ノ名稱及製造方法ヲ、輸入者、移入者又ハ賣買者ニ在リテハ肥料ノ名稱及營業所ノ位置ヲ記載スヘシ  
前項ニ依リ願書ニ記載シタル事項ヲ變更セムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ
- 第四條 肥料營業者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ肥料ニ保證票ヲ添附スヘシ
- 第五條 當該官吏ハ肥料營業者、運送業者又ハ倉庫業者ノ店舗、倉庫、工場、船車等ニ臨檢シ物品及帳簿其ノ他ノ書類ニ就キ検査ヲ爲シ必要ナル分量ニ限り無償ニテ肥料又ハ製造原料ヲ收去スルコトヲ得

トヲ得

- 當該官吏臨檢ノ際肥料ニ關スル犯罪アリト認ムルトキハ搜索ヲ爲シ又ハ犯罪ノ事實ヲ證明スヘキ物件ノ差押ヲ爲スコトヲ得
- 臨檢、搜索及差押ニ關シテハ間接國稅犯則者處分法ヲ準用ス
- 第六條 肥料營業ノ免許ヲ受ケタル者正當ノ理由ナクシテ其ノ免許ノ日ヨリ一年以内ニ開業セス又ハ一年以上其ノ營業ヲ休止シタルトキハ地方長官ハ其ノ免許ヲ取消スコトヲ得
- 第七條 肥料營業者本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキ又ハ公益上必要ト認ムルトキハ地方長官ハ免許ヲ取消シ又ハ營業ヲ停止若ハ制限スルコトヲ得
- 前項ノ場合ニ於テ地方長官ハ其ノ營業者ニ對シ三年ヲ超過セサル期間肥料營業ニ關スル一切ノ行爲ヲ禁スルコトヲ得
- 第八條 植物ノ營養ニ供用スル物料ニシテ地方長官ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ得テ指定シタルモノハ之ヲ他ノ用途ニ供スル爲製造、輸入、移入又ハ賣買スル場合ニ限リ本法ヲ適用セス
- 第九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ二千圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ肥料及原料ハ刑法第十九條ノ物ニ非サル場合ト雖之ヲ沒收スルコトヲ得
  - 一 詐欺ノ行爲ヲ以テ免許ヲ受ケタル者
  - 二 肥料ヲ偽造シ又ハ人ヲ欺罔スルノ目的ヲ以テ肥料ニ他物ヲ混和シタル營業者
  - 三 偽造シ又ハ人ヲ欺罔スル目的ヲ以テ他物ヲ混和シタル肥料ヲ輸入、移入又ハ授受シタル營業者
  - 四 肥料ニ虛偽ノ保證票ヲ添附シタル營業者又ハ他人ノ保證票若ハ他人ノ保證票ヲ有スル容器



ヲ他ノ肥料ニ使用シタル營業者

五 虚偽ノ保證票ヲ添附シタル肥料又ハ他人ノ保證票若ハ他人ノ保證票ヲ有スル容器ヲ使用シタル肥料ヲ輸入、移入又ハ授受シタル營業者

第十條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ千圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處シ第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ其ノ肥料及原料カ刑法第十九條ノ物ニ非サルトキト雖之ヲ沒收スルコトヲ得

- 一 免許ヲ受ケスシテ肥料營業ヲ爲シタル者
- 二 第七條ニ依ル命令ニ違反シタル者
- 三 免許又ハ認可ヲ受ケサル製造方法ニ依リ肥料ヲ製造シタル營業者
- 四 免許又ハ認可ヲ受ケサル肥料ヲ製造、輸入、移入又ハ賣買シタル營業者
- 五 認可ヲ受ケスシテ製造場ノ位置又ハ製造若ハ藏置ニ關スル設備ヲ變更シタル營業者

第十一條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ二百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

- 一 第四條ニ依ル保證票ヲ添附セサル營業者
- 二 第五條ニ依ル處分ヲ拒ミタル者

第十二條 肥料營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 肥料營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第十四條 明治三十三年法律第五十二號ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行前ニ於ケル肥料ノ製造販賣又ハ販賣ノ免許ノ效力ハ明治四十一年十二月三十一日限トス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十一年四月十三日

- 内閣總理大臣 侯爵西園寺公望
- 外務大臣 伯爵林 董
- 司法大臣 男爵千家尊福

法律第五十二號 (官報 四月十四日)

第一條 明治三十二年法律第七十號第九條乃至第十二條ノ規定ハ滿洲ニ於ケル領事裁判ニ之ヲ適用セス

第二條 滿洲ニ於ケル領事官ノ豫審ヲ爲シタル重罪ノ公判ハ關東都督府地方法院之ヲ管轄ス

第三條 滿洲ニ駐在スル領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ關東都督府地方法院ヲシテ其ノ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條 滿洲ニ於ケル領事官ノ爲シタル裁判及前二條ニ依リ關東都督府地方法院ノ爲シタル裁判



ニ對スル上訴ハ終審トシテ關東都督府高等法院之ヲ管轄ス  
附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
本法施行前受理シタル訴訟事件及非訟事件ニ關シテハ總テ從前ノ例ニ依ル

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル公證人法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治四十一年四月十三日

內閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
司法大臣 男爵千家尊福

法律第五十三號 (官報四月十四日)  
公證人法

第一章 總 則

第一條 公證人ハ當事者其ノ他ノ關係人ノ囑託ニ因リ法律行為其ノ他私權ニ關スル事實ニ付公正  
證書ヲ作成シ及私署證書ニ認證ヲ與フルノ權限ヲ有ス

第二條 公證人ノ作成シタル文書ハ本法及他ノ法律ノ定ムル要件ヲ具備スルニ非サレハ公正ノ效  
力ヲ有セズ

第三條 公證人ハ正當ノ理由アルニ非サレハ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス  
第四條 公證人ハ法律ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外其ノ取扱ヒタル事件ヲ漏泄スルコトヲ得ス

但シ囑託人ノ同意ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條 公證人ハ他ノ公務ヲ兼ネ、商業ヲ營ミ又ハ商會社若ハ營利ヲ目的トスル社團法人ノ代  
表者若ハ使用人ト爲ルコトヲ得ス但シ司法大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第六條 公證人其ノ職務ノ執行ニ付囑託人其ノ他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其ノ損害カ公證人  
ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生シタル場合ニ限リ之ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第七條 公證人ハ囑託人ヨリ手数料、日當及旅費ヲ受ク  
公證人ハ前項ニ記載セタルモノヲ除クノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ其ノ取扱ヒタル事件ニ關シ  
テ報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第八條 區裁判所ノ管轄區域内ニ公證人ナキ場合又ハ公證人其ノ職務ヲ行フコト能ハサル場合ニ  
於テハ司法大臣ハ其ノ區裁判所ヲシテ管轄區域内ニ於テ公證人ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ公證人ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第九條 本法及他ノ法令中公證人ノ職務ニ關スル規定ハ公證人ノ事務ヲ取扱フ判事又ハ裁判所書  
記ニ之ヲ準用ス但シ第七條ニ依ル手数料、日當及旅費ハ國庫ノ收入トス

第二章 任免及所屬

第十條 公證人ハ地方裁判所ノ所屬トス

各地方裁判所所屬公證人ノ員數ハ區裁判所ノ管轄區域毎ニ司法大臣之ヲ定ム

第十一條 公證人ハ司法大臣之ヲ任シ及其ノ屬スヘキ地方裁判所ヲ指定ス  
第十二條 左ノ條件ヲ具備スル者ニ非サレハ公證人ニ任セララルコトヲ得ス



一 帝國臣民ニシテ成年以上ノ男子タルコト  
 二 一定ノ試験ニ合格シタル後六月以上公證人見習トシテ實地修習ヲ爲シタルコト  
 試驗及實地修習ニ關スル規程ハ司法大臣之ヲ定ム  
 第十三條 判事、檢事又ハ辯護士タルノ資格ヲ有スル者ハ試験及實地修習ヲ經スシテ公證人ニ任  
 セラルルコトヲ得

第十四條 左ニ掲クル者ハ公證人ニ任セラルルコトヲ得ス

- 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者但シ二年以下ノ禁錮ニ處セラレタル者ニシテ刑ノ執行ヲ終  
 リ又ハ其ノ執行ヲ受クルコトナキニ至リタルトキハ此ノ限ニ在ラス
- 二 破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者
- 三 禁治產者及準禁治產者
- 四 懲戒ノ處分ニ因リ免官若ハ免職セラレタル者又ハ辯護士法ニ依リ除名セラレタル者ニシテ  
 免官、免職又ハ除名後二年ヲ經過セサル者

第十五條 司法大臣ハ左ノ場合ニ於テ公證人ヲ免スルコトヲ得

- 一 公證人免職ヲ願出テタルトキ
  - 二 公證人期間内ニ身元保證金又ハ其ノ補充額ヲ納メサルトキ
  - 三 公證人身體又ハ精神ノ衰弱ニ因リ其ノ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキ
- 前項第三號ノ場合ニ於テハ所屬地方裁判所ヲ管轄スル控訴院ニ於ケル懲戒委員會ノ議決ヲ經ヘ  
 シ

第十六條 公證人第十四條第一號乃至第三號ニ該當スルニ至リタルトキハ當然其ノ職ヲ失フ

第三章 職務執行ニ關スル通則

第十七條 公證人ノ職務執行ノ區域ハ其ノ所屬地方裁判所ノ管轄區域ニ依ル

第十八條 公證人ハ司法大臣ノ指定シタル地ニ其ノ役場ヲ設クヘシ  
 公證人ハ役場ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ要ス但シ事件ノ性質カ之ヲ許ササル場合又ハ法令ニ  
 別段ノ定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 公證人ハ其ノ役場内ニ住居スヘシ但シ司法大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス  
 納ムヘシ

身元保證金ノ額ハ土地ノ情況ニ從ヒ三百圓以上千圓以下ノ範圍内ニ於テ司法大臣之ヲ定ム  
 身元保證金ノ額ニ不足ヲ生シ補充ノ命令ヲ受ケタルトキハ其ノ命令ヲ受ケタル日ヨリ三十日以  
 内ニ其ノ不足額ヲ補充スヘシ

第二十條 公證人身元保證金ヲ納メサル間ハ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス  
 第二十一條 身元保證金ヲ還付スヘキ場合ニ於テハ其ノ身元保證金ノ上ニ權利ヲ有スル者ニ對シ六  
 月ヲ下ラサル期間内ニ申出ツヘキ旨ヲ公告スヘシ

身元保證金ハ前項ノ期間ヲ經過スルニ非サレハ之ヲ還付セス  
 身元保證金ハ他ノ公課及債權ニ先チテ之ヲ第一項ノ公告費用ニ充ツ

第二十二條 公證人ハ其ノ職印ノ印鑑ニ氏名ヲ自署シ之ヲ所屬地方裁判所ニ差出スヘシ  
 公證人前項ノ印鑑ヲ差出ササル間ハ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス  
 公證人ハ左ノ場合ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス